Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

G21
G7
U0004662

ナ1M-28

201
T815

文學博士 坪井九馬三著

改訂
增補

史學研究法

東京 京文社出版

G21 G7

國立國會圖書館藏書

國立國會圖書館
25. 1. 24

U 4662

第二版序

史學は人事に關する眞面目なる一科學なり、固より時好を追ひ流行に奔るものにあらず、唯夫れ人事に關するが故に人を論ず、人を論ずるが故に心理に基く、而も人には靈長と動物との二方面あり、兩者常に離れず互に相依りて其仕事を成す、是を以て精神的事業と謂ふも純精神的事業なく、物質的事業と謂ふも亦純物質的事業あることなし、其顯象たる宛も刺繡畫を觀るが如きものあり。予の研究法は人の兩方面に對等の觀察を施すを以て主眼と爲すもの、要するに確實なる證據物件を收むるを以て研究の鍵鑰と爲す、其物體の精神的なると物質的なるとは敢て問ふ所にあらず、廣く索め博く收め審に調べ愼で選む、之を是れ史學の本務とす。本書第二版成るに當り之を書して弁言と爲すと云爾。

大正二年八月

著者識

改版序

予が史學研究法を公にしたるは二十幾年の昔にて、其の第二版出てゝより又十幾年に罷り成る。世の人々は決めて此の書を獨活の枯木と觀らるゝことと思ひゐましたに、書肆京文社は其の第三版を出さむことを勸めらる、さすれば獨活の枯木にてはなく、無何有鄕の樗樹の蘖なりしかと意外の想ひをいたします。樗樹の蘖や伐つても材木とならず燒いても使へる木炭とならず、三文の値打さへなき代物なれば、此の世智辛き世の暮し向きに、顧るもの絕えてなきはずなるに、世の人々の中には史學に世外の樂園あるを忘れず樗樹の木蔭に憩ひ清風に浴みして、古今東西に興亡したる國家の盛衰を考査し英傑の業績を評隲し學藝の隆替を觀察し社會の推移を窺測して、陶然神遊し不言の間に蘊蓄を積むを以て娛樂となすもの鮮なからざるを覺りまして、欣喜措くところを知らず、樹幹の尙ほ健全なるまゝに枯枝を少々取除き新芽を少々ふかし、樹の姿は相替らず自然に任せ春風駘蕩の砌行樂の栞といたします。

大正十五年四月

坪井九馬三しるす

改訂增補

史學研究法目次

一　總說

序論……一
歷史の種類……一六
第一　物語……一七
第二　かゞみ……二一
第三　史學……二四
史學の定義……二八
史學の區分……三七
第一　時による區分……四七
第二　處による區分……五〇

二　史料編

史學の材料……六二

史學の補助學科……六六

第一　言語學……七〇

第二　古文書學……七八

甲　古文書の材料……八八

乙　古文書の印章……一〇三

丙　古文書の言語……一一二

丁　古文書の日附……一一六

第三　地理學……一一九

甲　歴史地理學……一二一

乙　政治地理學……一二三

一　歴史地理學　就ての實例……一二四

二　政治地理學に就ての實例……一四〇

第四　年代學……一五一

第五　考古學……一六八

第六　系譜學……一九四

第一例（カロリンガ朝の先祖の系圖）……二〇一

第二例（足利氏の系圖）……二〇四

第三例（後高麗王氏の系圖）……二〇七

第四例（一個人の生殖力及び性質遺傳を示す系圖）……二〇八

第五例（明君、賢君、名將等の遺傳系圖）……二一五

第六例（等親關係と相續法を示す系圖）……二一六

第七例（氏名詐稱）……二一六

第七　古泉學……二二〇

三　考證編

總論……二三二

外部の批判……二三四

第一　贋造……二三五

一　地理……二三七
二　古器物……二三九
三　古文書、古記錄……二四三
四　神話、傳說、雜說……二七二
五　逸話……二七九
六　覺書……二八二
七　系圖……二八四
○第二　攙入、脫漏、模樣變、錯簡……二八八
内部の批判……二九八
○第一　可然程度……二九八
イ　確實……三〇二
ロ　半確實……三〇三
ハ　未詳……三〇五
ニ　不審……三〇七
ホ　不確實……三〇九
○第二　史料の系統……三一二
イ　史料の製作年代……三一三

ロ　史料の製作場所……三一五
ハ　史料の製作人物……三一六
第三　史料の等級……三二一
○第四　史料の分析……三二四
イ　二個以上の史料の場合……三二五
ロ　唯一史料の場合……三六一
史料の整理……三七〇

四　史論編

總論……三七四
解釋……三七七
綜合……三九〇
復活……三九四
史學の根本條件……四〇一

第一　物理條件……四〇四
甲　人間の狀態に及ぼす影響……四〇四
乙　人間の意志に及ぼす影響……四〇五
第二　心理條件……四〇九
甲　個人心理條件……四〇九
乙　社會心理條件……四一一
丙　國民心理條件……四一三
第三　文化條件……四一五
甲　學藝……四一五
乙　制度……四一九
丙　經濟……四二〇
理論史學……四二六

改訂增補史學研究法目次　終

改訂增補 史學研究法

文學博士　坪井九馬三著

一　總說

序論

史學と申すのは古い漢語でありまして、シナでは歷代史學、通常約めて歷史といふものと同樣の意義に用ひて居ります。しかし我等の用ひますところでは單に歷史と申すよりは、すこし意義をむづかしくしまして、科學的の研究方法によつて得たる所の史學を申すことに致して居ります。

で史學と我等が申すものは、勿論世間の人々も同樣に解釋して居るだらうと思ふ通り、過去の社會に於て人間がはたらき、又考へた結果のあらはれ居る所のものを研究する學問でありまして、これらの過去の社會に於ける人間のはたらきは、孰れもそれ〴〵の證據物に徵して研究してゆくのであります。隨つて證據物がゆたかに殘つて居れば殘つて居るだけ、その時代の史學をくわしく知ることが出

來、それか甚だ缺乏して居れば思ひの外によくわからぬものであります。而してその證據物が多く殘つて居るか又少く殘つて居るかといふことは、いろ〳〵の事情によつて決しまることで、何時でも一時代を通じて平等に證據物が殘つて居るといふことではありません、ある時代のことはよくわかるが、ある時代のことは殆んどまるでわからぬといふことが出來てくる、これ實に已むを得ざる事でありまして、之に對して補ひをつける方法といふものはまだ考へ出されませぬ。これは獨り史學ばかりでなく、すべての科學といふものは皆さうで、證據物の揃つて居る場合にはくわしく出來ますが、證據物の揃つて居ない時には不完全に終るすべての科學皆さうであります。

しかし史學といふものゝ性質は、かう申したばかりでは誤解を來す患がありますから、尙一層史學の性質を明にしませうならば、それに先だつて、まづこの人間といふもの、社會といふもの、これはいかなるものかといふことを知らねばなりませぬ。

まづ人間から說明しませうに、人間といふものは、生れながらに平等には生れて居りませぬ、天稟といふものが既に違つて居ります。しかし多くの人間を一まとめにして考へて見ますと、まづは大同小異といふべきで、その天稟は違ひはするが非常の相違があるといふは極々稀なことで、所謂千人にすぐれ萬人にまさるといふ英傑は、どこの歷史をみても容易にあらはれて來ないといふは、そこにある。果してさうであるとすれば、まづ以て同じほどの識力の範圍を持つて生れて居る人間であります

から、それらの人間が集つてなす働作（しごと）といふものは、まづ一人の人間がいかほどの識力を持つて居るかといふことを積算して見ればよくわかる。非凡な人は時々は出るが滅多に出ませぬから、それは除外例として置いて宜しい。かくの如き普通の人間平均の識力を知るには、どうしたらよいかと申しまするに、抑人間が生れたその時といふものは、生きて居る必要からして、自然に犬猫と同じく食ふことだけは知つて居ますが、その餘のことは何も知りませぬ。それが段々生長してゆくに隨つて父兄をはじめ周圍の人々の氣風に養成せられてゆくので、つまりそれらの人々のすることをまねる。それが更に生長すれば全くの他人に觸れ初める。さうしますと他人の意向、感情などを知り初めまして、段々と生長するに隨つて益々多くの他人に接して、所謂其の時代の風潮といふものに接する、即ち生長すれば、その一時代に於ける一般社會の人間と大同小異の人間となるのであります。でありますから、人間の肉體を產むものは父母でありますが、その性情をなすものは過古幷に其時代の社會であります。社會ばかりとは一概にいへませんが、まづ社會が重なるものであります、斯くしてつくられるのが個人の性情であります。

人間は動物の一つであることはアリストテレスこのかたの定說でありまして、極めて意氣地のない動物で、實に弱いものであります。先づ人間ははだか蟲であるから着物を着ねばならぬ、熱帶ならいざ知らず、とにかく着物を着なければならぬ、これがまづ犬猫に劣つて居る。次にからだ全體の構造

も他の動物よりは餘程弱くて、充分注意に注意を加へねば、風をひく、怪我をする、病氣に取り附かれる、少し調子が狂へば死んで了ふ、一夜寢なければ疲れて何事も手につかぬ、常に養生をつとめて居らねばならぬ、極て死に易い動物であります、まことに意氣地のない動物であります。さてかくの如き動物がいろ〳〵の事を考へるので、その考へるもとゝいふは食物、人間が食物を食へば、それが胃と腸とで消化せられて次で血となり脂肪となりその他いろ〳〵のものになつて、からだ中の器官にゆきわたつて、それで人間が活動していろ〳〵の事を考へたりする。卽ちもとは食物がいろ〳〵の動力とかわつて出るのであるから、人間の考といふものは、いかにしても食物の變形といはざるを得ぬ。その食物の變形なる人間の考といふものは、哲學者の所謂自由意識で、如何なる事でも勝手に工夫し、どの樣な事でも氣儘に考へ出してもそれはお構ひなしであるが、その考を實際に行はうとしたならば果してなし得るか、いかにといふに、野蠻人ならば山に林に散在して別に抑へるといふ人もないから、考へたことは或は自由に決行することも出來やうが、社會をなしてその社會に生存して居る人間は、社會の程度、卽ち一時代の他の人々が默許してくれる範圍内でなくては出來ぬ、非常に束縛されて居る、考へた事の百分一も自由に決行することは出來難いのである。これは社會組織の上からして已むを得ぬことで、死んで了ふ積なら宜いが、生きてこの世に居やうと思へば、厭でも應でも社會の規則に從はなければならぬのであります。まことに意氣地のない話で、かういふ所は犬猫などの方が勝つて居る、人は萬物の靈長とか神の權現などゝ威張れた譯ではないのである。

又すべての動物は、皆活きること、又種をつゞけることをつとめる、人間とてもそのためにいろいろの苦しみをしながらも、何でも命がものだねとはたらく次第であります。斯く人々は生き長らへむが爲に奔走して居る次第ゆゑ、自然と自分の本意で、ないことをも言ひ、又本意でない事をも行はねばなりませぬ、これが所謂生存競爭、適者生存と申すことで、周圍の事情に能く適應するものは生存し、周圍の事情に適應することの出來ないものは死に絶えて了ふといふ動物界の大原則であります。人間はどうしても動物たるに相違ないから、この動物界の大原則たる生存競爭を免れることは出來ないのであります。その上に社會が益々進めば進むほど制裁といふものが愈々嚴重になり、職業は益々分れるから、人々は益々相依り相助けねばならぬ。まだ發達せぬ社會に於ては、一人の人間で、まだ比較的いろ〳〵の事が出來る上、人口も尠く、地面もゆたかにあるからして、餘裕がある爲に個人の行動範圍が比較的に廣いが、社會が進歩すれば人口が殖ゑる、人口が段々殖ゑれば地面は段々狹くなり、食物は隨つて段々乏しくなるからして、從前の樣な生活をしやうとすれば從前よりも一層多くはたらかねばならぬ、そこで分業が始まつて、人間互に相助けて始めて社會が立ちゆくことになる。かうなれば人間の自由意識といふものは益々束縛せられて、遂に所謂國家社會主義となれば、個人といふものは益々消滅するに至りませう、かういふ時期は遂には來るでありませう。かるが故に社會に於

ける個人のはたらきは、鳥渡考へられる樣に、さほど重大なものではない、個人の出來る働作は大概きまつて居る、餘計なことをしたり、又餘計な事を言つたりすれば越權になるから、殘念ながらも自分の職分の內に蹙まつて居らねばならぬといふ窮屈なことになる、進んだ社會では、斯くの如く個人としては仕事が出來ませぬ。故に史學に於ては個人の仕事には餘り重きを置きませぬ、史學に於て重きを置くは、社會の仕事であります、もし個人が數十萬人を指導しまして一人で切り廻る場合があれば、個人が表面にあらはれて來ますが、さういふのは特別の場合である、普通の人が個人としての働作は史學に於ては重きを置かないのであります。以上が史學から見る個人卽ち人間一人といふものゝ說明であります。

次に社會といふものを史學はどう見るかといふことを說明しませう。我等が探る所の見解によれば社會とは、ある數の個人が、偶然一の面積の上に集つて共同生活をするものであります、これが卽ち社會であります。されば社會なるものは、その細胞なり器官なりとして個人を持つて居る、社會の細胞、器官としての個人は尠くとも社會を維持してその社會を發達させやうとする希望を持つて居らねばならぬ、かくの如き希望を持たぬものは社會の細胞、器官以外であります、言ひかへれば、尠くとも個人は家族を持たねばならぬ、あるひは持たうといふ希望を持たねばならぬのであります。社會の要素は人口である、社會が發達するといふことは、社會の細胞が殖ゑることである、卽ち人口が殖ゑることである、人口が少くなれば社會は衰へるわけである。故に社會を維持して進化せしめむとするものは、家族を持たねばなりませぬ。かのごろつき、乞食などの如く家族を持たぬものは、我等の嚴正な意義でいへば、社會の細胞、器官の中に入れたくない、これらはむしろ病的細胞である、のら犬泥棒猫同樣である。我が邦ではかの武家の起つたのは、これら浮浪の徒を利用して踏臺とした方であるが、純友の亂の如きは、よく浮浪の徒が、いかばかり社會の害になつたかを示すものといふべきであります。シナにおきましては更に甚しいので、所謂流民が代々革命を起す原動力となつて居ります。

社會は元來集合動物であります、蜂の社會、蟻の社會、くだくらげの社會、人間の社會、何れも共同生活といふ點に於ては一樣であります、全部は同じではありませんが、この一點に於ては全く同一の規則に從つて居るものであります。黴菌は培養基に殖ゑ附ければ直ぐ繁殖するが、黴菌の種類が違ふに隨つて、培養基も違つて居て、よく適應する培養基に殖ゑ附ければ、その繁殖の仕方は實に盛なもの、社會も丁度そのごとく、生存に最も都合のよい處に最もよく繁殖してゆく、言ひ換ふれば、生存の爲に最も少き抵抗をあらはす處に最も多く繁殖してゆくものであります。卽ち要するに社會が繁殖してゆくには、社會をなして居る個人の意識の力卽ちエネルギーが强くなくてはならぬ、分析していふならば個人の識力、希望、忍耐力等が大に與つて力があるが、尙一層煎じつめて見れば、人數と金力との二つに歸する、人數がなければ勞力がない、金力がなくば勞力を出すことが出來ませぬ、識

力、希望、忍耐力等は勞力と金力とがなくては遂げ得ぬものであります。故に社會の繁殖は勞力と金力とがもとゝなつて、それ相應の處に繁殖してゆくので、全くこれ一の動物の作用であります。故に亦社會も全く生存競爭適者生存の原理に從つてゆかねばならぬ、これにそむけば遂に死滅を免れぬといふ性質のものなのであります。

かやうな性質をもつて居る社會が、次第次第に進んでゆけば、これを維持擴張するには、いかなる手續き、工夫をしなければならぬかと、社會を組織して居る面々がいろ〳〵工夫して考案を立てる、これら社會の維持進化を圖つて居る個人の團體を稱して國家と申します。國家といふのは決して法令とか政治とかの統名ではない、議論のかたまりではなくして、動物のあつまりなのであります。社會といふとは、唯聊か目的が違ふといふばかりで、孰れも動物のあつまりなることに於ては同樣であります。卽ち人々は皆生存を欲する社會も國家もこの點に於ては同じく之を維持し進歩させやうとする。しかし國家と社會とは面積上に違ひのある場合がある、社會とは自分の生存して居る境域である、國家とは一國家が特に自分の管轄區域と心得て居る範圍を持つて居るものである、社會なるものは必しも一國家のもとにかたまり居るものでない、一國家が多くの社會を綜合して居ることもあれば、又一社會が多くの國家に分裂して居ることもある。近い例をとればヨーロッパはすべて一社會であるが多くの國家に分れて居る、インドは多くの社會より成るが國家は一つである、シナも恐らくは之に近い

であります、かういふ風に社會とか國家とかを個人はつくつてゆく、さうして社會も國家も共に個人といふ動物の集合體でありますから、無論生存競爭適者生存の原則に從つて、それに背けば亡び、それに從へば存してゆくことが出來るのであります。

かういふ社會なり國家なりに於て、これを維持し擴張せむとすれば、是非共史學といふものが、いりだします。その仔細はと申せば、人間は社會なり國家なりの元素であることは前申した通であるがその元素たる人間の命はまことに短い、ヨーロッパ人はまづ一世が三十三年、シナ人は一世三十年、日本人はまだ統計はたしかでないが、先づそこら邊のものでせう。命といふものはこの通り短い、卽ち個人といふものは常にかく新陳代謝して居る、社會なり國家なりの細胞、器官といふものは、常にかく新陳代謝して居るのであります。動物の無數の細胞は常に新陳代謝して居るが、人間の社會なり國家なりに於けるも丁度その通りであります。かく激しい新陳代謝であるから、何か、この社會の人間がした働作を後に傳へる工夫をせねば、社會なり國家なりを、いかにして維持したか、いかにして擴張したかといふことを知ることが出來ぬ、參考にすることが出來ぬ、故に是非これは知らねばならぬ、そこで進んだ社會には記錄といふものが起る。

記錄は必しも社會に限らぬ、國家に關する記錄もあれば個人の記錄もあるが、とにかく進んだ社會には、通例書籍の形をなす記錄がある、太古には無論ない、その頃には後世記錄にのせる程の事は先

輩から後進へ口づから傳へていつたものもあれば、場合によつては非常に大きな築造物をつくつて置くのもある、所謂記念物はこれであります。けれどもこれでは足らぬ勝でありますから、いつか書類がはじまる、アッシリア、バビロニアのかの古の大築造物、あれにも既に銘がある、これ已に書類である、記錄である、エジプト、ペルシアの大殿堂、磨崖の碑にも記錄がある、これらは何れも皆記念物で、王の系譜とか、王が國家を維持した手續きとかの説明がしてあります。その段々かわつてゆく筋道は國々によつていろ〳〵違ひます、日本では古くは語部（かたりべ）といふがあつて、耳から耳へ文言を傳へて、暗誦して居たのが、後には書籍の姿になつて殘つて居ます、卽ち古事記はこれであります。けれども古事記は皇室の御系圖たるに止まつて、その御事業といふものは少しばかりより書いてない、應神天皇の御世の時分には、日本人は朝鮮へ往つて大經綸をやつて居る、その證據はたしかにあがつて居りますが、それらの事は唯簡單に傳へてあるのみで、これらは政府が傳へる必要がないと認めたに相違ありません、それで詳しく傳へなかつたものと見えます。ローマなどになりますと、歷代のコンスルの補任錄と、國家に莫大の功勞のあつた將軍に凱旋式を賜はつたその凱旋の日附、これだけがその頃のローマ政府卽ちその頃のローマの國家がつくり置いたもので、それが段々たまつたのが、紀元少し前に白大理石の板に刻み附けたあれで、大分缺損はあるが、とにかく今日まで傳はつて居る、これはローマの國家が書いて置いて、とにかくこれを傳へやうとしたものであります。シナなどでは、

かの所謂正史といふものがあつて、朝が變る毎に、代々政府自らが前朝の史を編纂する、所謂二十幾史といふものになつて、明朝のまでは出來て居ます、これは政府が、これだけのことをば傳へ置くべきものとしてつくつて置いたのでありませう、これは我が國やローマなどのやり方とは違つて、大層こまかな事まで書いてはあるが、つまりやはり國家が傳ふべきものと思つた事のみで、粗略と綿密との差違はあるが、要するに國家が必要と認めた範圍だけを書いてあるので、卽ち國家を擴張し維持する先例を傳へむ爲であります。これが史の起る一原因であります。

今一つの原因があります、以上は國家の眼で見て樞要と思ふたことで、國民の眼から見て樞要と思ふことは、その外にも隨分ありませう、國民が集つてした事、國民の手柄話など、これらは卽ちその類であります。ヨーロッパでは古くは韻文で殘つて居ます、ホメロスの詩の如きはこれであります、ローマの古に於ても、今は亡びてないが、疑もなく韻文となつて古人の功などが人口に膾炙していたらしい、その他の諸國に於ても、散文よりは韻文の方がこの目的にかなふから、韻文になつて居るのが多い、唯事が面白いばかりでなく、文も面白ければ傳へるにも傳へ易きゆゑ、多くは韻文の姿になつて居ります。散文で傳はつて居るのはその後の事で、ギリシアではヘロドトスの如きがこれであります、ペルシアと戰つて、ギリシアは大勝利を得たからして、自らも喜び、ギリシアの國民をも喜ばさうとて書いたもので、幸ひ諸所方々をあるいて知つて居た人であるから、それらの經驗をも取り入

れて書いたのが、かの有名なる名著であります。しかしあの名著は、もと辻講釋の種本であります、ヘロドトスはあの本を種本として書いて、辻に立つて之を講釋したもので、群衆は皆喜んで之を聽いたものであります。これらは國民が樞要と感じた所を傳へむためで、卽ち史はかういふ方面からも發達して來るのであります、支那で申せば正史に對して申す野史であります。以上の正史と野史とを種として鍛ひ上げたるものがこれ卽ち我等の謂ふ史學であります。

右のわけでありますから、史學なるものは、隨分古くから何れの國にも發達致し居りますもので、國が古ければ古いだけ長い史があります。國によれば政府自らは無頓着であります、ロシアなどはさうで、政府は少しも構ひませぬ。けれども國民は何とかして傳へたいといふ所から、ロシアでは古代から民間の編纂にかゝる記錄が殘つて居ます、二三百年たてば繼で書く、又その次をば誰かゞ書くといふ樣に、古代から連綿と記錄が殘つて居ります、これがロシア史の骨子となるものであります、正史といふ樣のものは全くない、斯樣な類もあります。何れにしても、隨分古くから、古い國には歷史はあるが、唯何月何日何事件があつたと書いてあるばかりで、歷史ではありませうが、まだ史學にはなつて居させぬ、卽ち科學的研究方法によつてよくしらべあげて書いたものではありませぬ、唯見たり聞いたりしたことを眞似言して、丁度鸚鵡が物言ふ樣に、眞似をして書いたばかりであります。

史家たるものは、これに今一層學術的の調査を與へねばなりませぬが、何れの國に於てもかゝる調

査を經たものは極めて僅かの部分であります。ドイツの史の如きは、わりに學術上の調査を經て出來て居る部分がある方であるが、それもドイツ史全體はない、フランス、イギリスの如きに至つては今しきりに調査中といふ風であります。史學の目的を達するにはまことに前途遼遠であります、まだ中々立派な學科とはいへませぬ、昨今尙研究の初步にあるといふ程度であります、今後いかほどかゝつたならば完全の科學となり得るかは豫言し難いのであります。

さて々愈史學の研究法を述べる場合に立ち到りましたが、抑この史學を研究しまするには、どう致したらよいかと申しますに、まづ史學の科學的調査といふことが必要であります。

所謂史學の科學的調査といふはどうするのかと申しますに、先づ社會、國家の成立より始めねばなりません。それ人間のつくり居ります社會、國家なるものは、古代より今日に至るまで、動物體として生存して、細胞、器官たる人間の新陳代謝卽ち生死こそはあれ、社會、國家といふ聚合動物體は、昔も今も生存して居ります、固より時勢によつて段々變つては來ますれど、事情に應じて段々變化しながらも昔も今も動物體として生存して居る、さうしてその變化をうけることを稱して社會の情態がかはつてゆくとも、又周圍の事情に適應するとも申して、つまり社會なり國家なりの活力である、いかなるむづかしい變動に出逢ふても何とか適應してゆくのは、その動物體たる所以である、社會にしても國家にしてもその活力は斯樣にあらはれるです。ローマが共和國の時分には、難儀の仕通しで、

九死一生の場合に常に居たけれども、それを首尾よく生存し通したのみならず、當代彼等の知つて居た限りの世界を統一した大帝國となつた如きは、國民の元氣、卽ち國家の活力が非常に强かつた一例として見るべきである。規模は比較にならぬが、かゝる例はわが日本を以ても見られぬことはない、日本も隨分苦しんで來たものであるが、活力の强いことは隨分誇つてよいと思ふ、不幸にして江戸幕府三百年間は、活力が弱くなつて居たが、それを除けば我が國家の活力國民の元氣は强い方であります。この國民の元氣、國家社會の活力を知らむには、是非ともその社會、國家の繁殖して居る土地を知らねばなりませぬ、一に土地が大關係があるのであります。その一土地に繁殖して居る國民が、いかなる性質のものなるかも亦知らねばなりませぬ。このしらべ方は、社會そのものゝ實物研究といふことになる、社會に於ける人間といふ動物を實物として研究することになる、日本の史を科學的にしらべむには、まづ日本の社會そのものを實物として研究せねばなりませぬ、卽ちその社會そのものを組織して居る個人といふ細胞の性情を知らねばなりませぬ。個人自ら社會をかけまわつて交際をしたとて、自分がやはり社會の一器官である以上はよくはわからぬ、恰かも膝栗毛に鞭打つて地理しらべをする如くで、思ふ存分には分りませぬ。ところが、もしイギリス、フランスなどいふ他國へ參つて、日本を見ますれば、よくわかります、丁度高き山へ上れば山下の地理が一目のもとによくわかると同じこと、學術の中で人間より最も遠く離れてゐる天體の研究が最も正確であると同じわけであります。

かやうに致して現在の社會といふものが一通りわかれば、それを土臺として、現在の周圍の事情はこの通りである、今から二百年前の周圍の事情は違つて居たに相違ないが、どう違つて居たか、その頃の社會はいかなる運動をして居たかと、周圍の事情の明瞭な現時代を拾ひ來つて、その頃の社會を之に照らし合はせて見れば、勿論違つては居るが、よくしらべて見れば、根本的には變化せぬ分が多い、これが社會なり國家なりの本體本性としてよいものでありませう。卽ちそれを組織して居る人間の根本の性質でありまして、時代によつて周圍が變つてくるまゝに、少しづゝ面影をかへてゆくのであります。何れにしても、現今の社會をみて、それから遡つてゆくより他に方法はありませぬ、恰かも地質學者が今日地の殼の上に行はれて居る風なり水なり空氣なりのはたらきはいかなるものかを知つて然る後それを尙古代の地層上に考へ當てると同じことで、現今に於て、史家が研究法としてとるべき方法は、これよりよい方法はあるまいと思ふ、この方法をとるより他に途がない、この方法は今日の他の科學に對しても耻づる所のない、間違ひのない方法と思ひます。

故に更に改めて申さば、史學といふものは、まづ現在の社會の狀態、人情などを實物として研究して、それを基礎として、それより遡つて種々の國家社會の調査をなす所のものであります。

勿論史學も一の專門の目的を有して、それを達せむには、あくまでも眼を明にして、毫末を殘さず、胸懷を平にして觀察せねばなりませぬ、感情、理想などゝいふ色眼鏡をかけて見ては何の役にも立ち

ませぬ、人間はあくまでも動物として見ねばなりませぬ、萬物の靈長とか神の權現などゝいふは唯人間の理想である、この理想的人物は古來幾人もない、その他の人間は皆一個の動物と見なければならぬ、理想の眼鏡はとりはづして了つて、動物としての人間がなす社會、實物としての人間のはたらき、それを實物として研究するのが史學の本領であります。故に史學上では、いかなる振舞は社會を進めるに功があつたなどゝはいふことが出來ますが、理想上道德上から、その事業をよいとか、わるいとか貴いとか賤いとかいふことは史家のいふべき言葉ではありませぬ。返す返すも注意を加へて置かれたいは、史學は唯實物の研究であること、實物といふことを固く心に銘して後、史學の研究に入られたいのであります。序論としては先づこの位で止めて置きませう、分りにくい所もありませうが、それは追々お話をしてゆく内に段々分つて來るでございませう。

歷史の種類

古代から今日に至るまでいろ〳〵の國の歷史本を見まするに、凡そ三種の差別があります。第一は物語、第二はかゞみ、第三は史學であります、次にこの三種類の歷史はいかなるものなるかをほゞ説明致しませう。

第一種物語

第一種の物語と申しますは、いづくの國へ參りましても、最も古くからあらはれて居まする歷史の體でありまして、その古い中にも、特に最も古いものは韻文になつて居る、散文のものは後になつて出て來ます。たとへばギリシアに於て頗る古くこの物語があらはれて居るですが、それは韻文の體であります、すなはちホメロス又ヘシオドスなどの韻文の物語は、これでありまして、ヘルレーン人の最古の時代の事柄を語り傳へて居るものであります。これは序論に申した通り、一の國民は自分たちが過去に致してある事業、卽ち個人よりいへば面々の祖先がはたらいた仕事のはなしを聞きたいので、聞いてそれを又自分の子孫に傳へて後日の心得としたいからして出來るものであります。卽ちそれには二種の趣旨があります、一は卽ち自分に聞き、一は後世に傳へて模範にせむとする、この二目的があります。模範とは卽ち先例であります。この物語の出來たのは至つて古代のことでありますから、どこのでも、事柄もおかしい事が多くて、今日の科學の眼から見れば、容易に信ずべからざることも書いてありますけれども、何れも古代のその頃の智識の程度で書いてあるのでありますから、讀者自らが其の時代の考になりかはつて考へねば、その眞意は知り難いのであります。これらホメロス、ヘシオドスなどの物語は、たしかに時代はわかりませぬ、ホメロスなどは、その人の實際あつたかなかつ

たかもわからぬ位でありますが、まづ凡そ紀元前九世紀頃であらうかとの説もあり、あるひは更に古く見る説もあります。又本邦に於ては昔語部（かたりべ）があつて國家としてこれだけのことは敎へ置かねばならぬと思ふたゞけのことを文に作つて、散文ではあるが、餘程口調よく綴つた散文で口調よく傳へ得る樣に出來て居るものがあります。これは何時頃からありましたかよく知れませぬが、天武天皇の御世の頃までも傳はつて居まして、耳から耳に傳へたもので、書き卸したものではないのを、これを初めて書記したのが古事記であります、これは勿論物語の類に屬するのであります。又ドイツ種族に至りますと、有名なるニーベルンゲンの長篇があります、その出來たのは、比較的後世の事でありますけれど、その歌ふてある話は隨分古い事と思はれます、これは有名な韻文の長篇で、中世ドイツ語の最も古い長篇であります。かういふ風に方々の國に後世の歷史に代はる所の物語が、太古の時代に已に出來て居て、ギリシアに於てはヘロドトスに至つて初めて散文の大部の歷史を編んだのであります。これはかのペルシア人と九死一生の軍をして、總稱してヘルレーンといふ卽ちギリシアの全種族が何れも同一不二の種族に屬することを自覺して、その上幸にして國を全くしたのみならず、敵を破つて追ひ退けた次第をかいたものであります。この勝利は實にギリシャ人の驚くべき大功業であります、この大功を傳へむ爲に、ヘロドトスはかの物語をつくつて辻講釋をして國民を喜ばしたものであります。これが初めて所謂歷史といふものゝ基礎となつて居りまして、普通にヘロドトスを歷史家の元祖

と申して居ります。

かくの如きものを、ギリシア人はヒストリアといふ、この言葉がヨーロッパ各國に多少形をかへて傳はつて居ます。この言葉の中には、いろ〳〵樣々の意味がこもつて居まして、非常に廣い意味のことばであります。研究、探索、取調べ、又取り調べたること、經驗、智識、又學術、歷史、物語、又記事なんどいふ意味がありまして、凡そ文章を以て書いた記事よりして、その本原たる所の取調べ、又更に深く立入つていへば、學術、智識、經驗などいふ意味もこの言葉の中にこもつて居る、ギリシア人は非常によい言葉をこの語の爲に使つて置いて呉れたと感謝せねばありませぬ。今日の歷史にこの語を用ふるも、それ故に決して差つかへはありませぬ。しかしこの語の出來た時代のは、やはり物語なのであります、どういふ風かと申しますに、ヘロドトスの歷史を編んだやり方を見まするに、自ら諸處方々へ旅行をして、土地の者から物語をきゝ、聞いたまゝを別に深くしらべもせず、問ひ糺しもせず、そのまゝ書き、又特に人に聞きはせずして、自分一個の鑑定考察ばかりで以て書いて置いた所もある、我等の今日いふ史學とは大に違ふ、どうしても物語といはねばならぬ性質のものであります。日本の方でも物語といふのはいろ〳〵ありますが、やゝもすれば源氏、竹取などいふ小說類と誤解致します。實際物語といふはさういふものではなくして、やはり歷史の一種であります、その例證をあげますれば、かの榮華物語、平家物語など、これらがよい證據であります。書いてあることには、

中には頗る小説的のことも、著者の臆斷の説もあらうが、之を要するに深く研究して四方八方から觀察した結果を書き殘したといふのでなく、人の言ふた事、又は自ら斯うと思ふた事を、そのまゝ書いたもので、これらを物語といふのであります。故にその出來のよいものを見れば、中々よい、しつかりしたものがあるが、不出來なものは、殆んど歴史小説といふべきものがある、しかしそれは物語としては致し方がありませぬ。ヨーロッパの古史の如きも左樣で、ロシアのネストルの物語、ニコンの物語などは十二世紀以來の出來事を書き綴つたもので、ネストルならばネストルが筆を止めた後へ、後人が書き續けたものであります。かういふ風なものを稱してクロニカ、直譯すれば年代記と申します、フランス、イギリス、ドイツなどにも自餘のヨーロッパの國々にもあります。これらは何れも物語でありまして、今申した物語の本色を具へて居ります。

少しく改まつた姿の物語と申しますれば、政府の編纂に係るもので、之を稱して實錄とか、記錄とか申します。日本でも自餘の國でも實錄といふ方が古い、しかし記錄と稱するのも、それにつゞいて古い。これは政府に於て特に書く官吏を置いてやらせたもので、これを書く學を、稱して記錄學といふ、西洋では官吏は置きませんでしたが、民間に於て書いて居る。けれどもそれは朝で書かうと野で書かうと構ひませぬ、政府で書けば、政府のみが書くべき事ばかりを書き、野でかけば政府で書くよりは廣いであらうが、大概は同じことでありますから、どこで書かうと構ひませぬ。これからは皆クロニカといふべきものであります。以上が第一種の大略の説明であります。

第二種　かゞみ

次は第二種のかゞみ、これも西洋に於ては、中世以後に發達したもので、その淵源を申せば、ローマ時代に已にあります。たとへばローマ共和時代にギリシア人ポリビオスの書いたギリシャ文の歴史、又はローマ帝國の初に出來たタキツスの記錄などが、已にこの淵源をなして居ります、シナの方でいへば、尚書の二典三謨の類で、無論編纂物であるが、明にこの種類の歴史の淵源であります。孔子の春秋もいふに及ばぬこの類のものであるが、これは純然たるものではない、一部分第一種に跨がつて居ります、この類の書は、單に魯の春秋のみならず、他の國々にも皆あつたのであるが、今は皆亡びて獨り魯の春秋ばかりが殘つて居るが、それらは何れも第一種にのみ屬すべきものであつたでありませう、孔子の春秋ばかりが第二種にも跨がつて居つたのでないかと思ひます。ヨーロッパに於ては、この種類の歴史は宗と中世に至つて起つて來たものであります。然しその淵源は隨分古いので、通常にはポリビオスがこの種類の歴史を起したと致しますが、一概にさうとも考へられぬと思ひます。これはギリシア語でヒストリア、プラグマチケーと申しますもので、卽ちポリビオスが造つた言葉であります、しかし、我々の所謂第二種の歴史をポリビオスが始めて書いたかどうか、恐らくはそれま

でには至つて居ないと思ひます。この類に屬するものは、卽ち善を勸め惡を懲らし利を興し害を除く考で書いたものでありまして、特に一國の政治をとる君公がた、あるひは又宰輔の人々の心得になる樣に古の先例を與へて、凡そ政治をなすには斯う、人民を治むるには斯うと訓誡の爲に書いてあるものであります。然し孔子の春秋は一概に後世の所謂勸善懲惡の趣意のみに限るとは思はれませぬ。この類の歷史を一概に勸善懲惡と見るのは、どうやら日本流の樣で、それもまだ二百年內外からの事の樣に思はれます、もと朱子學派の人が言ひだした樣であるが、本家本元の朱子もさうは見て居ぬらしい、最も偏した不都合な見方といはねばならぬ。この類の歷史は、事實を唯ありのまゝに書いて、少しも筆を枉げ、附け飾りをせぬ故に、わるい事をしたものは、いかにもこわがる、よい事をした人は安心する、これ卽ち亂臣賊子の恐るゝ所以なので、別段態と勸善懲善の趣意で書かないものでも、自ら亂臣賊子は恐れなければならないのであります。ポリビオスなども惡事は甚しく惡い樣に書き、よい事は又誇張して書くといふことはない、さういふ趣意で書いたのではありませぬ。文章までも故らに强く書きませんでも、勸善懲惡には自然になる、孔子の春秋の如きは、非常な簡單な文でありまして、意味が明でないからして、公羊穀梁左氏の諸氏あつて、傳を書いて說明して、斯ういふ事柄があつたからして斯う書かれたのであると說いたでありますが、果して孔子の意は、さういふ考へで書かれたものかどうかは疑はしいものであります。中でも公羊傳と穀梁傳とは、極めて文章が簡單でありまして、孔子の考ともあまり違ふまいと思はれますが、左傳は極めて小說風に出來て居まして、どうも孔子の本意には遠ざかつて居るやうに思はれます。

かくの如きものを、後世に至りますれば、シナに於ては鑑と申します、その鑑の中で最も人口に膾炙して居ますのは、宋の司馬光の資治通鑑でありまして、君主皇帝の治世の參考書卽ち皇帝の教科書として奉つたものであります。すべて鑑と申しますのは皆教科書であります、國を治めてゆかれる方は、これだけのことは御存知なくては叶ふまいと思ふことだけを書いて、その餘のことはドシ〳〵削つてゆくといふ書き方なのでありますから、歷史事實を何でも書いたといふのではありませぬから、純粹の物語とは大に違ひます。自分の國のことでも他の國のことでも何でも片端から書くといふのが物語なので、これと鑑とは違ひます。後崇光院の看聞日記、あれは御承知の通り後花園天皇の父君伏見宮の御記でありますが、御隱居で御ひまでありますから、非常な大部なものを御書きなされた。室町の初代頃の事を知るには是非とも之を見なければわかりませぬが、これはすべて聞かれたことは何でも書いてあります、これらは物語の本色をもつて居るものといふべきであります。鑑といふのはさうでなく、君公がたの御心得になるべきことばかりがかいてある、資治通鑑の如きは卽ちこれなのであります。

この例を措きまして、かがみと題する例は少くありませぬ、大かゞみ、水かゞみ、ますかゞみ、幕

府のものでいへばあづまかゞみ、極後世のものでいへば後鑑などがあります。これからは何れも後人の心得のために書いておくといふ意で書くので、あたまから社會全般のことを網羅するといふ意で書いたのではない、隨つて直に眞正の歴史としては見るべきものでありませぬ。今日申す教科書は皆この類であります、小學の教科書などでは、小學生徒のわかるだけのところを書いてあるので、中學教科書に至れば、やゝこみいつたことが書いてあるが、しかしまだ〳〵あまり高尚なことは書かないのであります、かの文部省の參考のために出した教授細目の如きも、中學生のあたまに相當の事柄だけしか擧げてない、卽ちかゞみの趣意であります、教科書はこの類に屬するものであります。教科書に書いてあるのは歴史事實の一部であります、この他に澤山重要のことはありますが、それを見る人の頭腦ではまだそれらの事はわからぬ、申してもだめであると假定して削つてあるわけであります。この種の歴史は、今日でもやはりいります、卽ち述べ來りました如く教育用としているのであります、學校で生徒を教へてゆきますには、是非ともこの體を要するゆゑに、この體の歴史は教育用として、これからも長く存立してゆくことでありませう。

第三種　史學

第三種は、百年以來尚精密に申せば、五十年以内に發達した所の所謂我等が申す意義に於ける史學

であります。これはドイツ語ではゲネチッセ、ゲシヒテと申します、ドイツ語より他に申すべき言葉がありませぬから、ドイツ語で申します、我等は之を史學と申します。科學に於て用ゆる研究方針を以てしらべ、その結果に依て立てるところの歴史であります。これは何故に舊く發達致しませんでしたかと申しますに、歴史事實と申しますものは、過去の社會にあらはれた一切の事柄を指すものでありまして、これを研究致しますには非常にこみいつた學術上の方法がいりますが、古人はこれを知らぬ、古人は先づ社會といふものを知らぬ。

例へば孔子が曾子に、孝はいかなるものなるかを授けられたその時に、孔子は曰はれた『身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝のはじめなり』といはれた。まことにもつともの事で、からだは父母にうけて居るものであるから、親に對して、このからだを傷つけてはわるいといはるゝ、もつともものことであります、いかさま孝はこれより始めねばならぬでありませう。次に曰はく、身を立て道を行ひ名を後世にあげ、以て父母を顯はすは孝の終なり。身を立て道を行ふとは、自分自身の思ふことを信ずることを行つて事業をやつて、それで名をあぐれば父母の名も自らあらはれる、さうするのが孝の終であるといはれたわけで、それはそうでありませう。が、これは表面とにかく個人、唯一人の人といふものを基礎として說いてあるので、社會に立つて居る人間といふことは僅に孝の終なりといふところに少し言ひあらはしてある位であります。しかしよく玩味して見ると眞意はさうでない

やうであります、孝の始めの教は小學生徒位に丁度敎ふべき敎であります、孝の終の方は、人は社會に立つて四方八方から制裁を受けてその間に立つてゆかなければならぬ、自分の思ふこと望むところは百分一も出來ませぬ、考へて見れば不平だら〳〵、それを思へば死なねばならぬが、孝の終として孔子のいはるゝところはこゝである、己の名を後世にあげやうとすれば、必らず身を大切にせねばならぬ、死ぬなどゝいふ短氣を起さず、所謂勇往邁進して社會の荒波を踰えつ潛りつしてゆくのが人間のとるべき方針であるといふのが、この孔子の言葉の眞正の意義であらうと思ふ、あとから見ておぼろげにさう察せられるのであります。身を立て道を行ふといふのは社會に於てといふ意義でありませう、山中に入つて仙人になるならば身を立て道を行ふなどゝいふことは出來ぬ、後世に名をあげるといふのも社會に生存して居ればこそなり、山中に在つては出來ぬ事であります、以て父母をあらはす云々もさうであります、自分より自餘の人間が、父母を知つて吳れることであります、さすればつまり社會が知るのである、さすれば所謂孝の終云々の言葉は、たしかに人が社會に立つてゆくことを基として說かれたとしか思はれませぬ、初の方の身躰髮膚は父母にうけたものだ大切にせよといはれたも全く、長じてこの社會に立つ素をつくり置けよといはれたと思ふより他に思はれませぬ。けれども表面充分社會にすむ所の人間云々といふことを明に書いてないのは、孔子のあたまに、我等が今日用ひて居る社會といふ考がなかつたことを示します。それは單に孔子のみならず、一般古人のあたまに

は社會といふ考はなかつたのであります、一般古人のあたまには、自分の國だけ知れて居る、ギリシア人は他國の人はまるで顧みず、人間といへば自分等ばかりと思ふて居ました、ローマ人ロシア人ケルト種族、ゲルマニ種族も今のシナ人もインド人もモンゴル人も、どこの國民も皆さうである、日本人もついこの頃までさうであつて、今日でも、まだある人々はさう思ふて居らぬとも限らぬ、シナ人が中華中華といふのは傲慢な樣であるが、古人のあたまで以て申せば少しも傲慢といふのでない、それが古人としてのあたりまへなのであります。シナ人はあたまは、古いでありますが、他の國民と觸れ合つて說を變へぬといふことだけを維持して居ます、それは他の國民と觸れ合ふて自分が個人たる細胞たる社會はいかなるものかといふことを思ひうかべることを力めぬからであります。

一の社會をよく知らうとするには、是非とも比較研究を要する、さすれば自覺が起る、それを比較しやうとさへしませぬから、社會のわかる筈がない。人間は萬物の靈長だとか神の權現だとか思つて獨免許で威張つて居るから、皆無足もとが見えませぬ。人間は動物界の一員である、上等ではあるが、ある種類の動物と群がつて生存して居て、自他の高等動物と同じ體を持つて同じ生理作用を有して居るといふことを考へなければ、人が社會をなし、社會が形をかへて國家をなし、國民の活力元氣がいかなるものか、いかにして起り、あらはれ、維持し、增加し得べきものかなどの工夫のおこる筈はない。さすれば我等が今日持つて居る社會、及びそれに對する觀念が發達して後、こゝに始めてゲネチ

ッセ、ゲシヒテが完く出來るわけであります。

カロロ、ダーウィンは、人がいかなるものなるかを四方八面の攻擊の中に屹然として立つて唱へた。社會といふものを科學的に研究できるやうになつたのはその以來のことで、思へばまことに近いことであります。故にゲネチッセ、ゲシヒテは舊いあたまでは書かうとしても書けませぬ、書くだけの資格がないのであります、思ひもよらぬことであります、關の山が第二種のかゞみであります、それ以上は到底昔は希望することが出來ませぬ。我等は今幸にこの第三種に入ることが出來る、今日の諸種の科學が追々進むに隨つて史學も段々進んでゆきませうが、しかし今日だけのところではまだ〳〵史學はまことに幼稚なるは已むを得ぬ次第でありますが、とにかく第三種の史學なるものは斯ういふものといふことをまづ記憶してもらひたいのであります。

史學の定義

史學はいかやうなる學であるかといふことに就きましては、已に序論にもポツポツ述べておいたですから、あらためて申さんでもわかる筈でありますが、念のため更に述べることを致します。我等の採用する定義によれば、

「史學は社會の細胞としての人の働作の發展を研究する科學である。」

これが我等の採用する史學の定義でありますが、これは大分むづかしい定義でありますから、用ひてある言葉の意味を一通り説明致しませう。

先づ、社會の細胞としてといふ句の説明を致さうならば、この事はあらかじめ序論にも述べて置いたから、ほゞ御承知だらうが、尙くはしく申さば、人間が史學の目的物となるには社會に於てその細胞器官として生存して居らなければならぬ、まだ社會をなして居ないところの人間とか、又は社會の中に生存して居つても、その細胞器官として働作せざるところのものは、史學の目的物にはならないのであります。社會をまだなし居らぬ人間といふのは卽ち野蠻人の事で、林とか山とかに自分の家族だけをあつめてバラ〳〵に住んで居ますので、それでは猩々の生活の有樣や、狒々の生活の有樣と變つたことはないので、固より史學の目的物にはなりませぬ。又社會の中に居ましても、細胞器官とならぬ人間と申しますのは、いかなるものかといひますに、人といひますものは、社會の共同團體の爲に何か負擔して居るところの任務を持つて居りますもので、その任務を盡して生存して居るものが我等人間なのであります、固より自覺して盡して居るのと自覺せずして盡して居るのとの差別はあるが、要するに各々何かの任務を負擔して生存して居るものであります。かく社會の細胞器官が各々負擔分擔して所謂協心勁力して社會を維持してゆくからして、社會といふこの集合動物が生存してゆ

くのであります。然るにこの任務を負擔せぬものが隨分社會にある、古代、今代、まだ開けぬ社會、非常に進んだ社會何れにもあるものであります。

それは第一が兒童、これはまだ社會の細胞器官として任務を負擔することの出來ない幼き動物でありますから、所謂父兄なるものが代つてその任務を負擔して、他日社會の任務を負擔し得る樣に骨を折ることであります。又それらの子供が生長して持つべき所の利害といふものは、父兄が名代となつて行ひ又は要求して居るのであります。これは幼い動物であるから致し方がございませぬ。

次では極の年寄で、からだも自由にはたらかず、五官も十分にはたらかぬもので、これは老衰して任務も負擔もなし得ぬものでありますが、これは過去の時代に於て働作した社會の細胞器官で、今は已にその任務をつくしえないやうになつたものでありまして、まうさば、全く死んだ細胞器官と同じものでありますから、これらの任務は、あとの子、孫などが負擔する。これも致方がない。

この他にも人の注意しませぬものゝ中に社會の非細胞が尠くありませぬ、これに二種類あります。第一は社會の病的細胞であります、次では社會に害をするといふほどには著くあらはれませぬが、社會に對して毫も益をなさぬものであります、卽ちむだ細胞であります。この二通りのものがありますが、病的細胞は先づ以て罪人の各種類ごろつき乞食、惡少年なんどの類次でむだ細胞で間接に社會の害物となるものとは何かと申せば、俗に所謂左團扇の御隱居連、山林に跡を埋めて自ら隱士と號して

すまして居る世すて人、才能もなければ思慮もなく何の仕事も得せず唯徒に活て居るばかりの金滿家、才藝もなく器量もないくせに仕事が大嫌いで放蕩が大好きの自稱豪傑連なんどがこの類であります。このたぐひのもの隨分澤山數の多いことでありますが、いづれも皆社會の非細胞であります。かういふものを悉く除き去つてしまつて、全く健全であつて、日々その負擔して居るところの任務をつくしつゝあるか、あるひは盡さむと欲して苦心して居るものかゞ相集つてすなはち社會を維持してゆくことで、この健全なる部分のみを指して、私は、社會の細胞と申します。

次に人の働作といふことを說明致しませうに、個人なり團體なりの人間は唯今も一言申した通り、自覺してはたらいて居るものもあれば、あるひはしらず〳〵の間に社會のために一方ならぬ力をつくして居るものもあります。中等教育以上の教育を受けたものであれば、自覺してつくして居りますが、この程度の教育を受けませぬ社會の下級にある面々は殆んど皆自覺せずしてつくして居ります。それにもかゝはらず、この自覺せずして社會のためにつくして居る種類の人間が社會に貢獻するところは實に莫大なものでありまして、その分量に至りましては、自覺してはたらいて居る者共が社會に貢獻する分量よりも却つて廣大な貢獻をすると思はれます。中等教育をうけました人たちは、いつの時代どこの國にゆきましても必らず少數をしか占めて居ませぬ、それも比較少數ぐらゐでなく、よほど著しい少數であると思はれます。教育の程度が尠ければ尠いほど、低ければ低いほど、自覺して働いて

居る人が尠い、即ち言ひ換へてみれば、いつの時代どこの國に參りましても、最多數の國民といふものは社會なり國家なりのために盡力して居りますが、彼等自らは、さうは感ぜず、自分自分のためにのみ日夜營々としてはたらいて居ると感じてのみ居るので、考へてみれば、まことに氣の毒な境遇であります。

社會の細胞器官としての人間は、かくの如くに働作の仕振が、その人々の社會に於ける身分と共に違ふのであります。けれどもがその働作がよいとかわるいとか、貴いとか賤しいとかいふ、かの倫理學でいふ樣な標準は史學の與かり知らぬところでありまして。又あらはれる形跡の大小によつて働作そのものを測量してはなりませぬ、もし著しく見えないからとてその働作を小なりとし、あるひはあらはれることが大きいからとて、その働作を大なりとするならば、月は非常に大きいもの、海王星は肉眼ではみえぬほど小ぽけなものといふに等しい間違つた判斷なのであります。即ち史學に於ては唯人の働作が社會なり國家なりに及ぼした影響はどうだとか、どういふ效力を持つたとかいふことは申しますが、その他のことに至りましては史家のいふべき限りでありませぬ。

簡單な言葉で以て申しませうならば、史家の眼中には神もなければ魔もないのであります。社會の細胞器官としてはたらいて居る動物といふ實體、唯その實體を實物として見るのみであります、それ以上も亦それ以下も見ないものであります。以上が即ち所謂人の働作といふことに就ての說明であります。

最後に發展と申すことの說明を致しませうに、これは一のものがその內部に含んで居るところの力によつて、自ら伸びて整なうて、さうしていろ〳〵のすがたにうつりかはつてゆくことを申すので、歷史の本によく出まする沿革とか變遷とか推移とかいふやうなる種類の言葉は、皆この發展の一端を示して居るので、この發展といふことが史學に於て最も重きを置かねばならぬことであるのです。

この發展なるものは、いかなる方角に向はねばならぬとか、どういふ風な原則に從はねばならぬとか、又その發展が何故に起るのか、その發展の淵源といふものは何であるかといふやうのことは、史學の與りませぬ所で、それらは他に研究する學問がありませう、言葉を換へて申せば、いかなる變遷、いかなる發達あるにせよ、それは史學の眼から見れば、唯發展そのものさへ實際にあれば、それでよろしいので、どういふ風の發展をするのでなければといふ注文を致すのではありませぬ。場合によれば社會なり國家なりが衰へて、遂に亡びやうとする傾向にむかふのもありませう、あるひはあるかなきかのみそぼらしいところから、世界を蔽ふ大國があらはれて來るなどゝいふ非常な變遷もありませう、これら一切をこめて、こゝに發展と申すのであります。

右樣の次第でありますから、發展といふことが即ち史學の目的物の眼目で、發展がなければ史學の目的物にはならないのであります。譬へて申さうならば、こゝに一の社會があつて、幼稚ながらもそ

の姿は整つて居る、しかしながら、いろ〳〵の事情によつて居据りの姿で、少しも發展しないとすれば、それは史學の目的物とはならないのであります。然るにこゝに又一の國家がある、已に國家たる以上は、國家といふ器官を置く必要が出來た程であるから、よほど進んだ社會ではある、しかしこれ亦數百年間居据りの姿であるならば、同じく史學の目的物にはならぬものであります。これに反してたとひ小國家であり、幼稚な社會でありましても、無論史學の目的物として取扱つてやらなければならないものも尠くありませぬ、文化が進んで居るとか居ないとか、社會が込入つて居るとか居ないとか、國家が固いとか弱いとかなどゝいふやうな程度如何に至つては、史學の問ふところでありませぬ、唯發展をするや否やが史學の着眼點なのであります。

煎じ詰めて言ひ換へて見れば、史學は社會を動く姿に於て目的物と致して居りますもので、止つて居る姿に於ては目的物と致さないのであります、國家に對しても同斷のことであります。

定義の説明はこれで一通り濟んだものと致して置きますが、從來の史學はこの定義には叶つて居ないものであります。近い話を申さうならば、ヨーロッパ人が從來史學として講じて居りますものは、この定義には、はまつては居りませぬ。なぜかと申しますに、立派な社會をもち、立派な國家をつくつて世界を騷動したモンゴル人の如きを史學の目的物と心得て居らぬ、却つて人類學の例と心得て居る。又當時に於て頗る整うた社會を組織して、國家も亦頗る盛に出來て居たアメリカのインカの國民、又はアステク國民などをも歴史の目的物と認めて居ないのである。又アッシリア、バビロニア、エジプトあたりの國民をも、史學の目的物とせぬといふほどではないにしても、史家に於ては甚だ冷淡で、申さば殆んど擧げて歴史考古學の好題目なるかの如くに見て居るのであります。これはつまりヨーロッパの史家の考では、ヨーロッパ以外には歴史なし、ヨーロッパ全體が獨り完全なる歴史をもつて居るのである、ギリシアよりローマに傳へ、ローマより今代に傳へ、連綿として一貫して居る、これ以外には完全なる歴史はないといふ考で、このものゝみを研究するのが、昔からの古い慣例のやうになつて居ります。

もつともヨーロッパ人が斯う考へるのも一應はもつともな道理があるので、今のヨーロッパは實際一の社會を組織して居まして、この一の社會の上に數多の國家が出來て居ますので、この數多のおたがひの間の關係といふものは、非常な親密なもので、とてもシナの歴史などのみを讀んだものゝ、殆んど想像も出來ぬほどに親密なもので、何か一村に事が起れば、それがヨーロッパ全體にひゞくことは度々あります、國境のわづか半村一村を甲がとるか乙がとるとかで大騒ぎになることがあります。かういふ小さいことでもヨーロッパ全體が利害を感ずるとは驚くべき關係である、申さばヨーロッパ列國は無理な裂き方である、天然ならば一つに纏まるべきものが、殊更人工で以て強いて生木の枝を裂いたやうな樣であります、それゆゑに斯ういふ有樣が出て來るので最も著しいところの現象であります。

ヨーロッパの中におきましても、西ローマの系統を受けたものと、東ローマの系統を受けついで居るものとの二系統があります。ドイツ、オーストリア邊から西へかけましては西ローマの系統をうけて居まして、いづれも皆大同小異の國をなして居りまして、ロシア、バルカン半島諸國、ギリシアは東ローマの風をうけて一種固有の樣があります、西の方の國々とは、よほど樣子が變つて居ります。故に舊い時代には、ロシアとヨーロッパ・トルコとは自餘の國より見れば我等の仲間にして共同の歷史をかくべきものではないとして、仲間にして一所に歷史を書いてくれない傾向がありまして、今日に至つても、この東ローマの系統と西ローマの系統とでは社會の組織に隨分な相違があります。

であります、實際はヨーロパには二つの系統があつて、多少の相違はこの二部分にありますが、とにかく數箇國に亙つて居る共同の歷史を書かうには、ヨーロッパの歷史ほど完全に書き得られるものはありませぬ。ヨーロッパの歷史は、申分なく有機體の歷史として書くことが出來ますが、自餘の大陸の歷史は、どうも大陸の歷史としては有機體の歷史といふほどまでには書くことが出來ませぬ。國ばかりで申しますれば、一箇國の歷史ならば、まだ有機體として書けるものもありませう。しかしシナ、インドなどは有機體として書きましても、餘程程度の低い有機體の歷史になりませうが、日本はヨーロッパの歷史を極めて標準を小さくした小さい有機體の歷史なら書くことが出來ます、已に國家の形をなして早くから有機體の發展を餘程して來ましたからして、小さい有機體の歷史としては、日本の爲に立派な歷史を書くことが出來るのであります。

しかし東洋全體の有機體の歷史を書かうとしても書けないのはこゝにある、東洋史が果して有機體の歷史として書けるか書けぬかといふ疑問の起るのもこゝにあるのであります。

之に反して南洋のヂャバ、オーストラリア、アフリカのアビシニア、日本の蝦夷卽ちアイヌなどはこれまで史家は棄置きました。人類學家のみが目を懸けて居りましたが、實際を見れば史學の目的物になります。相應の發展を致して居ります。要するに發展といふことは最も重要な事であることを忘れない樣に願ひたいものであります。

史學の區分

歷史の原を考へますに地球の殼の上で、人間の生存するに適當なところで、而して適當な中にも特に多くの人數が集つて共同に生活するに甚だ便利であるといふ場所に、社會が發達する、さうすればその中に國家が出來て來るので、社會國家相須つて進んでゆくもので、その進んでゆくところの有樣を研究して成績をあげてゆくのが、これが歷史の目的でありますから、由て歷史は必らず時と處といふことの二つに標準をたてゝ類をわけることを致さねばなりませぬ。

それで、まづ時の方面からしてお話を致しませうならば、社會なり國家なりは長い年間の間繼續致しまするもので、所謂時勢の變遷につれて內部の變化は無論起つて來ますが、大體におきましては、ほゞ同じ姿でつゞいてゆきますものでありますから、譬へば珊瑚礁のやうなものであります。水面より少し下には、珊瑚蟲が澤山集つて住んで居ますが、しかし共同生活といふ現象は發見致しませぬ、隨つて社會は組織致しませぬが、底へはいれば、もはや珊瑚蟲は生きて居ないで、つくつたところの岩石だけがあります、しかしそれは蟲がつくつたことは明かで、それは海底深くその岩石が出て居ますところまでゆきましても、皆岩石になつて居ります、現に蟲の生存して居ますところは、活きて居る蟲のからだでありますが、蟲の居ませぬ所は已に化石でありまして、下へゆくほど化石が益古くなるといふばかりであります。人間もこれに似て、極めて古い時代に基礎を置いて現社會は成立つて居りますが、その古い社會は今亡びて化石となつて居ります。その次の時代の社會も同斷、化石となつて居ります。極めて近い時代になりませぬと、現に生存して居ませぬ。目の前の適例をあげて見ませうならば、明治の社會は、今日までに何十度もかはり〳〵、前の社會が亡びては後の社會が起るといふ鹽梅にうつりかはつて來ましたもので、今日の明治の社會は維新前の社會ではありませぬ、維新前の社會は已に化石になつてしまつたのであります。

どこの國でもさうでありまして、ヨーロッパでもさうで、ギリシア、ローマの社會は著しい化石であ

りまして、中世諸國の社會も亦今日のところでは已に化石、十八世紀も已に化石になつてしまひましたが、十九世紀の社會はまだ現に生活して居る、二十世紀には、まだ、はいりたてゞあつて十九世紀の社會だけはまだ現に生活して居ります。先には例をとるにわかりよいと思ひましたから珊瑚礁をあげましたが、比較をとるならば、それよりも、一般動物界の方がよろしい。何十萬年か何百萬年か、年數はわかりませぬからいふものもありませぬが、要するに一回一回段々組織が複雜になつて段々相違を生じて來まして、今日のいろ〳〵様々の動物を生じて居りますが、それが今日になるまでには、いろ〳〵様々の姿をなして來ましたことは、古生物學の充分證明するところで、少しも疑ひのないところであります。そのことはすぐわかることで、手近に然るべき教科書も現にあれば、それを見られるがよろしからう。又人間のからだが、今日までに至つた有様は、他の動物とかはらぬといふこと、又人間の卵が今日の人間の形になるまでには、いろ〳〵様々の形にかはるといふことも、皆その方の書物にかいてあつて、異論のないことであります。社會もこの通り、今日まで非常の變遷を經て來まして、その一變遷をなす毎に、後の社會が前の社會の缺點を知つて、どうもこゝがわるかつたと、自覺して自ら工夫してゆくのもあり、又しらずしらず周圍の事情によつて次第にうつりかはるのもあります、前者は稀であるが、後者はなみであります。このことはローマの制度をしらべますと、よくわかります、共和制度の實質が次第に變つてゆきまして、遂に名までもかわつてゆくといふ非常なかは

り方で、遂に五世紀の頃になると、世界史の教科書などにも、よくあるところの封建制度（封建制度とは申したくない封建といふは西洋史の研究が頓と至らざりし時代に作つた言葉らしいから、知行制度又は地頭制度の語を用ひたいのであるが、かりにわかり易いやうに、かう申して置きませう。）あの姿を現はすやうになりました。

今日のそれらの教科書などで見ますると、ローマの滅亡を以て古代史を締め切り、次にうつる間に谷があるやうに思はれませうが、この間は決して谷でも山でもない、平野坦々たるものであります。事實を申せば、ローマは五世紀より以前に亡びて居まして、唯名ばかりが殘つて居たのであります、その名がなくなつた時が、即ち普通に申すローマ滅亡の時であるに止まつて居るので、所謂ローマ滅亡の時と、その次の時代との間は、山も谷もなく、唯のべつにつゞいて居るばかりであります。すべて斯くの如く、社會といふものは自然に周圍の事情に應じて、段々に順を追ふて變つてゆくので、ローマ人は即ち不知不識の間に、かう段々と變つて來たのであります。自餘の社會に於ても國家におきましても、さうでありませう、自ら工夫して、姿をかへてゆくのではなくして、即ち必要に應じて、ある一の方面の方に力を注げば、その方面が盛になつて、棄て置いた方面は段々消えてゆくことは、動物界の原則と同じでありませう。動物界に於て已に用ひぬ器官は退縮してゆきまするし、用ふる器官は發達しますが、それと同じく社會も段々と變遷致してゆくのであります。

これでありますから、歴史を一の時によつて裂くといふことは、實質の上から申せば、もと〳〵出來ない相談でありますので、どこで切つて宜しいか、連綿として居て、わからぬものであります、國家もさうでありますから、國家の歴史とても同樣であります。しかしともかくも、どこか始めるところをまづ考へなければなりませぬが、それは社會が一通り成り立つて、已に國家といふ現象もあるに至れば、それは已に史學の目的物とすることが出來ますから、それから始めるべきでありますが、何にせよ史學は實物研究で、證據物件を捕へねば、何とも研究の仕方がありませぬからして、たとへば古生物學者が、云々の形の動物があつた筈だがと探して見ても、實物の見當らぬ間は何とも申されぬ如く、古い國に至りましては、この類が實に多くあります、まことに已むを得ぬ次第であります。でありますから證據物件のあり始める時から、歴史を起さなければいけませぬ。

その證據物件は、まづ第一が地名であります。太古の言語が殘つて、但しその意味は忘れられて、唯さういふ名であるとのみ思ふて傳はつて居ますものであります。種族の名稱もさうであります、種族の名稱は、普通何の事だか、ちつともわかりませぬものであります。日本人のことをシナ人がむかし倭と申した、ローマ人がドイツ人のことをゲルマニと申したとか、又はケルト人が、このドイツ人の事をテウトンといつて居たとか、又ローマ人が今のフランス、北イタリア、イスパニア、イギリス等の舊人民をケルトと申して居たとかいふことは、たしかな事實でありまして、明白な事でありますが、これら諸名稱の意味に至つては、何のことやら明かでありませぬ、こじつけの説はないではあり

ませぬが、果して當つて居るや否やは知れませぬ。かやうに地名種族名などは、最古の名として殘つて居ります、神の名もさうであります、これらは第一の證據物件であります。

次では實際の地理であります、地理は無論年代によつて變化してゆくものであることは、地質學者のいふところで、地理學者も無論之を認めます。けれどもが、その變化といふものは、非常に遲緩なるものであります。地盤の薄弱なところ、日本のある處、イタリアのある處などの如き、激しき變化は間々ない事はありませぬが、これは例外であります、規則として地理の變化は極めて遲緩であります。故に人間の時代なんどいふ近い話では、凡そ吾人の觀察で、どれだけの變化を經て居るか位のことは、とにかくわからぬ事はない、難義な仕事ではありますが、出來ぬことはありませぬ。でありますから地理なるものは、たしかに一の證據物件であります。

次には、その時代の遺物であります。大きな石で以て作つたところの記念物とか、何か文字で書いたところの碑銘の如きもの、これらが往々にして殘り留まつて居ります。本邦の各地に、いつの時代のものか、よくわからぬ、殆んど天然の岡かと思ふほどの宏大な古墳がある、これらは古代の記念物で、大きな一枚石を組んで石槨をつくつて、その內へ人を葬つて、その上へ山をつくつてあるのであります。かういふたぐひが澤山あります、銘はありませぬが、これらが證據物件の古いものであります。

これらを證據としてゆきますれば、最古の時代はともかくもわかりますが、その時代と、あとの時代との連絡がなければいけませぬ。今申した證據物件たる碑銘（日本には碑銘はありませぬから、日本には望むべからざることであります。）などがあればよろしいが、それがなければ、神名、地名、地理、遺物などで以て何千年前かと、見當をつけることは出來ませぬ、困難であります、定つた年代にはめるといふことは甚だ難義であります。たとへば古墳は大化以前のものであるとは誰にも云へるが。その樣なバツとしたことでは困るのであります。

次に古事記の如き、語部の傳へた古傳、又日本紀などにも古傳があります、それからポツ〳〵證據はあがりそめますが、まだ〳〵はつきりさせるには困難であります。

その次に、今度は纏まつた國家の有樣などが、ポツ〳〵記事にあがつて來ます。こゝに至れば、大分わかつて來ます。その樣は、恰も東の空が白んで、次第次第にあかるくなつて、天一面に白つぽくなつて、雲が見えそめ、それが段々紅色に染められて、遂に太陽が首を出すといふ順序と、ちつともかわりませぬのであります。

それで史家の方では、とにかく史料がほゞ一通り備はつて、それより以後の方へ向つては、充分なる連絡點を充分に與へられるに至る時代が初めで、こゝから歷史にはいることが出來ますので、この時を以て有史時期と名けることになつて居ります。

歴史上に往々有史前後をいふものがありますが、人類學などでは、歴史のない時代の方が面白い、卽ち有史以前が本來の人類學の眼目でありますから、それゆゑに人類學におきましては、有史前、有史後などいふ言葉が出て參りますが、史學の方では、有史前は調べることが出來ませぬから、有史前後といふ言葉は、史學には用のない言葉であります。

歴史の始まるべき時期は、以上申したところで、ほゞおわかりになりましたらう。由て次には、終であります。終は、これも實に知れませぬ、何さま國家社會は非常に複雜なものでありまして、周圍の事情に應じてかわりますから、內部でどうかはるか知れませぬ。ゆゑに史家は、未來を容易に豫言することは出來ませぬ。

強いて豫言しませうならば、非常な條件つきの豫言で、假設命題の姿に言はねばなりませぬ。例へば財政整はざれば國家亡ぶといふ史學の原則であります。これは多くの國家の歴史をしらべて、歸納法で出した所の原則であります。しかしこれも、現に國家があつて、その財政整はざれば亡ぶべしと豫言は出來るが、その國家の人々も、財政の整はないのは、皆苦々しく思ふて居ることでありますから、國家が已に老衰して居るならばいざしらず、活力盛なる國家であれば、やがて整理がつきませう。さすればこの豫言は當らぬことになります、地質學に於ても豫言はむづかしいが、史學に於てもさうであります。例へば地質學者が、東京灣は今日の程度にして埋まらば、向ふ何十萬年の中に全く陸地と變ずべしといふと假定しませう、（かういふ愚論は地質學者は致しませぬが、もしすると假定すれば、）さすればそれは非常な大條件附であります。地球の內部が收縮すれば、ある所におきましては地盤が陷落し、あるところにおきましては地盤が隆起し、又あるところにおきましては隆起したり陷落したりする。卽ち地盤といふものは、その現在のまゝではなくして、上つたり下つたりするのは往々見受けるところでありまして、又いつ何時外洋に於て海底にいかなる變動をうけるかも知れませぬから、かういふ豫言をしても當るや否や、ちつともわかりませぬ。さういふ非常な大條件つきであります。もしその條件通り行はれると致しますも、地質學者の豫言が充さるゝまでには數十萬年を要しますのであります。今申した東京灣が乾涸（ひから）び る事の如きは數十萬年後の事で、社會がそれまで生存するか否かも知れませぬ、故に誰もかういふ豫言をするものはない、史學も豫言の出來ない事はないが、非常な大條件を持つての豫言でありまして、その大條件も十中の八九は半途でこわれて、豫言は無效になりませう、故に史學に於ては後の事にはあまり喙を容れたくない強いて豫言しろとならば、大條件を置いて何とかしないわけではないが、とにかく餘り後の事はいふを好まないのであります。故に史學より申せば今月今日までを題目と致しますので、この間に於て、どういふ變化が起つて居るか、今月今日までとつて來たものよりも、更によい策はないかといふ事を觀るのであります。

國によつて違ひまするが、有史時期から今月今日までは、最も古くて、先づ五千年でありませう。世

界最古の國と思はれまするのはバビロニアで、次で古いと思はれまするはエジプト及びそれに彷彿たりと思はれまするはインドでありませうが、これにしても五千年位でありませう。故に人間の歴史あつて以來といふものは、ざつと五千年であります。人間から見ますれば、五千年の間生存して居る社會は非常の長壽である。インドは國家は屢々かはり社會はいくつにもわかれて居て、この散り散りの社會を今日のイギリスほど一統した國家は曾てありませぬが、その社會だけは生きて五千年の長壽を保つて今に至つて存して居ります。エジプトも首長は度度かはりますが、社會だけは生存して居ります。バビロニアは、夙くに滅亡してしまひました。この上下五千年の歴史を持つて居るべき筈のものはエジプトとインドとでありますが、この兩國の歴史を何とかして時期を切る事は出來まいか、社會の壽命としては非常の長壽であるから、少しは時期を切る事は出來まいかといふ疑問が起つて來ます（地質學上から申せば一瞬時ではありますが、）。

地質學者は何百萬年たつて居るかわかりませぬところの地層の歴史をいかに分つて居るかと試に參考して見まするに、地質學者は成程わけて居ります。地質學者は之を大別して太古代、古生代、中生代、新生代、この四大別に先づ以て裂いて、それからこの中に太古代を、ローレンス紀、ヒューロン紀の二つに更に裂いて居る、その次の古生代は何と裂いて居るかといふに、ケンブリア紀、シルリア紀、デボン紀、石炭紀、ペルム紀、中生代を裂いてからに、トリアス紀、ユラ紀、白堊紀、新生代を裂いて第三期、第四期、と通常にいふのであります。地質學の方では、かういふ風に裂いて居る、そのよりどころは、皆この期の中に發展して居る生物によつて居る。その生物なるものは、極めて單純なものからして、次第に極めて複雜なものへ、又種類の尠いものからして多い方へと、次第に動物界にも植物界にも、さうなつてゆくので、古いのは絶え、新していのは跋扈する、さうしますると更に新しいのが首をあげ始めて、前のものゝ跋扈が段々消える時が來る、かくの如くしていつの間にか生物界がかはつてゆく、その中で特に著しい生物の發達した層があるので、その層を一紀として出してあるので、卽ちこゝに何紀何紀と申すのは、その紀の特色たる生物が標準なのであります。

歴史もこの調子で割く事が出來るかどうかといふに、出來うるか否か、やつて見ませうが、人間社會は周圍の事情によつてかはつてゆくものでありますから、社會といふものは段々かはつてゆかなければなりませぬ。かう見まするに、何れの社會も、長く生存して居るものは、段々と變遷してゆくものであるから、社會がかはつてゆくに隨つて分けたらばどうかとは、誰の眼にも上るところであります。因て舊くから眼の見える人は大凡かういふ方針をとつて時期をたてました、白石の讀史餘論もこの風に時期をたてゝあります。されば史學をまづこのわけ方に從つて分けて見ませう。

第一　時による區分

社會の變遷はいづれの國にも必らずありまして、世界中にいづれの國の歴史にも適用する事の出來る標準であります。もつとも社會が甲の姿からして乙の姿にうつりかはるには、至つて徐々とかはりますので、バタリとかはるのではありませぬから、はつきりとした線を引けといはれては困ります。甚だ臆斷とはなりますが、かりに便宜上何とか工夫をつけまして裂くことの出來るところを堺として裂いてゆくといふ方針をとりませう。さうしますると、歴史の、この期といふものが、數百年に跨るのもあらうが、場合によつては數十年のこともありませう、よほど僅ばかりの年限の期といふものがことによると出來て來る。その著しい例をあぐればフランスの大革命の期、日本の維新以後の期の如きは、最も短いものである、維新以後の期は、しかしまだよほど長くつづきさうでありますが、フランスの大革命は過去のことであるからよく分つて居ります、僅かに十數年間であります、これだけが一期なのであります。長いのは數百年に及ばうといふのもある、例へばシナの歴史を見まするに、南北朝、即ち六朝の時代には、シナが南北にわかれて、南部は漢種族が住んで、北部は異種族が住みつきました、そのものは他よりシナへはいつて來たもので、シナの文物に遭ひまして、次第にばけてゆきました時で、これは著しい期であります。やがてこの有樣が變りまして、北と南とが一所になりますが、初めは無理に一所にした樣の姿で、もめて居る姿、渾沌たる有樣であります、これが隋の時代であります。唐に至れば少しの隙間(すきま)もなく國民全體が一所になる、是に於てか唐の文物彼が如く盛大

に至つたのであります。即ちこゝにはまづ六朝といふ著しい期があつて、次に隋と唐とは一の期である、これは各〻三百年づゝきました。それから今度は又唐の社會が段々變遷をはじめ出して、ある方面へ進歩しかけた、それは社會があまりあきすぎて充分に纏まりにくい、よつて潰裂の狀があらはれてシナは遂に十にわれました、これが即ち五代十國の時期であります。これはざつと百年許、かうふい期が、とにかくあらはれて來ました。かういふ風に期の長短は定まらぬものであります。これは何れの國に於ても見る事が出來るものであります。

かやうに、期なるものは、いづくの國の歴史にも多く設け得るものでありますが、この期を幾つか合併して一の代にまとめることが出來まいかといふことは次で起つて來ます。これも地質學者の教をまたずして、史學が古くからやつて居りますことで、なるほど甲乙丙丁と期はうつりかはつてゆきますが、それはさほど激變するものではありませぬから、何程かの期といふものは、至つて類似のうつりかはりの現象でありまして、とにもかくにもその類似の點を見つけ出して、その類似の點によつてこれを一まとめにまとめることが出來る。たとへば甲乙丙丁を何代と名けるとか、又次の戊己の二期は何代と名をつけやうとか、かういふ風にまとめてゆく工夫でありまして、ヨーロッパにおきましては、大分古くから隨分人がこの企をやつて居るのでありまして、(期に分けることは、極めて近頃の事で、古人の氣のつかぬところであるが、代に分けることを考へて居た人は、隨分昔からあることであります。)いろ〳〵と考へた人もあることであります。

まづ十七世紀の人で、ドイツのハルレの大學教授チェルラリウスが初めて試みてみたのであります。チェルラリウスはヨーロッパの歴史を三代に分けました、これを名けて古代、中世代、近代と、かう分けたのでありますが、この人の所謂古代といふのは、太古よりしてローマ帝なるコンスタンチヌス、マグヌスまでといふ所で切りました。それから中世代といふのは、トルコ人がコンスタンチノブルを攻め取つた時までゞあります、中世をこれで終らうといふのであります。そのあとが近代であります。これはまづ初めのうちは、頗る議論がやかましかつたのでありますが、とにかくこれが行はれるやうになりました。これはヨーロッパの社會が、この時に於て著しくかはつて居るからして、こゝに代を置くといふ趣意であります。

科學のまだ進まない時代に、かゝる考を出したのはえらいものであります、その時の人がやかましく申したのは、その時分の人は、神からイエスの誕生まで、それから今日までといふ風の說で攻擊するのでありまして、固より論ずるに足りませぬ。とにかくこの代のわけかたは理由のあることでありますからして、反對者のあるにも拘はず、行はれはじめて、遂に世界史に古代、中世代、近代といふ言葉のあらはれて居る淵源をなして居りまする。以上が時に於ける區分の大略であります。

第二　處による區分

次はところによつて區分を立てゝ見ませう。ところによつて區分を立つると申しまするは、歴史上の事實は、必らず世界のどこかで起つたことであるから、どこそこで起つた事件と、場所ぎめにすることが出來ます。有形の事柄ならば申すに及ばず、よしや無形の事柄なりとも、どこかに起つた場所がある、その場所によつて區分を立つることは、至つて容易なことであります。何さま世界には多くの國があつて、その國は今は亡びて全く化石の樣となつて居るのもあらう、又は衰へながらも形は存して居るものもあらう、又は割合に後に興つた盛なのもありませうが、何か區分を立てませんければ、一目の下に悉く之をしらべることはむづかしいのであります。故に人々によつて種々の區分の仕方を考へて來て居ります、こゝにまづその區分法の一例をだして見れば、かういふわけかたが出來るのであります。

まづ第一の區分第二の區分と二つにわけます。第一の部におきましては、世界各國の歴史を何とか工夫をつけて一纒めにしらべて見やうといふ區分でありまして、卽ちこの第一類におきましては、又左の二種をわかちます。

甲、俗に申す所謂萬國史といふもの、これは尙精確に申しますならば、ひろい意義に於ていふ文化史であります。文化といふことばはつかひたくない、それで、もし人が許すならば之を進化史と私は申したいのであります。何をこれが指すのであるかといふと、太古の世の中から今日に

至るまで、苟も地球の表面にあらはれたところの人類が、社會を組織し、その中に國家なるものを興して、いろ〳〵の振舞はたらきを致して今日に至つて居るこの事蹟を人類全體の事蹟としてしらべるものであります。このものは、かくの通り定義を下していふならば、出來べき筈の歷史の類でありますが、實際のことを申しますと、今日の史學の程度に於ては、未だ實行の出來ざるものであります。なぜと申しますに、歷史初つて以來は五千年位になりますが、この五千年間世界の人類は方々に割據して、その周圍二三箇國とは交渉をつけて居りますが、世界のあらゆる國々と、皆交渉をつけたといふ國は、未だ曾て發見しないのであります。又あるべき筈でありませぬ。して見ますと、人類が一の社會をつくるものと見做してからに、そのふるまひ又ははたらきぶりなどの事蹟をしらべてゆかうといふことは、いへることはいへますが、實際その證跡を發見することは出來ませぬことになります、言ひかへれば、理想の上ではいふことの出來る歷史でありますが、證據物件によつてやつてゆかうといふ、我等の所謂史學では、到底出來ぬ歷史であります。かやうの歷史は人類發展の歷史であつて、人類學家の修むべきものでありませう。

乙、これは萬國史と普通にいふものでありますが、精密に申せば各國史と申した方がよろしいもので、尙學術上に正しく申さば、國家列史といふべきものなんでありませう。これは何ものかと申しますと、上下五千年間に世界の諸處にあつまつて國家をなした各國民を、ある順序によつて順々にしらべてゆく歷史で、これならば今日の史學の程度で出來ることであります。おたがひにどういふ關係があるかないかは構はぬ、日本橋の魚市場で魚を數へるやうな工合に順ぐりに數へればよろしいのでありますから出來まする。至つて器械的の極めて幼稚なる分類のしかたであります。

次は第二の區分であります、第二の區分におきましては、第一の區分とは違ひまして、人間は一つの社會をつくつて居るものと見るなどゝいふ假定を置かず。何か人間のした仕事の一部について研究するといふ方針のものであります。全體にわたつてゞはなくして、何か一部をかぎつて研究するものをこの第二の區分と致しませう、さうしますと、まづ質の方に重きを置いて分類して、これを甲と名けて見まするならば、左の如くであります。

甲、

イ、通俗に申すところの文化史、狹い意義に於ける文化史であります。何の事であるかと申しますならば、個人が社會の細胞なり國家の器官なりとしてはたらいた成蹟といふのではなくして、自分一個の私の仕事としてなしてゆくところの成蹟の研究でありまして、社會にあらはれた人類の生活の有樣、あるひはその思想のすがた、あるひはそのふるまひの有樣などの結

果のあつまりであります、さういふ意味なのであります。文明といふことは人によつていろいろ意味がちがひますから、明の字をむしろ私はつかひたくない、文化史と申したい、明といふ字があるだけに却つていけないのであります。

ロ、これは俗にいふ政治史であります、あるひはこれを國民史と名ける人もあります。何の事かと申しますに、國家の組立ならびに、國家の生活の歴史のつもりでありまして、政治史といふのは、先づ一通り意味がわかりますからよろしうございませうが、國民史など申しますと、その中に隱然政府と國民とが相離れて立つて居るやうに見えます。この兩者は、もともと相離れて居るものではありませぬ、政府を讐敵(あだかたき)の如く思ふ國民がその政府に支配されて居る筈もなし、又國民を仇敵の如く觀るところの政府が、長く立つて居る筈もありませぬ。故に特に國民の歴史などゝ申しまするは、間違ひ切つた話と私は思つて居ります。が、普通には、國民史といふ言葉はないではないのであります。外交史、行政史、立法史、財政史、司法史、兵制史などゝいふ類は政治史の小別(こわけ)であります。

乙、これは量の方に重きを置いて研究する類で、これには澤山の種類があります。

イ、これは文化のある部類の歴史であります。たとへば經濟史、商業史、風俗史、工藝史、學藝史、美術史、法律史、宗教史、教育史、文學史、その他これに類したものである。又今申上

げるところのものを更に分類して說明することも出來ます、たとへば經濟史の中を種々に別けて貨幣のこと、交通機關のこと、租稅のこと、物價のこと、小作借地料のことなど皆それ〴〵歴史があります、又商業史の中から裂いて各種類の貨物を一つ一つ分けてその聚散の歴史を說くことが出來ます、又工藝史の中から裂いてからに各種類の工藝を一つ一つあげることが出來ます、風俗史も亦一つ一つの風俗を種類わけにして、その歴史を研究することが出來ます、美術史と申しましても各種類についてそれ〴〵の歴史が研究出來ますし、法律史と申しても各法律をバラ〴〵にわけてその歴史を研究することが出來ますし、學藝史も各學藝を個々にわけて、その歴史を研究することが出來るのであります。

以上のイに屬するものは甚だ廣く、極端に申せば何千にも及びませう。

ロ、これは政治上の區分を各部にわけて研究する歴史で、例をとつて申しますれば、ある特に關係の緻密なる國々だけの歴史をあむことも出來ます、ヨーロッパ史、アメリカ史の如きもこれでありまして、又一國の歴史といふものも書くことが出來ます、何々國史といふものは、これであります。又一國中の部内の歴史も書くことが出來ます、何縣何郡、更に降つていへば町村の歴史までも、書かうと思へば書けます。すべて國、縣、郡、町、村などゝいふやうに、行政上の區別であれば、いかなる小さいものでもこの類の歴史は書けます。

ハ、この部に申さうといふのは、一地方の歴史であります。例へば日本で申さうならば江戸の歴史であるとか、大阪の歴史であるとか、但し又舊島津領の歴史であるとか、舊毛利領の歴史であるとか、舊仙臺領の歴史であるとか、舊秋田領の歴史であるとか、かういふやうに地方の一團體をなして居るところの歴史を書くもので、これも極めて小さいところまで書かうと思へば書くことが出來ます。日本で少々出來かゝつて居ります藩史といふものは、即ちこれであります。又寺領の歴史、社領の歴史なども一々書かうと致せば書くことが出來ます、高野山の寺領の歴史とか、延暦寺の寺領の歴史だとか、嚴島の社領、阿蘇の社領の歴史とかいふものも書かうと思へば書けます。

ニ、これは、ある種類の人間の團體の歴史で、たとへば一種族の歴史、即ちインド　ゲルマニ種族の歴史とか、あるひは漢族種の歴史とか、あるひは、この日本種族の歴史とか、種族別にして書くところの歴史、更に又それを裂いていふことも出來ます。たとへばゲルマニの中のサクス、アラマン、フランク、フリースなどの各〻の歴史といふ樣に、更にこまかく別けてかくことも出來ます。又個人の歴史も書けます、個人の場合では通常史と申さずして傳といひます。無論一軒の家の歴史も書けます、何がし家の歴史といふものも書けます。

ホ、これは一時期の歴史であります。たとへば十九世紀史とか、あるひは江戸時代の歴史とか、

その上へ溯つていふならば、桃山時代の歴史、安土時代の歴史、室町時代の歴史とか、時期を切つて歴史を書くことも出來ます。ある時期だけの歴史であります。

ヘ、何か著しい事柄がありまして、その事柄についてかく歴史で、例へばフランスの革命の歴史、關ヶ原の戰の歴史、奥羽拓殖の歴史とか、明治維新の歴史とか、文祿征韓の役の歴史とか、さういふ一部一部の事柄の歴史が書けます。

もつとも今申した部類別の外にまだ〳〵考へれば出て來ますか知れませぬが、まづ一例として、こゝに以上だけ擧げて置きます。この各種類の歴史は各組み合せて書いても差閊がない、離して書いても無論よいが。

以上が處わけの區分の大略であるが、今日の史學の進歩程度に於ては第一類の歴史は遺憾ながら極めて不完全なものしか今日は出來ませぬ。もつともその乙は、どの萬國史の教科書を見ても書いてある極めて容易なものでありますが、史學の眼から見れば、殆んど苦心して編纂する價値のない極めて卑近なものであります。甲は現在の史學ではまだ書くことが出來ませぬ、これは世界の人類が一社會としてなした仕事をしらべるのでありまして、例へばイギリスのロンドンにありますかのイングランド銀行は、唯今におきましては、世界を一統して居るところの大社會の心臟を組織して居るものでありまして、あそこから金融が動いて居りますので、もしかの銀行が破産するやうのことがありました

らば、この人類の社會は死ぬとまでには及ばずとも、非常に衰へねばなりませぬ、之に代はるものがなければ、到底駄目になつてしまひませう。又萬國郵便制度、萬國電信制度、又各種の萬國會議、これらは諸方から委員を集めて、これはどうしたらよいとか、わるいとかきめて、當會議でかう決定したと致しますもので、この種類のもので最もよく目的を達して著しい功績を奏したものは、萬國子午線會議で、標準時をきめて汽車の衝突を免れて居る次第でありますが、かういふこと、又は赤十字社の慈善事業、これらは世界の人類が一社會としてなした事と見てよいのであります。しかしかゝる傾向は、極めて近い事でありまして、わづかに三四十年來の事であります。して見れば、なるほど今日は多少人類が一社會をなして居る姿があるにせよ、この有樣より逆に推して、五千年來世界の各地方に生息して居た社會の人間を、一網にうつて證據物件についてしらべてゆくことは、今日の史學では遺憾ながら出來ませぬ。又おそらく後來とても出來ますまい。但し今日の姿になり來つた手續だけならば勿論出來ませう。

さすれば科學的にまづ出來やうかといふのは、第二類のものでありますが、第二類のものは、それ〴〵苦心さへすれば功績を擧げることが出來ませう。普通に史家が骨を折つて一々證據物件に就て極めて確實な說しか立てぬやうにして科學的の歷史をあみまするのは、卽ちこの第二類なのであります。それも出來て居ない國もありますが、出來て居ても第二類より外にはありませぬ。世界のこの五千年

以來の歷史を見まするに、今申す通り、これが人類が一社會をなして居るものとしては到底歷史を編むことは出來ませぬが、ある組み合せとなつて、ある國民が相互關聯してはたらいて居ることは明瞭でありますから、この方から書けば例へばヨーロッパ史と申すものは書けます。ギリシア、ローマ以來非常な緻密な關係を以て今日に至つて居りますからヨーロッパ史は書けます。次で明かに書けますのはアメリカ史であります、南北アメリカの歷史であります、昔のインカ帝國アステク王國以來、今日のアメリカ合衆國や、カナダや南アメリカのアルヘンチナの類の諸國に至るまで、これも系統的に研究して歷史をかくことが出來ます。これらは全く一つの組み合せをなして居ります。

又ヨーロッパ史、アメリカ史ほどは組み合せ方が緻密ではありませぬが、少し散漫の傾はありますが、尙多少の關係を立てることの出來るのは東洋史であります。もつとも私のいふ東洋史は世間に普通にいふ東洋史ではありませぬ、私の申すのは、卽ち葱嶺（スンリン）の山、怒江（ルウキアン）の川を堺として、これより東の國々の歷史であります。これは今申す通り連絡は散漫でありますが、組織はあります、よつて學術的にこれを一組として研究することが出來ます。

又私が西域史と名づけまするは是も世間に普通にいふ西域史ではありませぬ、葱嶺の山、怒江の川よりは西であつて、リビア沙磧よりは東に當つて居るところの諸國の歷史であります、簡單な語で、煎じつめて申しますれば、インドからエジプトに至る諸國の歷史であります。これも互の關係は隨分

散漫でありますが、しかし緻密の關係が、ある點に於てはあるのでありまして、東洋史よりも組織はよく立ちます。それはかの佛教と申し、ゾラツストラ教といひ、イスラム教と申し、キリスト教といひ、これらの世界の大宗教が何れも皆こゝに發生發展して居ることを考へれば、わかるのであります。普通には東洋史の中へインドをこめるので、それでインドと他の東洋諸國との關係が、まことにつきにくゝて困るのであります。しかしこのわけ方によれば、インドは西域史に屬しますから、今普通に東洋史を編纂する人の困難はなくして、西域史について、却つて自然の關係につながつてゆきます。

それから又今のところでは、發展がまだ不完全で、到底組織を立てることは出來ませぬが、ゆく〳〵は南洋史を組立てることが出來やうと思ひます、勿論この意味におきまして、南洋史を立てるならば、インドネシア諸島のヂャバとスマトラ、臺灣の南にあるフィリピン群島、それからしてアウストラリア、ニゥジーランドなんどが重大なる骨となつて立つところの歴史でありませう。

しかし今日では、まだ〳〵南洋史と特に歴史を立てゝもらふほどに發展はして居りませぬから、我等はやむをえませぬから、インドネシア諸島、その重なるものヂャバ、スマトラ、次でフィリピン、この邊は歴史も立派、地理上よりいふも頗る有益な知識を與へ、物産の方面より見るも商業上に重大なことであるし、言語の上から見ても一種特別のマライ語といふ言葉がこゝに行はれて居るし、この方の學問の爲にもなると考へて、特に南洋學といふを學科として興さうと致して居るのであります。今日我等が立てやうとしつゝある南洋學とは、上にいふ南洋卽ちインドネシア、メラネシア、ミクロネシア、ポリネシア、アウストララシアの各部全體に跨がるものといふ考ではないのであつて、その極の一部分の、特に古い歴史をもつて居るだけを範圍として置かうと思ふのであります。

二　史料編

史學の材料

史學を研究するには、先以て材料の取り集め方から初めんければならんのであります。すべての科學におきまする通り、學をたてやうと思へば、その學の基礎となる種子を集めて來なければならぬ、種子が集れば自然學は成立つて來る筈なのである。史學に於ても勿論この種子が極く大切のことでありますから、古來人が何か一つの歴史を編まうとする時は何とかその種子を集めやうと先以て苦心したもので、眞面目な史家は皆この種子を集むる爲に數十年の苦心をして居ることであります。例へば江戸幕府の時代に代々大學頭で當代の教育事業を主宰して居た林家で、幕府の命を受けて本朝通鑑といふ日本の歴史を編纂した時分でも、材料を集めるには一通りや二通りの辛苦ではなかつたのである。又水戸家で史を修める志を起して遂には大日本史を著はしたが、この材料を集めるにも容易ならぬ苦心をしました。何様中央政府とは違ひまして、命令を出して集めるといふことは出來ませぬから、編纂員を地方へ出して、出來る限り地方を探訪して歩いたのであります。その苦心の程度を考へて見ると、今日大學が編纂員を各地方に出張させて材料を集めて居るのと比べものにはならぬ次第で、到

る處にペコ〳〵あたまを下げて書類を出して戴かうとしたのであるが、先方では、傲然として御覧みだから見せますがと云つて、多い中から五つか六つを纔かに出して、玄關脇位の所へ水戸家の立羽な編纂員を置いて寫していかれよと云つた風でありました。その位の苦心を水戸家はしたので、實に難義をした。大日本史を今日見て、材料の取捨が不當であるとか、とるべからざるものを取つてあるとか、漏れて居るとか非難をするが、それは今日から申すことで、當時では、これより以上には出來得なんだのでありませう。本朝通鑑も出來うるだけの古文書類も集め材料も集めて書いたので、決して自分の識見のみで、筆先一つで舞文したのでは決してない、大日本史に於ても固よりさうであります。かういふ次第でありますから、古來眞面目に歴史を編まうとする人は、必らず材料を集めるに苦しんでかゝるのであるから、研究法に於ても先づ材料の取調べかたからして先へ考へてゆかねばならぬ。それ故に研究法の本論として通常史料編といふものを開卷第一に置いてある。

ヨーロッパの史學の進歩して居る國々では、それ〴〵多分の材料が已に世に公になつて居ります。又ヨーロッパに比較していへば、史學のまだ幼稚なアメリカに於てもそれ〴〵莫大の費用をかけて、今日材料を出版して居る。かくの如くして歴史の材料を段々積み重ねまして集むれば集むるほどよいので申さばいつまで集めても恐らくこの材料なるものは盡くる期なきものでありませうが、しかし大凡一通りは集つたといふ時期は、いつか來るもので、その上は、これまでは贋物と思ふて居たものが實は

眞物であつたとか、あるひはからかみの骨を張つてあつた反古を偶然見たらば貴重の古文書であつたなどいふことはあるが、それらを除けば、とにかくいつか一通りまとまるのであります。今申した樣な、贋物と思ふて居たものが眞物であつたとか、からかみの骨を張つてあつた反古が貴重な古文書であつたなどゝいふことは、まゝあるが、まづ澤山はないことであります。各國で假に材料をかりあつめてそれ〳〵公にして居るのも、まづ一通り材料をそろへるといふ方針で、あらむ限りを盡さうとの方針ではありませぬ、又さういふ方針をとれやう筈もありませぬ。

かういふ歷史の材料は申すまでもなく、必らずしも書類に限つたことはございませぬ。いろ〳〵雜多のもの俗にも申す古太鼓の破れ皮でござれ、はき棄ての鞋でござれ、何でござれ、昔から傳はつて居るものならば、何でも材料になるので、決して書附類でなければ材料にならぬなどゝいふことは勿論ないのであります。實際の地理でも、ボロ〳〵の古い築造物でも、書畫でも骨董でも、よもやまの話でも何でも凡そ昔から傳はつて居るものならば悉く材料であります。たとへみす〳〵の似せ物でも、もしそのにせものを造つたものゝ了簡方がわかるなら、この似せ物が卽ちその時代の人情の證據物となる、卽ちこれも材料の一つであります。ましてあらゆる種類の小說、狂句、川柳の類などは最も一つの時代の人情　見るに極めて然るべき材料であります。世の人はやゝともすると史學の材料といふと何か眞面目な文章となつて居るものでなければならぬかの如く思つて居る樣でありますが、なるほど進んだ國家社會の歷史に對しては材料の多分はいかにも文章體になつて居ります。けれどもこれかりが決して材料ではないのであります。かういふ材料はこれを總稱して史料と申します。卽ち史學の材料といふことをつゞめた語なのであります。

いかにも此の如く極めて雜駁ないろ〳〵樣々の品物から成立つて居る史料でありますからして、何とかこれを部類わけする工夫をせんければならぬ。卽ち史料の分類でありますが、何とか分類の工夫をせんければならぬ。この仕方はいかやうとも出來ませう、先例によつて、こゝに一の分類の仕方を示して見ませう、かういふことになります。第一類第二類とわけます。

第一類は遺物であります、遺つて居るもの。遺物の種類として數へることの出來るのは、地理、古い築造物、古い儀式、人間の體卽ち人體ののこり、骸骨の如きもの、言語、制度、風俗、物產、古泉、公私の文書類などのたぐひであつて全く當代の名殘物であります、又かたみの性質のものもあります。例へば金石文のある種類、種々のいはゆる記念物それから編纂物の性質をもつて居る所の古文書類などはこの類であります。

次では第二類でありますが、第二類は傳へたる物でありまして、これにもいろいろ澤山ございます。その中書いたるものでいふならば、いはゆる歷史書、歷史像、又口から口へ傳はつて居るものでいふならば、神話、古傳、雜說、逸話、諺、歷史歌、その他尙ありませう。又書いたものであるならば、

歴史に關係したる金石文、これはこゝには編纂物の性質を帶びて居るものをさして言ふのであります、系譜類、記錄類、傳記類、覺書類、その他この類の書類は澤山ありませう。まづ大凡大別すればこの二類になるでありませう。

史料はかくの通りの尨雜なるものでありますから、大凡一の歴史上の問題を解說しやうと思ふ時には、何がその最も大切の材料となるか、殆んどあらかじめわかりませぬ樣の性質のもので、題にのぞむで始めてこの題には殊にかういふ材料がいるとか、あれがないと困るなどいふことがわかつて來るので、史學全斑に亙りてどういふ風の材料が最も適當かといふことはわからぬ、一々問題についてきまる話なのであります。かやうな材料を研究法に於ては證據物件といひ、而してこの證據物件が與へる所の事柄を證據といひます。言ひ換へて見れば史料なるものは卽ち史學の證據物件なのであります。史料編の目的とする所はかくの如き史料を成るべく最もひろくかり集めて之を整理するのにあるのでこの史料がどれだけの價値の證據を與へるとか、どういふ大きな成績を出すとかいふやうなることは、先づ考へないのであります。史料といふことの大體に就ては、先づこれだけに致しておきます。

史學の補助學科

學問はギリシアの古におきましては唯一つ限りよりなかつたので、卽ち哲學でありましたが、これが段々時代が下るに從つて、やはり工業などの如くに種々發達分類して、今日のいろ〳〵樣々の科學なり學問なりに裂けて居るのである故に、いろ〳〵の科學なり學問なりといふものは先づ以て兄弟の關係で、中には伯父甥の關係親子の關係のものもありませう。いづれにしても皆近い親類どもであります、決して一の科學なり一の學問なりが自分獨で立ちゆくことの出來るものではありませぬ、是非とも他の科學なり學問なりに助けられて立ちゆくものであります。これはすべての科學學問に就て然りといふべきでありますが、史學に於てもさうで、無論澤山な科學學問の補助を得なければならぬのであります。

もつとも絕えず側に居て口をきいてくれねば、史學がものをいへぬものもあり、さう始終は口をきいてくれなくとも、時々來て口をきいてくれゝばよいものもあり、あるひはどうかしたはづみに相談にゆかなければならないものもありまする、程度はいろ〳〵ありまする。今こゝに史學の補助學科といはむとするは勿論悉皆の科學をいふのでなく、始終側に居て口をきいてくれねばならぬといふものをあげやうと思ひます。これも史學一般にわたつていかなる題にもどの科學が尤もきれものきゝものであるとは申すことができぬ。ある問題をとらふれば、この場合にはこの補助學科がいるといふことが、その時にきまります。

近い例をとつていへば、醫學は極めて史學に緣の遠い學問の樣に見える、いかにも朝から晩まで側について居らなければならぬといふものではありませぬが、場合によりては是非相談にゆかなければなりませぬ。例へば有名な人の死樣などを調べるには、醫學が第一の補助學科となる、近い例をひきませうならば、平重盛はいかやうな病氣で薨じたのであるか源賴家はいかなる病氣があるので將軍職を廢せられたのであらうか、又加藤清正は果して家康將軍に毒をかはれたのであらうか、その他この類の問題で、人口に膾炙して居る所の人が、いかやうにして死んだかなどゝいふことは、場合によれば、その人の一生を品評する鍵となることがあり、又その時代の他の有名な人々の心術にも關係を及ぼして來ることもありますから、病症を確とたしかめねばならぬことがあります。今申す通りこの場合には、醫學は、平生の場合ならば史學には極く緣遠い親類ではあるにかゝはらず、特に第一の補助學科としてあらはれて來るのであります。卽ち重盛の病氣は胃癌であつたかも知れぬが、多分は肺病であつたのでありませう、何分史料が充分備はつて居りませぬから、はつきりとは斷言が出來ませぬ。又源賴家は發狂の初步にかゝつて居られたかと思はれます、但しこれも亦史料が充分備はらぬから斷言は出來ませぬ。加藤清正に至つては熱病でありまして、いかなる熱病か、その病名を擧げるのはむづかしいですが、何れにしましても毒殺でないことは明な證據があります。家康などは鯛の天麩羅を食ひ過ぎられて急性腸カタルを起して下痢がとまらないで亡くなられたので、これはよくわかつて居

ります。

又、平生の場合でいふならば、史學の側に附いて居て世話を燒いて居る補助學科であるのですけれども、事によると殆んど關係しない場合があります。例へば古文書學といふ補助學科は、史學の先づ右の腕といつて、然るべきもので、これが缺けて居ては史學が出來ぬといふ位の先づ重大な補助學科でありますが、この補助學科が史學を助けることが出來ぬ場合があります。手近な例で以ていへば、バクトリアの歷史、ソグヂアナの歷史、バルチアの歷史などにおきましては、とんと古文書が存しませぬからして、到底古文書學が盡力しやうと思ひましても、如何とも致し方がないのであります。この場合におきましては思ひもよらぬ古泉學が却つて重大なる應援を與へて呉れます、卽ち第一の補助學科となつてあらはれて來ます。今この二例で御覽になる通りに、どの補助學科が第一の補助を與へるかといふことは、一に研究する所の題目次第なので、決して豫めわかつて居るものではありませぬ。それゆゑに補助學科の順番を立てゝ、史學に必要な程度によつて順繰に呼び立てゝゆくことは出來ませぬ。玆に最も重大な補助學科を少しづゝ說明してゆかうとは思ひますが、順番には出來ませぬから、いはゆる着到順で思ひ出て順に少しづゝ話してゆかうと思ひます。卽ち次第不同で、記憶に着到した順であることを御記憶を願ひます。

第一　言語學

言語は卽ち言葉で、事柄思想を示すための符牒であります。この符牒がなければ事柄思想を後世に傳へることが出來ませぬ、もつとも實物としてからに、手につかめるところのものならば、必らずしも言葉がなくとも、卽ち符牒がなくとも遺物となつて永き後までも、後世までも殘つてゆきませうが、手につかまれぬものは、何か符牒を以て示して置かねば、到底後世に傳へることは出來ませぬ。是に於て言葉なる符牒が、非常な重大なものとなつて來まする。人の考とか、おもわくとか意見とか、學說とかいふものは、勿論無形のものでありますからして、符牒を用ひなければ、到底他人に傳へることは出來ませぬ、まして後世に傳へることは尙更以て出來ませぬ。それに加へて進みたる國家社會であつて見れば、重なる證據物件は何れも書類の姿になつて居るから、何れも皆言葉を以て示してあるのであります。この邊から考へて見ますと、言葉が分らんければ、何樣史學は出來ないことになります。もつとも太古の時代のことで、國家も未だ發達せず、社會もまだ幼稚であり、證據物件もまだ充分ない時には、この言葉も尙史學に補助を與へ得ませぬ、書類のない世であるから、言葉が力をあらはし得ませぬ。こゝに於て實際の地理とか築造物とか、いふものが第一の證據物件となつてあらはれる、卽ち歷史地理學とか歷史考古學とかゞはゞをきかせる場合である、

例へば太古のエジプトの歷史はこの場合であります、太古のローマの歷史もこの場合であります、太古のフェニキアの歷史もこの場合であります、その他古い國へ參りますれば太古の時代は往々にしてかやうでありませう。しかしたとひ書籍となつて居りませぬまでも、神の名とか、種族の名とか、地の名とかいふものは隨分太古から今日に傳はつて居ることのあるものであります。それでかやうなる固有名稱が傳つて居りますれば、この說明を言語學に依託します。言語學はそれ相當の力を盡してくれて、史學に應援を與へてくれまする。さすれば史學はこれをうけて、直に研究に着手することが出來まする、こゝに一つの例をあげて見まするならば、太古の時分、今を距ること大凡四千年位のことかと思はれるが、アイリア卽ちイラン種族が今のアフガニスタン、ペルシア、ロシア領トルキスタンなどのあたりを拓殖して居た樣である、これは何を以てこれを知るかといふに今申した所の地方に歷々と四千年程以前の地名の名殘であらうと思ふものが傳はつて居ります。又幸にして祆教の經典といふものが傳はつて居る、これはシナでいふならば、六朝の極く初め頃、三國の末と申しても宜しい、その時分に書き下したものと思はれますが、その作文は今より四千年乃至二千五百年程の間にすつかり出來たものであるらしい、これまでは文章を口から口にさづけていつたものであります。書き下しは今申した通り、六朝の極く初め頃であります。この經典は現に傳はつて居まして、所謂ゼンド言葉のアベスタ(經典)といふものがこれでありまして、ボンベー邊のパルシー

人等が信仰して居る所の經典であります。この經典の開卷第一に創世紀といふものがあります、この創世紀は殘缺しては居りますが、大分あります。この創世紀にアイリア種族が太古の時代に拓殖した所の土地の名前が大分にあがつて居ます。たとへて申さば、

アイリアナ、バエーヂ。これはアイリア種族の極樂の所在地でありますが、恐らく今のパミルの高原の中らしいであります。

スグダ。これはギリシア人の所謂ソグヂアナであることは明らかで、今のサマルカンド邊であります。

モウル。これは唐書あたりにも木鹿と書いてあつて、いふまでもなく今のメルフである。

バクヂ。これも今のアフガニスタン北部のバルクであることは論のないことで、シナの史料にも歴々見えて居ります。それからして、

ハローユ。これは恐らく金石文にハリバと見え、ギリシア人の所謂アレイアらしいです。今日もヘリといふ名の河がありまして、ペルシア領とアフガン領との國境をなして居ます。恐らくこのヘリ河邊の處をいふのでありませう。それからして、

ベールカーナ。これは金石文にバルカーナと見えて居つて、後世のグルガーン今のジュルジャンであります。

ハラカイチ。これは金石文のハラウワチス、ギリシア人のアラコシアであつて、今はアフガニスタンの中ガズニ、カンダハル邊であります。それから、

ラガ。これはペルシアの都テヘランの近邊に、その故墟が殘つて居まして、極めて有名なる處である、モンゴルが潰したのであつて、それまでは繁昌な町でありました。最後にもう一つ處をあげるならば、

ハプタ、ヘンヅ。これは梵語でサプタ、シンダバスといふのと同じ處で、七つの川の意味であります。今日申す北インドのパンヂャブ地方のことであります。

これらはアベスタの創世紀に皆出て居まする地名でありますが、何れもアイリア種族の拓殖地であります。彼等が四千年以前にどれだけの地に廣がつて居たのであるかといふことが、この地名を今日の地圖に對照して見たばかりで直ぐわかります。又北インドの、今いふパンヂャブの地は、アーリア種族とが共同に拓殖して住居して居た處であるといふことも、この梵語のサプタ、シンダバスが、やはりゼンド言葉で同じ意味でハプタ、ヘンヅと云つて居ることから推すことが出來ます。以上は言語學が史學に與へてくれます應援の一例であります。

かく言語を史料としてつかふことは、甚だ重大のことでありまするからして、今更に一つの例をあげませう。スウィスの山間にゆきますと、山間のやゝ野の如き姿をなして居る處が澤山にありま

す。この野には、わるい草を皆拔き去つて、然るべき牧草となるべきものだけを止めて置いて、こゝに牛を野飼に致してあります。五月の頃になりますと、一村の牛を、その方の心得あるものに委托しましてこの野に放ちます、さうしてその牛飼が朝と晩とに乳を搾つて牛酪乾酪の類を製造致してゆきます、さうしますと、野には段々澤山な牛糞が落ちますから、それを處々へ積み置きます、やがて冬が始まると雪が降り出す、その雪解と共にその肥料分が野一遍に流出する、それが天然の寒肥料となつてそれで牧草が肥えるのであります。さうして九月の末になりますと、又牛を曳いて村方へ歸る、それ迄はこの山間に牛小屋を建てゝ置いてその中に牛飼も共々住つて居る次第であります。このアルプの山間の草といふものは植物の中で有名なもので、何れも葉は厚く柔らかでありまして丁度菜の葉のやうで、背丈は割合に伸びませいで花は比較的に大きうございます。さうして花には必らず結構なる香氣がありまする。斯く氷雪を戴いた峯の間の野邊花開くところに數十頭の牛が悠々として、頸には例の鈴をつけてゴロン〳〵音をさせて遊んで居る所を見れば、いかにも仙境の思がするので、今も昔も詩人の好題目であります。牧草は已に佳いのでありまするし、水は已に極めて清いでありまする、空氣は申す迄もなく新いでありますから、牛は肥え太り、產出する所の牛酪乾酪はヨーロッパにおきまして第一等と稱せられます。かくの如き牧畜の飼養をアルプウィルトシァフトと申します、卽ち山野稼の意味に近うございます。しかしこのアルプウィルトシァフトは本來ゲルマニ種族の心得て居たことでもなく、又發明したこととも思はれないのでありまして、いづれ誰からか學んだことに違ひはないのです。スウィスの山間に居住しましたるゲルマニは、アラマンの部落でありました、アラマンはやはり他のゲルマニ部落の如くに農業と獸獵とをやつて居たものでありますけれどもが、牧畜のことは至つて心得て居りませんでしたことはよくわかつて居ります。このアルプウィルトシァフトを然らば何者から學んだものかといふ調を致さんければなりませぬが、何樣調を致さうにもアラマンの太古の時代に學んだことに相違ございませぬから、今日に至りまして書類となつて居りまする史料には、かういふ部落の太古の事などは頓とわかつて居りませぬ、又ローマ人の記錄の方におきましてもアラマン部落がスウィスの山間に入つて何者からこの一種の牧畜業を學びましたかといふことを報告してはありませぬ。そこで已むを得ませぬから言語學の應援を借りるのであります。どういふ風に言語學の應援を借りるかと申さば、かういふ原則によるのであります。凡そ一の藝術產業にして一の人より他の人へ之を傳授しまするときには、その傳授する所の人が、己の從來用ひ來りましたる所の藝術產業に用ひる所の言葉をつかひまして、己がなし居る如くにせよと致して傳授するのであります、故に傳授をうける所のものは、授けてくれる人が用ひ居ります言語によつて之を知るのであります。近い例が鐵道を敷くすべを我等日本人に敎へて呉れましたには、もとイギリス人でありましたからして、今日までも鐵道局の方でつかつて居まする

學術語、又各鐵道會社でつかつて居ります學術語は皆イギリス言葉であります。又日本の陸軍はもとその模範をオランダに取つたのでありましたからして、以前陸軍に於て用ひました學術語はやはりオランダ言葉で、現に今日までも多少これが殘つて居ります、サーベル・ランドセルの如きはこれであります。その他何れの學術技藝産業に拘はらず、その歴史をしらべれば何れも皆この通であつた事がわかります。そこでこのアルプウィルトシァフトに於て用ひまするこの方の言葉をしらべて見まするに大凡次の如くであります。

このアルプウィルトシァフトでは背に荷なふ乳桶の事をブレンテ、乾酪をつくります時に用ひます、古い乾酪のかたまりをブルレ、又はブルデレン、又はブルガレンといひます、乾酪をとりました後に自然に殘つて居る乳を更に分つ爲に用ひる味の酸ぱいドロ〳〵の糟がありますが、これをエッチェルと云ひます、牛飼の寐床の事をフィグレルと申し、乳を汲む大柄杓をガッェン、又はゲーツイ、やはり乳を汲む普通の柄杓をゲヅセ、乳を入れる圓い桶をゴン、乾酪をケーゼ、乳入れをムッテン、乳の上清をシルペ、又はシルテ、乳のおどみをシオッテン、牛小屋の事をスタフェル、乾酪を乾かす臺をツルネルと申します。尚この方の言葉をしらべますれば、澤山にございませうが、これで充分わかります。以上申上げたる言葉の中に元來のドイツ語は唯の一つもございませぬ、上に述べたる言葉と類似の言葉を搜して見まするとと、或はラテンの言葉か、あるひはイタリアの言葉にこれに近いのを

發見します。そこでわかつて來るのはアラマン部落がスウィスの山間にはいつた時分にこゝに居住してこの牧畜業をやつて居たるのは、本來の土地の住民で、ローマ人がレーチと申して居りましたるケルト種族の部落があります、この部落のものから學んだに相違ないのでありまして、その後レーチは段々に東と南の方の山奥へ追ひ込められ移住致しまして、現にその子孫のものも今に生存して居ります。現在の處では、重にスウィスの殆んど東半分をなして居ると申しても宜しいほど大きい山の中の面積を占めて居るグラウビゥンデンの州に居ります。このものは今もロモンシと申してラテン語に甚近い言葉を話して居りまして、この言葉の地名をば、この州附近にも歴々發見致します。フランス人やイギリス人が、このグラウビゥンデンの州の事をグリソンと申しますのは、所謂ロモンシ言葉で、この地方をグリシァと申すのを訛つたのであります。

これと同じやうに、日本語の中にでも、言葉によつてその出所のわかるのが澤山あります。たとへばパン、ラシァ、ボーブラ、カッパ、カンテラなどはポルトガルの言葉ですから、あそこから學んだに違ひなし、杏子、銀杏、行燈、提灯などはシナから學び、オレーフ、レーフルトラン、ガラス、コップ、キロク、コヒー、ブリキなどはオランダより學んだことは證明するまでもないことであります。

第二　古文書學

古文書學は文字の通り古文書を科學的に研究する學問でありまして、卽ち古文書の科學であります。古文書の定義をいかやうに定めるかといふ事に就ては、ヨーロッパにおきましても日本におきましても人によつて意見が違ひます。しかしヨーロッパにおきましては通常定義として採用する所は裁判所へ提出して證據物として採用になる性質の書類をいふと申すのが普通に行はれて居ります、我等一個の考では此の如き定義は本邦の古文書學に對しては少し狹過ぎるかと考へる。いづれにしても古文書はその物の性質として、處と時とによつて違ひのあるものであるから、ヨーロッパの古文書學に於て古文書にいかなる定義を下すにしても、我等は本邦の古文書學に對しては本邦の定義を下す權利は充分に持つて居ります。ヨーロッパの古文書學がかゝる定義を採用したのは、畢竟ヨーロッパに古文書學が起りました所の事情に基くのであります。

古文書學は史學の右の腕であるといはれて居る事でありますが、それは今日の考でヨーロッパでも昔は一向さう思ひませなんだ事であります。もつとも何か訴があるときに書類を裁判所に提出すれば、裁判所でそれを鑑定したことはありましたが、鑑定は甚だ漠としたもので、これは誰が書いたものであるから間違がないとか、又誰が書いたかは分らないが、體裁が整つて居るからなどゝ當て

ずっぽうで鑑定をしたのでありまする。然る所が、十七世紀以來フランスにおきましてもドイツにおきましても、古文書類を證據として古書記錄の誤を正すといふことが段々に行はれ來りまして、已に十八世紀の初まりにはベルラ・ヂプロマチカ、卽ち古文書の戰といふことでありますが、かやうな言葉さへも行はれ初めて來ましたので、お互に古文書を提出して之を證據物として法廷において爭ふといふ風が起つて參つて、たゞに裁判所に提出するのみならず、當時の名ある學者に書類をば委托して、その眞僞の鑑定をして貰つて、これを世に公にする習慣が出來て來ました。かやうの手續で、學者が本來寶藏に藏してあるべき古文書を閲覽する便宜を得はじめました。しかしかゝる古文書の戰はさう度々いつでもあるべき筈はなく、大概はある重大な所領爭ひ、又は權利の爭などに限つてやることでありますからして、學者が研究を積む機會もさうなかつたのであります、又學者の方から見ましても、その難義をした事は、なるほど一箇所の古文書を、問題に上つた爲に閲覽することは出來る、それは結構でありますが、同時代の古文書を比較することが出來ませぬから、唯たのまれてこれをしらべてくれよと持ち出されたものゝみを見るばかりでありますから、何分共に思ふ通り正確にやることが出來ませぬ故、名ある學者が往々間違つた批判をやつたことがあります、それは少しも怪むに足りませぬ。

ともかくもこれが古文書を研究する導火線となりまして、これから古文書學が起つて來たのであ

ります。その初まりはフランスの學者とドイツの學者との間にパリの近邊にあるセン、ドニの寺の古文書に就て爭が起りまして、ドイツの方の人は非常の酷評を下して、その大多數は僞物であると罵りましたのを、フランスの方のこの寺の宗派の學林におきましては、是非とも答辯をしなければならぬと考へまして、大に研究に着手致しましたのであります。このセン、ドニ寺の屬して居ます宗派は、ベネヂクト派と申すものでありまして、この寺に於て兼々この派の高僧傳の編纂をして居たのでありますが、何樣ドイツ方面の學者からして寺の古文書類が大半似せ物であるといはれて見れば、先以て答辯もせんければならず、又高僧傳の材料とするにも頗る考へんければならぬから、必死になつて寺の古文書の研究にかゝつたのであります。

この際編輯の主任をして居ましたのは、後世古文書學の學祖として有名なるところのドム・ヂァン・マビョン（一六三二——一七〇七）であります。この人はもとセン、ドニ寺に居りましたが、後パリの町のセン・ゼルメン・デ・プレーの學林に招かれまして、一千六百六十七年以來、高僧傳編纂の主任者となつたのであります。幸當時政府におきましてはかの有名なる大宰相のコルベールが全盛の時でありまして、百般の政務を擴張して、又非常に學術を奬勵して居ました時でありますから、間接にマビョンの事業の爲にも政府の力を貸してくれました、卽ちコルベールは命を全國の古文書所藏家古い大寺などに下して、その古文書を示させて、マビョン等の研究の資料に供せしめたのであります。マビョンは又多くの門人や朋友を持つて居りまするで、その人々がドイツやイタリアに於てからに發見したる古文書がありますれば、その報告をしてくれることに致しあるひは門人を出張させて搜らしめたり、いろ〳〵の苦心をして澤山な古文書類を比較研究したのであります。かくの如くにして一千六百八十一年にかの有名なる古文書學の書物六卷を公にして大宰相コルベールに捧げたのであります。丁度千六百六十七年から仕事にかゝつたものと見ますと足かけ十五年の拮据經營といはねばなりませぬ。

この古文書學書は尨大なる大册でありまして、全部ラテン文で書いてありまして、古文書の標本が澤山に挿んであります。ラテン語の表題ではデ・レ・ヂプロマチカと申すので、卽ち勅書のことに就てといふ意味でありまするが、マビョンのしらべた古文書類の大部分を占めて居て、且は又最も重大であつたものは勅書類でありましたから、遂にこの名稱をつけたのでありまするが、幾許もなくこの勅書と申すラテン語ヂプロマの意味を押しひろげて古文書一般のことと假定しまして、古文書學のことをヂプロマチクと云ひはじめたことであります。ヂプロマチクと申すのはフランス語でありますが、ドイツ人もこの語を採用致しまして、やはり同斷に稱へて居りまするし、イギリス人は少し語尾を變へまして、ヂプロマチクスと申して居ります。

かくの如くにして出來た古文書學は、範圍の頗る廣大なものでありまして、一人の力で以て全部

を網羅して研究しやうとする事は、甚だ難義の事なのであります。マビヨンの書いた古文書學書は、申す迄もなくフランスの古文書を主として基礎にとりましてつくつたものでありますから、フランスの古文書の研究に最も適當して居る研究の仕方である事は云ふまでもありませぬが、これと同時に採用してある文書の通數が甚だ多くて種類も亦尠いといふわけでありませぬ、でありますから、して、いづくの國の古文書に對しても適用が出來る研究方法が自然に現はれて居りまする。この次第によつてマビヨンを古文書學の學祖と申すことなんであります。さうして見ると古文書學は高僧傳を編纂する時に申さば偶然出來た副産物であります。

マビヨンの創め、その門弟子等が繼で大成したる所の古文書學は、その範圍が非常に宏大であることは前に申したが、それを今一度くわしく申しませう。古文書と申せば、何か紙類に墨を以て文章の姿のものを書いたものなんであります。紙類は國々によつて又時代によつて頗るかはるものであります、又同時代におきましても幾通りも紙があります、墨も國々により處によつて墨の性質が違ひ、又文字も時代により、國々により、地方により、家により、人により、皆それ〴〵違ふものであります。文章も左樣で、文字と同樣、時代により、國々により、地方により、家により、人によりて皆違ふ。又書類の性質によつてからに、文例がかはつて來ます。さうして見ると紙やら墨やらの研究からして初めて、次では書體書風筆意の研究をせねばならず、書體と申してもいろ〴〵樣々で、申さば世界に於て用ひまするあらゆる文字の書體をしらべねばならぬことになる、それも各時代各國にわたつて一々精査せねばならぬことになる。文例文格も時代の相違國々の相違、家の相違を一々しらべねばなりませぬ、又書類を差出す手續なども、時代により、國々によりそれ〴〵違つてゆきますから、各時代各國各地方各家々に通じて皆夫々に精査せんければならぬことになる、又古文書には日附といふことが必らずいるが、ヨーロッパでは中々やかましいことになつて居ります、これを本統にしらべるには年代學からしらべなければなりませぬ、又印は重大な關係のあるものでありますが、これをしらべるには、各時代各地方各家々に於ける印材から文字からその他の形象、印影の形式などを一々にしらべんければなりませぬ。かく考へて見ますると、一人の力では到底出來きれるものではないと申したが無理でないことはわかりませう。

マビヨン等が初めたのは、何樣フランスに傳來して居る古文書を基礎としたのでありますから、年代はヨーロッパの中世であります、又用ひてある所の紙も中世に用ひた紙に限り、墨も中世に用ひた墨に限り、書體書風文例文格なども中世のものに限ることでありました。さうでありまするから して、いかにも難義は難義でありましたらうが、とにかく十幾年の辛苦を積んだ甲斐には、一通りは出來たのであります。マビヨンの書の體裁を見まするに、マビヨンは書風の研究に非常に重きを置きまして、所謂各時代の書風があるといふことを始めて發見しましたのであります。それ以前に

はヨーロッパ人も知らなかつたのであります。又古文書の種類によつて形式に差別あることも初めて發見しました、印章の古文書學に貴重なることはいふまでもなく從來より裁判所でやかましく云つて居たのでありますが、その印章の捺しかたにもいろ〳〵慣例のあることをマビョンが發見致しました。そこで自然と古文書學は之をマビョン等が用ひたる意味におきましては左の如きものになるのであります。

古文書學を割いて二つに致します、卽ち次の二部にわけます。

第一部は古書學でありまして、この古書學を更に細別して二つとすることが出來ます。

甲、古文書の書學。

乙、金石文の書學(所謂金石學といふもの)。

第二部は印章學であります、花押とか、印章とかの研究であります。

我等は此の如く致すのを、ひろい意味に於ける古文書學と思うて居ます。狹い意味にとりますれば、古文書學は古文書そのものだけの研究でありまして、主として古文書類の形式を專門として取調べるといふことになります。ヨーロッパの近頃の有名なる古文書學家は、その多くはこの狹い意味に於ける古文書學を研究して居る人であります。いづれにしましても、いかに範圍を狹くしやうと力めて致しました所で、古文書の形式を主として研究するといより縮めることは出來ませぬから、

これだけにすると致しても、これだけにしても範圍は中々ひろい。形式と申しても古文書はいづれ書類でありますから、紙の研究は是非しなければならぬ、いづれ古びた紙でありますから鳥渡見わけがつきにくい、古びては居る、時代は違ふ、紙の種類も違ふ、その邊のことも調べなければなりませぬが、これは顯微鏡問題で、顯微鏡を備附けて紙の纖維からしらべなければなりませぬ。次は墨の研究であるが、これには化學の素養があつて、自ら墨をつくり、又は墨色は何故に消えるかなどゝいふその邊の理由をも明にしなければならぬ、必らずこれは化學の力を要するのであります。又古くなつてからに、保存がわるくて甚しく垢が附いたり、甚しく濡れました樣のものであれば、往々にして字がぼやけて居ます、かやうなる古文書は本品を見るよりは、むしろ寫眞にとつて後讀んだ方が讀み易い、さうして見ると寫眞術も心得んければなりませぬ。又いづれ書いてあるのでありますから、古書のことが明かでなければならぬ、書風は時代によつてかはり、又いろ〳〵の書體が同時に行はれることもあり、又面々によつて筆意が違ひ、又同一の人でもからだの工合で往々にして筆意がかはらぬとは保證が出來ぬ、この邊のことをしらべやうには、多くのいろ〳〵樣々の古文書を驅り集めて比較研究して、いつの時代におきましても、同時代におきましても、その人の地位によつて書風が違ふとか筆意が違ふとかいふこともしらべんければなりませぬ、さうして見ますると、あらゆる雜多の古文書の本品を集めた所がなくてはならぬ、一個人の力では到底同一の所にさ

う數多の本品を集めることは出來ませぬから、古文書館の必要が起つて來ます。古文書館にはあらゆる古文書を陳列して時代別又は處別にもしてありませう、こゝで學者が注意して、どの點で時代時代の筆意が違ふか、どの點で面々筆意が違ふか、又紙墨等も、どの點で違ふかといふことが始めてわかるのであります。一ケ月前に甲の古文書を見て、今月今日乙の古文書を見ても到底引きくらべは出來ませぬ、なるほどちがふと思ふこともありませうが、つき合はせて對照するほどには、いかなる眼力たしかな、記憶のよい人でも出來ませぬ、つまり完全なる古文書館といふものがなくては古文書學は出來ぬことになります。

又印章のこともさうで、ヨーロッパにおきましては、印章を捺すに、あるひは黃金板又は鉛のかたまり、又は各種の色の封蠟などに捺しますが、この品物のこしらへかたを知らなければなりませぬ。疑はしい時には分析する方法も知らなければならぬ。又印材もいろ〳〵ありますが、水晶もあれば瑪瑙もあり、大理石もあり、金屬類もあらう、その印材のいかなるものかをも心得、又水晶瑪瑙などへ非常に精密な印がほつてあるが、どうしてそれをほつたかもしらべねばならぬ筈であります、疑はしい時は一の時代に於て非常に堅い水晶や裂けやすい瑪瑙に、この程度の細密なほりかたが出來たかどうかといふ鑑査をする必要があります。それだから皇帝がたの御璽に恐れ入つた精巧の印章があるのに驚き入つて居ると、思ひもよらぬローマ時代から殘つて居る古代の印を用ひて居られ

たのであるといふ樣な事實が擧つて來ます。印章の學問といへば、わけもないことの樣であるが、この邊から考へて見ますれば、中々以て容易ならぬ學と相成つて來ます。やはり博物館の必要が起つて來ます、充分にあらゆる印の種類を備へ附けて置いてくれる博物館がなくては、印章の研究が出來ませぬ。

又古文書を出すには、各種類の古文書の文例文格を知らねばならぬ、書き方を知らねばならぬが、それに就てその時代の制度を知らねばならぬ、さうすると國々家々卽ち古文書を出すところに行はれて居る制度を知らねばならぬ、して見ると極めて精密な制度史を知らねばならぬことになります。

いづくの古文書學におきましても、研究にはかやうな困難があるのであります、机の上で、古文書を楷書に寫して普通の紙に印刷したものを讀んで、古文書學は出來るなどゝ思ふは不心得千萬の話であります。

古文書學の定義と古文書學の研究の仕方とに就ては、一通りこれで申したつもりでありますが、何樣非常にひろい學科でありますからして、確として一應心得て居べき事柄が澤山こもつて居るので、尙少し、くわしく古文書學の一部に就てお話をしなければなりませぬ。もつとも古文書學そのものゝ講義をこゝで致すのではありませぬから、詳細なことは申しませぬ、又各部分に亘つては簡單なことさへも申すつもりではありませぬ。例へばヨーロッパの古文書にも本邦の古文書の如く種

類はいろ〳〵ありますけれど、それをこゝに説明しやうなどゝは企てませぬ、畢竟ずるに、こゝでヨーロッパの古文書學を説明しやうと試みても功がありますまい、しかし簡單に一通りだけでも述べて置いた方が便利と思ふことがありますから、それだけを述べませう。

甲、古文書の材料。

ヨーロッパの古文書は、やはり本邦の古文書の如くに種々の材料に書いてあります。例へば蠟を厚くひいたる木板、銅板、石の板、種々の紙類などが用ひてあります。已に申す如くに金屬の板又は石の板などに彫り附けてあるものゝ中には、編纂物の性質のものもあります、けれども又古文書として取扱ふべき性質のものもあります、シナではその種類の如何を問はず、金屬の板やら又は石に彫り附けてあるものは皆これを金石學の研究の題目とする慣例になつて居りますが、本來金石學として古文書學より離して取り扱ふことは無理なわけで、我等の考案では、所謂金石學を二分して、一は古文書、一は尋常の書籍と同じ取扱にしいと思つて居るのであります。とにかくこの種類の板に彫り附けましたもので、古文書の性質を持つて居るものはどちらかといふと少いもので、多數は編纂物の性質を持つて居るものと思はれます、もつともこれは國々によつて違ふ話であります。シナなどにおきましては、私が申す通であらうと思ひます。ヨーロッパにおきましては、何樣古のローマなどにおきましては、銅板に重大の法令を

後世に傳へるために彫り附けた慣例がありますが、普通の古文書類は多くは種々の紙に書いたものでありまして、極く尋常の書翰類尋常の證書類などは先に申したる厚く蠟をひきました木の板に書いたものでありました。年代が段々後に下るに從ひまして、かういふ例はすたりまして、種々の紙類を用ふることになりました。ヨーロッパの中世では、古文書と申せば勿論皆何か紙に書いてあります、で、次に紙といふことに就て一通りのお話を致します。

ヨーロッパにおきまして最も古く行はれたる紙のたぐひは、所謂パピルス卽ちかやつり紙といふ紙であります。かやつり紙といふのは、かみかやつりと申して、古へ下エジプトにおきまして盛に栽培致しました莎草の一種から製造致したものであります。上エジプト下エジプトには今はこのかみかやつりの草は傳はりませぬが、ヌビア地方のニール河中流の處には、今も野生して居る趣に承はります。この草は本邦にも已に傳はつて居りまして、理科大學の植物園にはその標本が備へつけてありますから、いつでも誰にでも見られるものであります。この草から紙をつくりますには、まづ草の莖を一定の寸法に切りまして、それを一定の厚さに縦に裂きます、申さば蘭、燈心を製造するあの蘭のやうに、中に白い髓のある草でありまして、草の眞中にあたる所は髓のひろさが最もひろいから最もよく紙をつくる材料になります。かやうに薄く切りましたる斷片を二枚あるひは稀に三枚重ねまして、更にかくの如く重ねましたものを縦横

十文字にならべます、即ち一定の幅に相接してならべまして、更にその上に直角に又同じ様に他の重ねた斷片をならべます。而してニールの河水は水の中に粘氣を持つた成分がありますから、その水を用ひまして、その水をこれにかけまして押します。押して乾きたるものを槌で打ち平しまして、これを日に干かしまして、干し上けまして、あとでつやをつけます。かやうに致しましたる紙は眞白な色で、極めて細かい纖維が縱横について居まする、申さばリンネンのきれを見るやうな鹽梅に見えるのでありまするで、非常な上品な結構な紙が出來るのであります。

ローマの古へより十一世紀に至りまするまで、ヨーロッパにおきまして專ら用ひました所の古文書用の紙は皆これでありまする。ローマの時代におきましては、エジプトにおきまして政府の紙すき場に於てすきましたもので、アラビア人がこの國を占領しまして後は、やはり先例によりまして、政府において紙すき業をやつて居ました、政府の專賣であつたのです。ローマの昔から致しまして頗る高價のものでありまして、アラビア人の時代におきましてもやはりお安くはなかつたので、とても世間一般の雜用に悉く用ひらるゝ程の普通品では曾てあつたことはございませぬ。ローマ時代におきまして、最も精製の紙となつて居ましたのが、幅二十九サンチメートル半ありまして、アラビア人の時代におきましては、通常幅六十サンチメートルに

まで上つて居ります、アラビア人が最も盛にエジプトに於てパピルス紙をつくつたのは八世紀九世紀でありまするが、この頃のパピルス紙は、今申す幅六十サンチメートル、長さは通常十四メートル半の卷物でありました、この卷紙を紙一本と致しまして、大凡我が一圓三十錢に發賣致して居りました、すなはち同寸法の美濃紙の卷物に比へて四倍貴うございます。唯今ヨーロッパ諸國の言葉に、普通の紙をパピル、パプル、パピエルなど申しまするのは、即ちパピルスを訛りましたのであります。

かやつり紙に次ぎまして行はれましたのが、革紙であります、革紙の發明は何人であるかといふことは我等存じませぬが、何樣太古の時代より中アジアの地方におきまして用ひられて居たものと見えます、その邊のことは史記の大宛傳を見ても直ぐわかります。この革紙がヨーロッパにはいりましたに就きましては、ローマの昔からかういふお話が傳はつて居るのであります。

エジプトのプトレマイオス朝の時代に、小アジアのペルガモンはエジプトと競爭の位置に立つて居りましたが、傳へて申す處では、ペルガモン王エウメネス二世の時にペルガモンに盛なる圖書館を起さうと思ひましたので、エジプトのプトレマイオス朝は之を妬みまして、書籍をうつす原料たるかやつり紙の輸出を禁制致しました。ペルガモンにおきましては、致し方がありませぬから、新たに革より紙に代ふる材料を製造致しまする工夫を致しまして、寫本の

用に辨じたと申すことなんです。しかしこれは疑もなく根據のない雜說でありまして、我等の信ずる所では、革紙は必らず中アジアの地方、當時のバルチアすなはち、安息國あたりから漸々に小アジア邊へ傳來しまして、何樣小アジアのペルガモンに於て大に改良してバルチアあたりで用ひて居るよりは遙かに上等な品を製造したかも測られませぬ。とにかくヨーロッパに革紙のはいつたは、ペルガモンの取次であるとは見てよろしからうと存じまする。さればこそこの類の紙をローマの古代からペルガモン紙と申す慣例になつて居ります。この紙を今ドイツの言葉にペルガメントと申す、ペルガメントと申すは最も原語に近いので、フランス語でパルシュメンと申すは之に次ぎ、イギリス語でパーチメントといひますのは最も訛つて居りまする。この革紙（本邦に於ては、やゝともすれば之を羊皮紙とか申す人がありまするが、これはさんだ間違ひで決して使ふべき言葉ではありませぬ。その故は後で申すことによつておわかりになりませう。）を造りまするには大凡左の法によります。

革紙の原料たる皮は、すべて薄き皮でさへあれば宜しいので、いかなる動物と申すことには限りませぬ、犬でも猫でもよろしい、豚でも鹿でもよろしい、しかし犬とか猫とかいふやうなる、申さば玩弄動物は、その頭數が尠うございまして、多分の紙を製造致しますには、到底原料として用を辯じませぬ。それですから通常用ひますのは、羊、山羊、小牛などの皮でありまず。畢竟羊はヨーロッパにおきまして澤山に飼つて居りまする家畜でありますから、皮の數も勿論何萬でもありまする、紙製造の原料として最も便利でありますから、羊を原料としたので、山羊は之に次ぎ、小牛は更に山羊の皮に次ぎませう。いづれの皮に致せ、まづ毛皮のありのまゝの皮を三日間石灰水に漬けます、さうすると毛がゆるみます、そこで剃刀を以てこの毛をそりまして、皮にしんしを張りまして乾かします。後世におきましては、乾きましたる皮に石を以てつやをつけまして、文章をかきまする方面卽ち肉附の方に粘土を塗ります、それから、もつとも地方によりましては表と裏の差別のないところもあります、例へばヨーロッパの南方の國々では毛のつきました方の側を裏と心得肉の附いた側を表と致します、それで裏の方はやゝザラ〳〵の姿で棄て置きますが、表の方には特に注意致します、之に反してドイツあたりでは、表も裏も同樣に注意して粘土をつけます。革紙の大きさは、要するに動物の大きさ次第でありまして、さう非常に大きな革紙はもと〳〵ありうべき筈はありませぬ。古文書に用ひまする革紙は、それゆゑに古文書に必要なる大きさに切りますので、大小もとより不同の次第であります。

革紙をヨーロッパに於て古文書用に用ひはじめましたのは重に五世紀以後のことで、つまりかやつり紙が段々拂底になりました時代より初まる事なので、かやつり紙の拂底と申すのは、アラビア人が六百三十四年にエジプトを取りまして、それより後は、エジプトと東ローマ又はイ

タリアトの紙の取引はありましたが、アルプ山以北の國々との取引は止みましたですから（敵國で互に軍をしてますから、）是非かやつり紙がいるならばコンスタンチノプル邊なり、又はベネチア邊なりから間接に買入れるより致し方がないので、さすれば無論代價が張る、そこで自然品拂底となる、差問へて來る、何か代りになる品を求めんならんといふ次第になるので、例へばフランスあたりでは、八世紀以後は、古文書は皆革紙にかいてあります。この革紙は今日の普通の紙の行はるゝやうになりましてから、段々に需要を減じましたが、しかし何樣極めて結構な紙でありますから、今日でも全くすたれたと申す次第ではありませぬ、例へば製本などの際に、極めて鄭重にしやうとするには、表紙には革紙を用ひさせます、又あるひはある特別の文書などに特に革紙を用ひることがないではない、唯多く用ひられぬといふは、何分なみの紙に比しては非常に價格が張るので、鳥渡たやすくは使ひきれぬからであります。

革紙の特質と致しましては、第一にその非常に堅靭なること、即ち人間の指の力ぐらゐではいかに裂かうとしても裂けませんです。第二は一度墨を以て革紙に書きます時は、いかやうに致してもその墨を拔きとることは出來ませぬ、例へば革紙にかいた一の反古があります、それを惜しみまして、かいてあるもはつまらぬと思ひまして、小刀で削れば、一通りは消えますが透かせばやはり文字の影がおぼろげにあらはれて居ります、況んや水に漬ければ鼠色にあら

はれまする、又藥品を用ひて、この皮の纖維に染み込んで居る墨分（すみぶん）を濃くする方法を取れば、文字はもとの通りにあらはれて來ます、即ちいかに骨を折つて削りましても、到底磨滅しつくすといふことが出來ないのが第二の特色なのであります。第三には蟲のつきにくいことであります、故に保存によろしいから、永久保存する必要ある大切な書類をうつすには最も適當なのであります。

革紙に次ぎまして行はれだしましたのは通常の紙なので、現に今日までも連綿としてつゞいて居ることでありますが、この紙は本來はシナから來て居るので、今日の處で申すならば、紙の元祖はシナであると申さなければならぬ次第になつて居ます、シナ人は古く竹簡とか申して竹に彫（ほ）つたか書いたかしたものといふことでありますが、原品が存して居るかどうか存じませぬから、この邊は保證が出來ませぬ。確に使ひましたのは簡と申した木製の版でありまして、記錄に詳しく載せてあるばかりでなく。其附屬の封泥は夥しく出土しましたし又敦煌邊よりは原品たる簡の前漢時代の物さへ、今は發見せられてをりまするで、何等の疑をも容るゝ餘地はありませぬ。次に用ひましたるは絹らしい、今も文人や畫工は絹を用ひて居る次第であります。然るところが、後漢の和帝の代以來、眞正の紙が發明されて、いろいろ樣々の原料を用ひ來り居りますることで、例へば麻ぼろ、麻の糸屑、藤のあま皮、竹のあま皮とか、楮のあま皮とか

藁とかいろ〳〵のものを用ひて居りまするが、この中で最も古いのは麻ぼろでありまする。後漢の蔡倫が初めて古網その他の麻ぼろを原料としまして紙をすくことを發明致しまして、遂に所謂麻紙と申すものが出來て參つた。日本へも唐の時代に盛に輸入されまして、所謂白麻黄麻など申して、本邦の古い古文書には屢見る所なんであります。蔡倫は宦官でありましたが、まことに珍らしい人で、いろ〳〵辛苦して種々の發明をしたらしい、委しいことは後漢書の列傳を御覽下されたい。かくの如くして麻紙がシナに出來はじめて、世人一般皆この麻紙を使ひはじめたので、忽ちにして紙といへば麻紙のことになつたと思はれます。唐の時代には他の紙も用ひられましたが、やはり最も普通に用ひられたは麻紙と見えて、この麻紙の職人をアラビア人が生捕にして、それよりして紙の製法を傳來致したのであります。それは唐の天寶十載以後のことで、年ははつきりとは分りませぬが、十載の後幾千でもありますまい、中アジアのサマルカンドへつれて參つて紙をすかせたのであります。このサマルカンドであるか、あるひはホラサン地方の中であるか、その邊は詳でないが、とにかくアラビア人が麻の代りにリンネンを使ひはじめました。元來ペルシア灣のまはりの地方には、世界第一のリンネンが出來ましたので、この類の上布を以て鳴つて居るのであります。それで自然リンネンぼろが多かつた筈でありますから、これを使つた方が、むしろ麻よりよい筈といふことは氣が附いたらうし、又試驗

して見れば、すぐわかる筈、そこで紙すき業を興して、專らリンネンを原料として七百九十四年より翌年に跨がれる年（アラビア曆を普通大陽曆に直すと、アラビア曆の一年が、二年に跨がるのである）に、バグダードの都に最初の紙すき場を起したので、百年ほど經つうちに、サラセン帝國全體に廣がつてしまつた。隨つて至る處に紙すき場があるのでしたが、最も有名なるものはシリアのダマスクに於てすきました紙で、又たしかには分りませぬが、やはりシリアの中で、今マンビジと申す、アレッポの町より三日程隔たりましたる所に於てつくりました紙も名があつた樣に思はれます。いづれにしても、シリア產の麻紙が著名であつたのであります。

かくの如く麻紙はサラセン人固有の紙であるかの如き姿になつて居りましたによつて、自然サラセン人の土着して居る處に於て、この紙が行はれて居たので、ヨーロッパ方面でサラセン人の土着して居た處と申すならばイタリアのシチリア島であります。この島をサラセン人が占領致して居りましたによつて、自然麻紙がはいつて來て居たから、サラセン人が追ひ出されてノルマンがはいつて來た頃におきましても、やはり必要品であるから、麻紙が用ひられて居ります。現存して居ります古文書の中で、麻紙にかきました最も古いのは千二百二十八年のと千二百三十年のとでありまして、その他にも澤山あつたのでありませう、が今は亡びて傳はりませぬ。

久しい間ヨーロッパの學者の説に、麻紙卽ち普通の紙は、昔よりして木綿ぼろで造つたものであるといふ説でございましたが、近年の實物調査の結果によりまして、この説は間違つて居るので、サラセン人は曾て木綿ぼろを使つたことはない、必らずリンネンぼろか麻ぼろであつたといふ證據が擧つて居りまする。リンネンか麻ぼろか、どちらであるかといふことは何分紙のことで纖維も充分にわからぬから保證が出來ませぬが紙の歷史からいへば、リンネンぼろでなかつたかと思はれます。いづれにしても木綿ぼろではなかつた、これは顯微鏡でしらべれば直ぐわかることなんでございます。

又シナの麻紙の如くに、サラセン人は糊を以て紙のつやをつけましたもので、このことも顯微鏡の下で照して見ますれば澱粉の玉がよく見えるのでわかります。千三百年頃より後、始めて動物性の膠を用ひはじめたのでありまして、卽ちヨーロッパ人の改良であると認めんければなりませぬ。又餌飩粉をまぜまして紙の色を白く致しますことも出來て參りましたが、勿論これもヨーロッパ人の改良であります。

かくの如くにして行はれ始めました麻紙は、至極結構な紙で、可なり堅靱でもありますし、ものを書くにも書きよいのであります。けれども何樣革紙に比べて見れば數等落ちるです、堅靱の度合から見ても、蟲のつく難易から見ても、又もち方の長短から見ましても、何れにして

も麻紙は革紙に及ばざること遠いのであります。畢竟この爲めでもございませう、ヨーロッパでは兎も角も麻紙を嫌ひまして、文書といへば革紙をつかふ例でありました。それでありますから、麻紙を使ひますにした所が、書翰類やら帳簿の樣なものやら、書籍類やら、覺書の類の樣なものやらに使ひましたものと見え、殊に書翰類に多く使つたものと見えます。一口にいへば、その日限りのどうでもよいものは麻紙にかき、後世に永く傳はるを要するものは革紙に書いたと見えまする。十三世紀の下半期の頃一私人の古文書には、往々麻紙を用ひたものが見えます。現に書籍に致しましても、十五世紀以前の寫本といひますれば、多く革紙である樣に思はれます。革紙に印刷した事があるかどうか私は存じませぬが、印刷物になつて居る古本は通常麻紙に印刷してあります。

ヨーロッパの方面では申上げる通りの次第でありまするが、東洋におきましては、不思議にもこの革紙を使つた例がないので、何樣中アジアでは太古より用ひ來つたに相違ないが、シナには傳はらぬ、あるひは嫌ひかも知れぬが使つたことがない、日本人は想像にも及ばぬことで、インド人も同樣らしい。東洋で用ひたのは何れも植物纖維で先に申した麻ぼろとか、藤のあま皮とか、竹のあま皮とか、その他木のあま皮であります。この中で有名なのは、シナでは、麻紙、穀紙、藤紙、竹紙なのでありませう、インドで使つて居るのは所謂貝多羅葉ふこさであり

まして、タールといふ棕櫚類の葉からこしらへたものであります。このタールにシナ人は古く撻の字を音譯字として宛てゝ居ます、この木はインドに澤山ありまして、又非常なる實用の木であります、その葉は恰かも扇を廣げた樣な姿をして居ますから、イギリス人は、これをフェンバルム卽ち扇棕櫚といひます、棕櫚中で最も著名な種類でありますから、インドでは單にバルムといへばこの木であります。このバルムの葉を蒸して後に蔭干にして、あとからつやをつけます、かくの如くして出來ましたるものが、貝多羅であります。バルマあたりでは撻樹のかはりに檳榔の葉をつかふと聞きます。朝鮮や本邦では、昔より自國產のかうぞ（穀、楮）のあま皮をつかふといふ普通の例になつて居りますが、本邦では此外に麻ぼろやがんぴ（斐）やまゆみ（檀）やらのあま皮を使ひました。紙のことはこれだけにとめて置いて、次に筆の御話を致しませう。

ギリシア人の古く使つて居ました筆はよしであります。よしを斜に切りまして、用ひて居たものであります。ローマに至りまして、始めて羽根を用ひ始めましたやうです、何でも大きい鳥の羽根であれば宜しい、斜に切つて先を少し割いて置けば直ぐ使へるので、近くは御一新前の日本のオランダ學者の先生方が鳥屋あたりへはいつて鷄やあひるの羽根を買つて來て使はれたと聞いて居ります、これなども羽根をつかつた例であります。かやうに筆として專ら羽根を

4662

用ひましたによつて、遂に筆のことを羽根と申すやうになつたらしい。ラテン語で羽根のことをペンナと申すので、今も筆をペンナといふ國もありますし、ペンなど云ひまするのは勿論このペンナの訛であります。

しかしローマ人は日用の書翰やら、選擧の投票やら、つまらぬ書類なんどは、タベルラと申した蠟びきの小板にかく例でありましたから、金屬製の筆を用ひて居ます。通常靑銅でありますが、人々の好みによつて長短があります、申さば先の尖つた中ぶとの火箸の樣なもので、一方の端が平たくなつて、丸くなつたり、あるひは銀杏の葉の樣な形につくつてあります。その使方は、尖つた方で、小板に厚く敷きました蠟をゴリゴリ引搔くので、もし書き損ねたら、そこを平たい所で摩つて、もう一度そこを引搔かうといふのです。ローマの若手連は往々この筆を防禦用に使つたものと見えまして、殊に長い鐵製の筆を用意して居たかと思はれます。かやうな鐵製の筆、錐の如く先の尖つたものを握つて突きあひでもしたら、危ないことであります。かのユリウス、ケーザルが假議事堂に於て暗殺された時、しばらくの間持合の筆を以て防禦されたといふ話も傳はり居ることであります。ローマ以後には諸國におきましても、いづれも羽根の制を採つて居ります。金屬製の、柄にはめる樣に出來ました小さき先はローマにも類品はなかつたのではありませぬが、久しく斷えて居りまして極く近頃再び發明したかと思は

れます、ヨーロッパでは毛筆は古來使つたことはございませぬ、毛筆は畫工が使つたのみであります。

次に墨のことを一言申しませう。古代の墨は今日の墨汁とは違ひます。煤をかねて取つて置きまして、入用の時分に皿の中へ水を入れまして、護謨を少々とき込んで、それに煤を加へて書きましたもので、畫工が繪具をとくやうに臨時づくりの代物であります。もつともローマの古器中に墨壺がありますから、かね〳〵墨汁をつくつて蓄へ置いた人もありませうが、元來その時限りにつくる性質のものであります。然るところ年代が下りまして、九世紀、十世紀あたりになりまして、今の墨汁が段々行はれ始めました。まづ十世紀以後は、今の墨汁を一般に用ひたと見て宜しからう。が、もとこれは革屋が革を黑く染めんが爲めに用ひた染料で、人が書く爲めに用ひたものではなかつたのが、どういふわけか、これが世人の氣にいつて用ひ來りましたが、品質よりいへば、煤汁に及ばぬこと遠く、百年もたてば鐵が酸化して消えてしまふ、又蓚酸を以て洗へば洗ひ落されます。煤汁ならば之に反して、インド、シナ、又は本邦の墨と全く同質のもので、シナや本邦などの墨は、煤が固めてあつて、入用の時は摩り下ろすといふことになつて居り、ローマあたりでは、面々に自分がとくといふ違ひがあるのみであります。煤は無論粉末の炭素でありますから、火の中へ入れゝば直ぐ燃えてなくなりますが、さなくばいかなることがあつても、なくなりませぬ。況んや洗ひ落さうなどは容易ならぬことであります。隨つて書類を永遠に保存しやうとする目的には、現今の墨汁はまことに目的にかなはぬ因つた代物といはんければなりませぬ。それで今日でも畫工とか製圖家とかはインド墨と稱へてシナや本邦から墨を買つていつて用ひて居ることであります。

乙、古文書の印章。

次に印章のことに就いて少しお話を致します。印章はヨーロッパにおきましてもギリシア時代よりして既に盛に用ひて居りまするもので、帝王がたの文書は申すに及ばず、一私人の書類におきましても、專ら使用致したもので、本來の目的を申すならば、文書の封を確實にする爲めに用ひたものでありまする。文書そのものを確實にする爲めに用ひたのではありませぬ、文書を封じた時にその封の確實ならぬを補はん爲めに用ひたのであります。もつとも後世になつて、文書を確實にせん爲めに用ひたのは勿論であります。そこで古代ローマ人の現存の文書を見まするに、文書の表には決して用ひてないので、二三枚より成り立つ木版、又はかやつり紙の卷物を、ひもを以てくゝりまして、その文書は二三枚が一卷に亘つて居るものであると知らせる爲めにするのであるが、そのひもの封じ目に捺すのであるから、封をほどさなければ、板の重ねてあるのをほどすことは出來ず、隨つて印章をこはさなければ文書を內見することは出

來ぬ次第であります。卷物に於ても勿論同樣であります。

かやうなる印は、指環形に出來て居るものでありまして、必らずしも指環として面々が指に帶びて居たものには限りませぬが、もとは指環へ印章を彫り附けたものと見えます、印章を大きく致さうには彫る面を廣くせんければならぬ、故に指環を大きくせねばならぬことになつて指環が大きければ、隨つて指へはめられぬ次第と相成ります。故に極く古い印影は、極く細い指環に、平らな所があつて、そこに彫つてあるので、次第にその面が廣く大きくなつて參るに隨つて、それを持たせる爲めには、環も段々大きくならねばならぬといふことになります。又中には環の形をしないで、衡門形の樣になつて居るのもございまする、卽ち一方が印を彫る所の板でありますれば、出張つた鼻の如きものの方は、卽ち所謂鈕のもとゝなるのであります。ギリシアの言葉で、印章のことをスフラギスと申しまするが、同時に指環の義もございまする。

かくの加き印章は、ギリシア、ローマの時代におきましては、通常黃金か、あるひは印を彫りまする面だけに、かたき石類、たとへば水晶、瑪瑙の類をはめまして、それに印影をほります。かくの如き印が、ローマ時代から往々に傳はつて居りまして、ヨーロッパの博物館には、隨分その品の集つて居る所がございます。中世の帝王がたも、やはり古代の例を追ひまして、あるひは金印、あるひは石印を用ひられますが、全部黃金のもありまするし、又印面部だけ石

材のもございまする。中世の頃印材として用ひましたるものはいろ〳〵ございまするが、先づ金屬より申しまするならば、青銅が最も多いので、それに次ぎましては、金、銀、眞鍮、鋼鐵などでございまする。又石類でいひまするならば、水晶、瑪瑙、玉髓などで、普通の石や板岩などは珍らしくて、どうかすると、象牙のこともございます。

かくの如き印を捺しまするには文書の紙に直ぐに捺すのではございませぬ。何か印影をうける筈の品物の上へ捺すのでありまして、その品物は、金屬か、さもなければ蠟でありまする。先づ金屬に就て申すならば、最も重大の文書ならば黃金板、又往々に鉛の塊へうつこともございまする。さもなければ封蠟でありまする。この黃金板なり鉛の塊なりへ印をうちまするのは東ローマの習慣でありまして、東ローマよりしてこの慣例が他國へうつゝて參つて、中世を通じてヨーロッパに行はれて居りまする。但しかういふ金屬にうちましたる所の印は、どういふ風に出來ましたるか、その邊の所は、はつきりはわかりませぬ。黃金板といひまするは、いづれ文書の重大なる程度に隨つて、その黃金板の厚さも自然かはるのでありますが、通常の所、うすい黃金のきれを用ひるのであります。極めて薄い黃金の板でありますから極めてペラペラのもので、それへ印影をうちます、さうしてその黃金板を丸形に切つて、その緣を少し曲げます、又印影を打ちませぬ所の、同じやうに丁度合ひまする同じ大きさの黃金の、申さばあはせ

蓋の様なものをつくりまして、恰かも丸形の香盒の如き形に兩方をあはせるのでありまする。かやうに致しましたのでは、もとよりべコ〳〵で、鳥渡さはれば潰れるでせうから、この印を持たせる爲めに、あるひは封蠟をつめるか、あるひは細い木を柱の様に中へ挾んで、それで持たせるので、何十匁と申す純金の塊へ印影を打つたものはない。かくの如くしてつくつた丸形の印影をうけて居るものを、通常金印と申すので、かの所謂アウレア・ブルラ、卽ち黃金印と申す文書のあるのは、何れも重大な文書で、その重大なことを示さん爲めに殊更この黃金印を用ひましたから、遂に文書そのものをさして黃金印といふに至つたのでありまする。黃金印を具へたる文書は多くありませぬ。ドイツに二つありますが、いづれも重大なる憲法に關する文書でありまする。又鉛でありましてもさうで、これはやすいものでありますから無垢の塊をつかひ、又やわらかい金屬でありますから、その上へ直接に印を打つても印影はうつりまする。ローマ法皇の御所におきまして、よくこの種類の印を用ひまする、ひとり法皇御所のみならず、東ローマにおきましては、古來一般に鉛を用ひて差閊へなかつたのでありまする。しかし中世の王侯がたが通常用ひられたる印影を受けるものは、かくのごとき黃金製の香盒形のものやら、あるひは鉛の塊ではありませずして普通封蠟なのであります。

さて封蠟の製法につきましては、いろ〳〵説のありまする事で、たしかなことは申上げ兼ねまするが、大體のことは分つて居りますからお話致しまするが、純粹の蠟ではありませぬ。現にその調合する處方はいろ〳〵傳つて居まするが、要するにまぜもので、白蠟と脂肪とをまぜるのであります、場合によりましては、鐵氣を含みましたる粘土をまぜたといふこともありますが、これは稀な例であります。本來蠟の色に就いては更にきまつたことはないので蠟の天然の色に任してあるので、古いものを見れば、時代相應多少色を帶びて居るが、新しい時には白かつたらうと思ひます、現存の品で見ますれば、保存の仕方で、白いのも黃色いのも薄紅いのも薄鼠色のも薄鳶色のもありまする。然るに時代が下るに隨つて、萠黃及び赤の蠟をつかふ習慣がはやつて來ました。萠黃は綠青で色をつけ赤は通常朱砂で稀には丹砂をつかつたことであります。この萠黃なり赤なりは、用ひる人が隨意に使つたものであるが、やがては差別を生じて、赤蠟を使ふのは一の家の格式となりました。かやうなる封蠟の塊をつくるには、古い時代には勿論手でつくつたので、表面には印影のみであるが、裏面には指の先の跡がついて居るのが見えます。往々にして又鑄型をつくりまして、一定の型に封蠟を鑄たかと思はれるのもございまする。

ドイツにおきましては十五世紀以後には、この印影を具へました蠟の塊を保存せむために、あるひは木、あるひは金屬よりして丁度蠟の塊を入れるだけの香盒の様な器をつくつて、それ

へいれて置く例となつて居ります。それより以前は印影の箱といふものは例にないので、以前は唯印影の捺し放しでありまする、十五世紀の中頃以來には、紙を四角に切つて、濡らして蠟の塊の上へ被せて置いたといふこともありますが、その場合には、紙を上へ被せて置いたといふこへ印を打つたのであるから、蠟の塊に印影が附くと同じく紙にも多少印影がつきまする。

かやうに致して印影を受けましたる所の封蠟は、ローマ時代におきましては、必らずひもにつけてあるのです。かやつり紙なり、革紙なり、あるひは木の板なり、何なりそれを重ね合し、若くは卷き締める爲めにひもを用ひて、そのひもでよくかゞつて、そのひものかゞり目をほぐすことの出來ないやうに、この印を捺したのでありますから、無論皆ひもに附いて居りまする。卽ちひものかゞり目を封蠟なり何なりで蔽ふやうにして、その上へ印を打つたので、ひもはその塊の下を通つて居るのであります。中世に至りまして、例へば八九世紀頃に至りますれば、文書の裾に菱形の穴をつくつて、そこへ封蠟をつめて、その封蠟に印影を捺してその封蠟の落ちぬ爲めに、絹絲で八重十文字につなぎとめてあります。又後になると、段々ローマ風に變つて參つて、ひもをつける例になつて來ました。ひもをつけるといふのは、文書の裾を折つてそこが二重になるから、そこへ穴をあけて、そこへひもを通して、いろ〳〵の花やかなる色の絹、麻、毛絲のバラ絲でありまするが、それを通して、一通り結んで下へさげて、その絲に封蠟の塊がついて居るので、これは一枚の文書から絲についた封蠟の塊がぶら下つて居るのでありまする。ローマ人は文書を內見し得ぬ樣にひもでかゞつて、それへ印を捺したのであるが、十二世紀中よりこのかたのはさうでなく、ひもに封蠟をぶらさげ始めたのであります。全く文書そのものゝ確實を證するものと化けて來た故に、かくの次第なのであります。何故にひもに印影をぶらさげ始めたか、理由はわかりませぬ。これに用ひた絲類はもつとも絹絲が普通なんでありますが、他の絲類卽ち麻とか毛絲とか又は革紙の切れ端、革の切れ端なども面々勝手に使つたので、初はさうであつたが、封蠟の色と同じくこれも後には絹絲を用ひるものは王侯の格式であるかの如くにきまつてしまひます。さうなつてくると段々それ〳〵きまりがついて、例へば黃金印ならば絹絲に限るとか 鉛印なら革紙に限るとかいふやうになり來りました。が何れにしても十二三世紀以後のことであります。町村とかあるひは一私人などが用ひましたのは文書と同樣のもの、卽ち革紙の切れ端を用ひたものであります。かく文書よりして何かの紐でもつてぶらさがつて居る印影をうけた何かの品物、通常は蠟の塊、それをブルラと申します、もとラランの言葉で古い意味におきましては、ローマの貴顯の家の子供等が、黃金の鎖を以て首からかけて居た守り箱のことであります、このブルラもやはり文書よりして紐を以てぶらさがつて居るのであるから、つまり古代の子供の守り箱と同じ樣な位置にあるから、この

名を得て居ることと思はれます。もしかくの如くにぶらさがつて居る印影を具へたる、通常の場合でいへば封蠟のかたまり、それを失ふとか、又は火事に遭うて表面の印影がわからなくなれば、文書は無效となつてしまつたことであります。紐はたとひ切れましても、封蠟の塊さへ完全に殘つて居ますれば、文書は、效力を持つたものでありまする。それゆゑに通常は、文書を適宜に折つて、折つた文書の上へブルラをそつくり載せて保存したもので、極く稀な場合、卽ち非常に重大な文書などでは、特に銅の筒などを拵へてその中へ入れたこともあります。十五世紀以後には、右樣の次第でありますから木なり金なりの箱を拵へてこの封蠟の塊を保護した次第なのでありまする。

次に印影の形につきまして少し申しませう。印影の形は多少印材によるものでありまして、印影を受くる物質が金屬であれば通常丸かつたので、封蠟に印影をうくる場合に限りましていろ〳〵樣々なる形があるのであります。この封蠟の場合におきましても、通常はやはり丸いので、中世の初まりに於ては除外例として皇帝御璽に楕圓形がありまするが、その以後になりまするといふと、皇帝御璽などは專ら丸形のものでありまする。然るに列侯がた豪族がた都府寺院その他の印形となりまするとこの丸形楕圓形の外に種々樣々な勝手氣儘の形が用ひてあります。もつとも家によりましたり、地方によつたりしまして、多少の慣例はあることなんであります、例へば十二世紀以來は、高貴の僧官がた、又は寺院などの印形に、多く先の尖つた楕圓形一名抛物線形と申すのが行はれまして、列侯がたの中にもこの形の印形を用ひた家があります。又十三世紀以後になりまするとこの形の印形を用ひた家が出て參りまして、楯のとがりをあるひは上にしたり下にしたり、又楯の横の線を平にしたり、そうしたりいろ〳〵に致します。ヨーロッパの印章學に於て通常擧げておきまするは大凡左の種類であります。

○圓形
○尖り横楕圓形
◇上まがり楯形
□四角形
✤四葉形
○尖り竪楕圓形一名地物線形
◡下まがり楯形
△正三角形
♧三葉形
○横楕圓形
◡楯形
▽逆三角形
▭横長方形
○竪楕圓形
◊梨形日本でいへば寶珠ともいふべき形
♡心臟形
▯竪長方形
◇竪菱形

この印の形に添へてあります名稱は、ヨーロッパの印章學が普通に用ひまするとなへを全く直譯致しましたものであります。上に申上げる通り、これらのいろ〳〵の形は、さう屢々出てくるのではありませぬが、とにかく、ある家におきまして、ものずきに用ひましたので、まづ以て變例の方でありませうが、とにかく類をあつめて見れば、かういふ風になるので、つまりあまりものずきな形の印を用ひまするのは却つて家の品位が落ちる樣な次第なのであります。

丙、古文書の言語。

ヨーロッパの古文書の言語は、ローマ以來の先例によりまして、通常ラテン語で、又重大なる古文書には必らずラテン語を用ひた次第でありました。もつとも、このラテン語と申すのも、ローマの時代におきましては特に文章學の學校がありまして、この學校の卒業生より文書類調製の官吏を採用致しましたから、古文書の文章はいづれも皆正式のラテンの文章であつたのでありまする。但しラテン語も共和時代の昔より帝國の終まで隨分年代の久しいことで、時代が變りまする毎に實用言語も屢々かはつて參ることでありまするからして、文章學得業生たる所の官吏等は、つとめて古文をかいたのでありまするけれども、が自然に自分等が平生話して居るところの訛りがまじつて參つて、往々にして古文の格を破つた文言があらはれて來て居りまする。それにしましても、ローマ帝國におきましては、その滅亡まで、とにかく正式のラテンの古文でありました。しかしローマ滅亡して今日のヨーロッパ諸國が段々興つて來るについてもはや右樣の文章學校が各國にあるわけでなく、たま〳〵ラテン語の專門家が方々の國に時々出た所が、僅かな門生をあつめて教授して居た位で、とても諸國の人民全體に正式にラテン古文を教へたわけでもなければ教へきれたはずもないのであります。もつともイタリアとかフランスあたりで、朝廷におきまして、特にラテン文章の練習をさせまして、つとめて正式のラテン文をかゝせやうと骨を折つたことではありまするが、何樣ラテン語がヨーロッパ諸國にローマ帝國の國語として行はれては居りましたなれど、種族は到るところに違ひまするし、言語も勿論違ひますから、ラテン語を、教育の力で教へ込んで居ましたけれどもが、自然國語の訛りがはいつて參つて、フランスに用ひて居ります通俗ラテン語、イタリアに用ひて居ります通俗ラテン語、イスパニアに用ひて居ります通俗ラテン語、ポルトガルに行はれて居る通俗ラテン語、何れも皆それ〳〵の國訛りを帶びて居ります。これらの通俗のラテン語が、今日のフランス語、イタリア語、イスパニア語、ポルトガル語などとなつたのであります。中世のラテン語は、かく民間に行はれて居りまする通俗ラテン語を多少練つて書いたのでありますから、もとより正式のラテン文ではありませぬ。唯フランス、イタリアなどの如く特に古文の學に注意し

て居た朝廷で出した文書は、他國のよりも文章がやゝラテン文に近いと見えるだけの相違であります。かやうなる文章がヨーロッパに於ては所謂古文書用の文體なのであります、例へて申さば本邦の古文書に於て屢々見まする純粹の漢文にてもなければ、純粹の國文にてもない一種あひのこ風の漢文と同じやうなものであります。しかしこの文書樣の文章を、中世の時代におきまして、ヨーロッパ諸國におきまして、面々が實際に實用して居た次第ではないのでありまする、それは學者社會とか上流社會とかゞ、特に己の才學を衒はむ爲に公の式場とか、あるひは寄り合ひの場所であるとかいふ場合に、豫め今日はかういふ風の話をしやうかかういふ言語をつかはうなどゝ腹稿をして來て、互に己の才能を示さむ爲につかったので言葉をかへて云へば、上流社會の通語といふべきで、民間の實用語ではありませぬ。民間に於て、それならば、いかなる語を話して居たかといふに、皆それ〴〵の國語でありまして、卽ちドイツに於てはドイツ語を、イタリアにおきましてはイタリア語を、フランスにおきましてはフランス語を、イギリスにおきましてはアングロサクソン語を話して居つたのであります。さうでありますから、一般人民によく貫徹せんければならぬと思はれるところの法令になると、特にその國の國文にかきまして發布したこともございます。しかしこれは初のうちは變例で、まづ以て臨時のものであつたが、それが段々時代が下つて、もとの文書用のラテン語は自然と用ひることが

尠くなつて、國語を用ひる場合が漸々に多くなつて參つたのであります。

このことは必らずしも古文書のみのことでなくて、古文の書類が皆この體でありまする。記錄に致せ、覺書に致せ、帳簿に致せ、裁判所の宣告に致せ、法律の文に致せ、一切の書類悉く古くは文書用のラテン語でありましたが、段々世が下るに隨ひまして、國語を用ひるやうになり來つたのでありまする。二三百年前の書籍を見まして、奇怪に我等が感じまするのは、本文は國文でありまするのに、註釋は却つてラテン文であることであります。何でも改つて書くとか話すとかするときには、ラテン語でなければならぬ樣に心得て居りましたもので、大學の講義などは勿論のこと、ラテン語でありました。これもその儔を申さば、本邦あたりで學者とか、上流社會の人とかいへば、厭でも應でも漢文をかゝねばならぬものとおもうて居たと同じことこの流義が、近く百年以前頃までもつゞいて居ります。そこでヨーロッパの史學を修めやうと思ひますれば、普通の編纂物を讀んで滿足して居るならばいざ知らず、かりそめにも少し眞面目に根本史料に遡つて研究しやうと思ひますれば、是非とも第一に學ばんければならぬ語學はラテン語なんであります。單に古文書を讀むためにいるのみならず、すべての記錄、覺書、帳簿類、何くれとなく、書類はラテン語であつたから、まことに餘儀ない次第なので、先申さば本邦の漢文でございませう。之に次ぎまして入用な語學は、申す迄もなくそれ〴〵の國語でご

ございまする。

丁、古文書の日附(ひづけ)。

ヨーロッパの古文書におきましては、日附のことが甚だやかましうございまして、日附がなければ古文書が無效となる例であります。もつともこの日附のことは年代學に於て申すのがあたりまへなんでございますが、古文書のことを申す序(ついで)に聊かこゝに申すことに致しませう。

まづ日附と申さば、年月日の三つでありまするが、年のうちかたにいろ〳〵のうちかたがありまする。ローマ時代に於ては、專ら當時在職のコンスルの名前をうちましたものであります、と申すのはコンスルの任期は一箇年でありまするから、コンスルの名前によつて、年はきまるのであります。東ローマになりましても初の中はやはりこの舊例によつて居りましたが、有名なるユスチニアヌス帝にいたりまして、新らしき制度を布かれまして、皇帝の卽位何年といふことに改まりました、卽ちキリスト紀元五百三十七年の八月三十一日の勅令によりまして、東ローマの全領内に於て用ひまする所の公けの日附は、皇帝の卽位年數を擧げべき例と相成りまして、卽位元年より順次御在位中の年數を數へるのでありまする、でユスチニアヌスの勅令によれば、御卽位の日を以て卽位元年の第一日とするのでございまする。ユスチニアヌス帝は四月一日の御卽位でありましたから、卽位何年と申すのは、四月一日を以て始まる年で、曆年と

は違ひまするで頗る不便でありますが、ま、かやうな制度となりまして、フランス、イタリアあたりまでも、この制度が自然に行はれるやうになつて參りまして、今日に至るも、例へばイギリスあたりでも法令などには必らず、何王卽位何年とかくことになつて居ります。この卽位年につぎまして行はれた他の年のうちかたがあるが、あまり專門にわたるからこゝには述べますまい、唯後世になりまして普通に行はれるキリスト紀元のうちかたに就いて鳥渡申上げて置きませう。

元來このキリスト紀元と申すのは、寺院におきまして、宗教上の祭典を執行いたしまするに必要がありまして用ひ來つたものでありまして、今日日本の寺々においでになれば、釋迦入滅後第何年といふ札が懸けてあるのと、つまり同じ目的なのでありました。然る處がこの寺の慣例が自然普通の在家にうつりまして、九世紀の上半期頃よりして、ドイツ地方などではポツポツ一個人の文書に使つてありまする。しかし朝廷におきましては、容易に用ひたことではございませんでした。ローマ法皇の御所におきましてさへも、初の中は文書にキリスト紀元をつかつたことは曾てないので、これあるは十世紀の下半期以來のことであります。さればキリスト紀元によつて年を數へると申すことは、餘程後世のことであると御承知を願ひたい。この後世になりましてキリスト紀元によつて年を數へるにも、いろ〳〵の數へかたがあつて、今日か

ら見れば、何か架空の數へかたであつたやうに見うけられるけれども、實はさうでなかつたのであります。いろ〳〵のかぞへかたと申すのは、キリスト紀元の初日を暦年のいつに置くかといふこと即ち建正の問題でありまする、今日は暦年の一月一日に置きまするが、昔は時と國と地方とに依りまして十二月廿五日を初日としたり、三月廿五日を以て初日としたり、又バスコア祭（耶蘇更生祭）の日を初日とするの例もありまして、これは年によつて日が違ひますから、餘程厄介なる初日と申さなければなりませぬ。この最も面倒なるキリスト紀元年の數へ方を、フランス流と申し來つて居りまする。尚三月一日を以て初日とするのもございました、又九月一日を以て初日とするのもございました、何様何れも皆暦年と違つて居るので、計算に頗る面倒でありまする、然るに之を暦年と合ふ様に致すと便利でありますから、フランスに於ては一五六六年、オランダに於ては一五七五年、スコットランドに於ては一五九九年、イングランドに於ては一七五二年以來、つまり十六世紀このかた諸國に於て、これが一般に行はれることと相成つたことでありまする。年のことはこれだけと致して置きます。

さて、古文書學のことをあまり委しく申して居ましては際限がありませぬから、これだけに止めて置きまして、次は地理學にうつります。

第三　地理學

地理學は非常な廣い學科でありまして、通常我等の用ひまする小わけを致しましても、それだけでも指を屈しますれば、まづ數理地理學、次では物理地理學、次では物産地理學あるひは經濟地理學、次では政治地理學、又この他に歴史地理學と申すのがございまする。又人によつて人類地理學といふのを置く人もあります、又人によりましては、この政治地理學、歴史地理學、人類地理學の三者を一つものとして取扱ふ人もございまする。しかし我等の見る所では小分けは成るべく小分けにする方が宜しいので、類似のものがあるからとて一つに纏めることは宜しくないと思ひますから、我等は茲に政治地理學、歴史地理學、人類地理學と、かうばら〳〵に、割いた方がよからうと思ひます。

小分けをすれば先づかやうでありまするが、精しく申せばこれらの小分けはいづれも皆他の科學と極めて密接の關係をもつて居りますので、例へば數理地理學に致して見ますれば、これは直ちに星學に連なり、物理地理學は物理學と直ちに相連なつて居るもので、地質學の一部分とも直接に關係して居まする、經濟地理學は農學鑛採學と相連なつて居るものでありまして、その關係は極めて親密でありまする、政治地理學は政治學、統計學、經濟學と相連なつて居るものでありまして、そ

の關係は極めて緻密でありまする、歴史地理學は史學と相連なつて居りますもので、殆んど何處に境目があるかわからぬものでありまする、人類地理學は土俗學人種學と相連なつて居りまして、廣い意味で申す人類學と極めて親密の關係ある小分けであります。かくの通り地理學なるものは本體が何處にあるかわかりませんので、申さばいろ〳〵様々の學科の一部分を驅り集めて來て、假りに造りたてた一の混成隊の様なもので、所謂烏合の衆で、全體がどうも組織的に出來て居りませぬ。元來地理學はシナに於ては禹貢このかたヨーロッパに於てはアナクシマンドロス以來存在してる古い學問でざつと見積つても二三千年の古物でありますが、何様以上申した様な非常な不幸の地位に居るもので全く獨立の立脚地をもつて居らぬと申してもよい有様でありまするで、この學全體を一の科學とせむことは、まだ〳〵前途遼遠のことであらうと思ひまする。それでドイツあたりでは地理學といへば卽ち直ちに物理地理學と、かう心得て居るものが多いやうで、恰かも國家學といへば、經濟學のことと心得て居るやからが多くあると同じわけであります。因に申すが、國家學は地理學と同じく烏合の衆であることは勿論であります。

かうして見ますると、地理學と申すものは、到底容易に出來るものではないといふことは、少しあたまのある人はおわかりにならう。又現今の世に、この各種の地理學に通じて、全般他に擢るといふ人は一人もない、所謂地理學者は何かこの中の一種を專門に致して居ることであります。固より中學程度の地理學ならば、何もかく細かく割く必要もありませぬから、全般に通じてしゃべらうとする人はしゃべりも致しませうが、全體に通じて精しくしゃべることの出來る人は世界にないと申すのであります。これだけは地理學は何かといふお話でありますが、史學に於て補助學科として最も賴みにして居りまする地理學の事に就て、これから少し申述べませう。

史學が補助學科として最もたのみにして居る地理學の種類は、重に歴史地理學と政治地理學とで、稀に物理地理學の應援を借りることになります、又どうかすると數理地理學をも喚び出して來る必要もありますが、通常の場合では歴史地理學と政治地理學とで用が辨じまする。因てこれからまづ歴史地理學のことを申しませう。

甲、歴史地理學。

これは史學に於て殊に重要なる補助學科でありまする、と申すのは、凡そ人間社會は恰かも培養基にある細菌の群と同じであるから、必らず地面に關係して居る、故にこの人間社會に於けるあらゆる出來事が皆地面に關係して居ることはいふまでもない。かやうなわけがらでありますからして、歴史地理學なる學科は絶えず史學の傍に居て一方ならず盡力して吳れべき筈のものたるは説明するに及ばぬほどのことであらうと思はれまする。然るに歴史地理學なるこの小分けは、古來まことに進歩せぬ小分けで、近頃に至つて、やうやく、どうやらかうやら少し

芽が生え出した位のことでありまする、と申すのは古人は人間の社會が發展するにはいかやうなる條件を要するか、言ひ換へて見ますれば、條件の一としていかやうなる地理を要するか、又國家として伸びゆくには、地面上にいかなる位置を要するかなどといふ實際上のしらべをすることは、トントなかつたのである。地理のことを机上で批判して、かれこれいふ人は昔より多いが實際に當つて社會なり國家なりの發展のために、どういふ位置、どういふ地勢、どういふ地味などゝいふことをしらべるには、これには大分旅をした經驗もいりますし、科學的のあたまも持て居なければならず、つまる所數理上の打算の出來る人でなければ覺束ないことでありますから、机の上で倫理論などをするのを學者の專務と心得て居た時代には、とても出來ることではなかつたのです。それで近頃になつて、やうやくこの邊のことに注意するものがポツ〳〵出來て參りまして、聊か歷史地理學も前途多少の見込みがあらうとまでに至りましたはまことに昨今のことでありまして、後來この歷史地理學を基礎として歷史上の事實をしらべれば大に正確に述べらるゝといふことを知り出したも、まづ昨今と申して宜しうございませう。

いづれにしても、この歷史地理上の研究からはいつて、史學のある問題に就て解釋を試みやうとし始めたのは、まだ四十年になりませぬ。イギリスのバックルが、高山大河の人間の心に及ぼす勢力等を論じた筆法などは、隨分古いが、今我等の玆にいふは、さういふ類の空な論でないので實際の山を通過するには、どこに峠を求むべきかとか、河に舟をやるには、どこまでやれるかとか、又山腹を拓殖するには、どこまで出來るかとかいふ風なことなので、人心にいかに影響するかなどゝいふ机の上の論の方ではなくて、實際に山河を利用する方よりいふ論であります。バックルのいふやうなことならば、シナ人も夙に申して居る、一向珍らしくはないことであります。

乙、政治地理學。

又政治地理學が史學に、應援を與へてくれると申すのは、政治地理學は、我等の解釋する所によれば、現在存在して居る國家、社會がいかなる組織でいかなる作用をしていかなる活動をするかを研究するものと我等は思ふて居るので、古代の國家、社會もやはり同一の原則で生存し發展したのであらうと思はれるから、類推して考へる所の基礎を與へて呉れまする。卽ち一の學說を立てまする時に、立案のもとをどこに据ゑやうかといふ時分に、意見を述べてくれる所の學科であるのです。

この他物理地理學とか數理地理學とかゞ應援を與へてくれるといふ場合は、潮の干滿の時刻を知る必要があるとか、海岸線に變動のある理由を求める時とか、天體と地理との關係に就て取調べる必要のある時とかいふ場合のことであります。上に述ぶる所で、地理學と申す學問の說明と、史學がその應援を借りる場合に就ての大略の說明とを一通り濟したつも

りでありますから、次には一二の實例を擧げて、この補助學科の效力を示しませう。

一、歷史地理學に就ての實例。

歷史地理學は、古代の地理を研究するのと、一國又は一地方の地理を研究して史論をするのと兩方の方面に跨つて居るのでありますが、こゝには先づ現今の地理を古代の地理に復舊して、古代の歷史を考へるときの資料として用ひる場合を聊か申述べませう。

まづ手近な所で申して鎌倉でありますが、鎌倉の地理は、大抵誰も知つて居ることで、今更かれこれ申すほどのわけではありませぬが、要するに三期層の傾斜地であつて、三面は山で、一面は海でありまする。この三面の山の中、東、東南、東北の方面が山が高くて、西と西北の方面が山が低いのであります。陸から行けば、かくの通りの次第でありますから、何處から行くにも山を越さねばなりませぬ、あるひは高臺つゞきからゆけば山を下らなければならぬ。海岸通りに就ては、逗子から名越、辨ケ谷等の山つゞきを越して小坪へ下り、それより飯島の崎を廻つて、材木座へ出る濱道が一つあるきりで、これも山の斷層になつて海に落ちて居る處へ、人工を以て切開いたもので、通つたものは誰も知つて居るが、非常なあぶない道でありまする。かくの如きは現今の地勢でありまするので、鎌倉の盛な時代に於ける地勢は、これと少し違つて居ります。

全體この邊の海岸は陷沒する傾向があると思はれまする、現に飯島といふ島などは、今は殆んど島と申すべきものがない、海中の磯が少し波の上に現はれて居て、絶えず波がこの上を洗つて通り越して居るのを見うけまする、卽ち島は沈んでしまつて、僅かばかりの磯が之を代表して居るといふ次第なんであります。又江の島片瀨の方よりしてはいつて來る西の濱邊は七里ケ濱道と申して今もあるにはありますが、全くの濱傳ひで鎌倉に入ることは出來ませぬ、極樂寺村より極樂寺坂をのぼり、切通しを通つて鎌倉にはいらねばならぬ。この西の方の側は今も申す通り概して山が低いので、この山にはいろ〳〵の雜木が生えて居るが、これぞといふ程の大木もなし、七里ケ濱の方に出て居る所の山の傾斜は甚緩やかなんでありまして、登らうと思へばどこからでも自由自在に登れます。されば、この極樂寺よりの方の側は、鎌倉の方にとりまして頗る危險なる處といはなければならんのです。東南の方は、第一山が高い上に、三浦郡へ通ずるだけの路でありますから、かた〳〵もつて非常の用心をするにも及ばぬことであります。東の六浦金澤へ出る方は、山が極めて險阻なる上、當時は外國船などが多く着いた港へ通ずる道で、敵の襲つて來る患もなければ、これも心配はありませぬ。東北の方面は高い山つゞきで、太平山、勝上嶽などのつゞきで、敵の越ゆる心配は先ありますまいから、安堵して居つて宜しいでせう。次では山內、大船、梶原、常盤などの方は決して安心して居らるべき程の

要害ではありませんが、しかし又さほどあぶないと申すほどの場所でもない、もつとも常に敵に備へては居らんならんだらうが、いつ何時でも破つて通られるといふやうな易い處ではない。して見れば極樂寺附近の處は一番弱い所で、しかもこゝは關東關西の往還に蒞んで居る處でありますから、鎌倉の一番喉元たる所であるに、しかるに不幸にしてこの始末。

昔に溯つて見ますれば、この上にかてゝ加へて、まだ一の大難儀があります。卽ち稻村ケ崎の處であるが、今日の所で申すと、稻村ケ崎の處は靈山が斷層をなして海に落ちて、斷層の直下が一面の磯だらけで、おまけにいかにも深い。いかなる干潮の時も、こゝは乾かず、隨つてこゝを通る道などはない、いかに大潮の時でもこゝを通過することはなりませぬ。然るに昔はかういふ地勢でない、かやうになつたは大分古いことのやうには思はれますが、とにかく御維新前までは、大潮の時だけはがけ下は通れたのである。然るに御維新以後には、いかに大潮の時でも、到底通れませんのは、明治元年の大津浪の時に俄かに陷落したやに承はる、それが爲でありませう。

鎌倉時代におきましては、稻村ケ崎のがけ下に細い濱道があつて、この道を濱手道と申したことである。京都より關東へ上る旅人は同れも皆この濱手道を經て鎌倉へ參ゐつたことと思はれまする。勿論その頃といへども、濱手道は固より幅の廣い道ではないので、通行するに隨

分困難であつたやうに見うけられまする。源光行の海道記と申すのは、光行が貞應二年の四月に京都より鎌倉へ下りました折の紀行であるが、それにこの濱手道の模樣が簡單ではあるが、綺麗に書いてあります。

腰越といふ平山のあはひを過れば稻村といふ所ありさかしき岩のかさなり伏せる濱をつたひゆけば岩にあたりてさきあがる浪の花の如くにちりかゝる。

うき身をばうらみて袖をぬらすともさしもや波に心くだかん

申の刻に由井の濱に落ちつきぬ

と見えますから、稻村ケ崎のがけ下の道は、貞應の頃いかやうなものであつたかと申すことは、よく想像が出來ます。又この濱手道のことは梅松論にも見えて居ます、梅松論は著者はつきりわかりませぬが、いづれ足利尊氏の幕僚の筆に成るものに違ひありませんことは、先輩が夙に考へて置きまして我等に於ても異議のない次第であります。この書に次の如くに書いてあります。

五月十八日未刻ばかりに義貞の勢は稻村ケ崎を經て前濱の在家を燒きはらふ煙見えければ鎌倉中の騷ぎ手足を置く所なくあはてふためきける有樣たとへていはん方ぞなき……相模守高時禪門元弘三年五月二十二日葛西谷にをいて自害しける事悲むべくも餘あり……こゝに不思

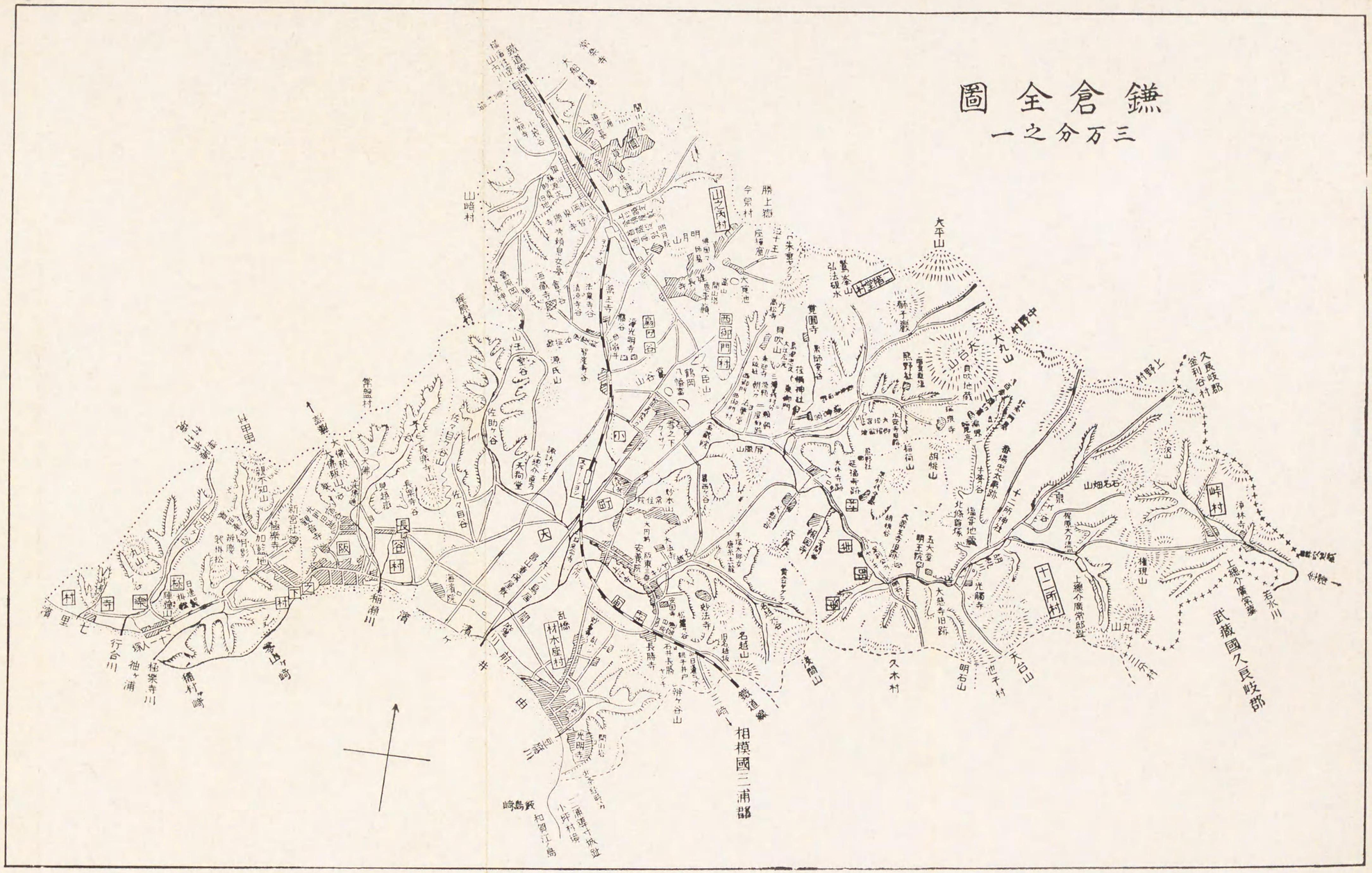
議なりしは稲村ヶ崎の浪打際石高く道細くして軍勢の通路難儀の所に俄かに鹽干て合戰の間干潟にてありしことかた〴〵佛神の加護とぞ人申ける

とかいてありますから、建武の頃に至りましても、濱手道は、いかにも磯の間を通る細い道で、軍隊の行軍の出來るやうな場所では本來ないのですが、しかし潮が引きまするといふと干潟があらはれて出まするので、大部隊といへども優に通過し得た次第なのであります。

冬の最中には、波が甚だ荒うございますから、濱手道は益々あぶない筈なのですが、それでも敵に備へる必要があつた證據は、現に尊氏兄弟が謀反して鎌倉に據りました時分は冬の最中でしたが、それにも拘はらず、稲村ヶ崎を堅固に警備せしめてるのでよくわかります。さうして見ると、この極樂寺村の處は、鎌倉の喉元であつて、しかも甚だ弱い處なんでありまするに、不幸にも折り重ねてこのあぶない濱手の道が更に加はつて居るのであります。この極樂寺の切通しを鎌倉の大手と申してあることですが、この大手と稲村ヶ崎の濱手道さへ破れなければ、鎌倉は先づ無事と申して宜しいのです。鎌倉が敵に攻め落される時分には、已にこの道を破られて居るのです。その中でも極樂寺坂はまだ守れるやうでしたが、濱手道に至つては、敵が干潮に乘じてこゝを通れば到底喰ひ止めるすべがなかつたやうであります。干潮の時分に、稲村ヶ崎のがけ下が干潟になつたと申すことは、今でこそ思ひもよらぬことでありまするが、現に

鎌倉全圖

三万分之一


相模國三浦郡
武藏國久良岐郡
大平山
十二所村
峠村
久木村
長谷村
材木座村
西御門村
山ノ内村
山崎村
大臣山
名越山
大丸山
明石山
久良岐郡
金沢谷村
上野村
中村
清水井
清ヶ崎
行合川
極楽寺川
桐ヶ谷
七里ヶ浜
稲瀬川
上ノ山
下ノ山
大町
小町
若宮大路
鶴岡八幡宮
光明寺
長勝寺
妙法寺
安養院
東慶寺
円覚寺
建長寺
浄妙寺
浄智寺
明月院
瑞泉寺
光触寺
大慈寺旧跡
五大堂
明王院
胡桃山
稲荷山
山畑
石切山
権現山
丸山
大仏
大仏切通
巨福呂坂
名越切通
朝比奈切通
化粧坂
小坪村
小坪切通
逗子
鎌倉山
鎌倉郡

御維新前までは、大潮の頃に限つて五丁ぐらゐあらはれたのであると土地の人より私は聞いて居る。鎌倉の地形を昔に返すに困難なのは、主としてこの稲村ケ崎の濱手道を復舊する困難なので、これさへ復舊すればあとはたやすくわかりまする。

極樂寺坂は、昔は今より少し險阻であつたらうが、大體に於ては今と相違がなく、その他に御維新後新道を開いた箇處があるが、それは誰も知つて居ることで、別に故らに調査をするといふ必要はない。

かくの如く復舊して見ると、鎌倉は天然の城廓であります。規模はいかにも小さいがこれを本丸と心得れば宜しい、箱根の東、碓井の南の平野一面を二の丸、三の丸としたと見れば宜しいので、本丸とさへしておけば、いかに規模狹少でも鎌倉で十分でありませう。さればこそ北條氏の盛な時代には、鎌倉はまるで本丸の取扱ひでありました。この本丸へのはいり口と申さば、今申す通り、極樂寺坂が大手でありまして、朝比奈の切通しが搦手である、さうしてこの搦手は更に敵の進擊をうける心配のない場處なので、大手一方さへ防禦すれば、他は枕を高くして居て宜しいといふ堅牢無比の天嶮地であります。後世の如く、石垣を高くし濠を深くし櫓を聳やかして人工の城を築くすべを知らなんだ古代に於ては、鎌倉の地は實に堅牢無比の城廓であつたに相違ございませぬ。鎌倉ごとき猫の額のやうな狹い處にちゞこまつて、天下に號

令せんなどゝは賴朝にも似合はぬ小さい考などゝ申すは、歴史地理の學問に未熟なものゝ申すことなので、少し考へて見ますれば却つて規模の甚だ大なることを思はんければなりませぬ。これが歴史地理學が史學の補助科學として與ふる效力の一つの例であります（一六三頁一六四頁の間に挿入したる鎌倉全圖は大體を犬山初藏氏編輯の圖に採つてこれに取捨を加へ我等が親しく實地踏査をして古い書類や土人の口碑を考へ合せたもので增補したのである。）

今もう一つ類似の實例を擧げませう。シナのアマカオといへば、ホンコンのわきにあるちっぽけな港で、ポルトガルの領分であるといふことは、兼々御承知のことと存ずる。今はいかにもつまらぬ港で、商業と申すほどのことも祿々無く、殆んど大袈裟な賭場であるかに承はりますが、かやうなる場所をポルトガル人が、その盛なる時代に借り受けたと申すことは鳥渡考へれば、頗る合點のゆかぬことの樣ですけれども、地理をしらべて見れば、その至極もつともなることが直ぐわかります。

まづ、このアマカオといふ地は、もといかなる場所であつたかといふに、明の時代には甚だ大切の場所であつたのです、と申す仔細は、かの廣東省のカントンの町は、唐の時分から有名なる貿易場でありまして、南洋諸國の商船が盛に出入致した處であつて、南洋へ參るにもカントンから出發したことでありました。獨り南洋諸國の商船のみならず、遠くアラビアの商船、インドの商船なども出入致しまして、それが爲めにカントンの貿易高は莫大なことで、唐の政府の收入の餘程重要の部分をなして居つたかと想像されるのであります。然るところが、明の正德の間に致りまして、カントンを貿易場とすることを差止めまして、南洋諸國の商人に命じまして、高州の電白縣と申す雷州半島もよりの港へ引越させました。然るところ電白の如き田舍の港では何樣不便で堪らんので、賄賂を使ひまして、廣州内海の島の樣になつてる香山といふところの東南の濱邊に壕鏡といふちっぽけな半島地がある、こゝへ引越したいといふ願を出して賄賂づくで到頭通しましたので、そのかはり借地料として年に二萬兩づゝ納めることとなりました。この事は嘉靖十四年でありました。この壕鏡といふちっぽけな半島地が今の所謂アマカオなので、もと〳〵極くつまらん處であつたのでありますが、何樣カントンに通ふには極く都合よき處ゆゑ、商人等年々二萬兩の稅金を出してまで借り受けたのでありまする。

もとカントンが貨物を呑吐することは莫大なものであるのです、今日もさうでありますが、唐の時代も左樣であつたらうと考へます。シナの北部より大庾嶺の南に出やうとするには、昔より五嶺と申して、峠道が五本あるといふことでありますが五本とも皆峠ではありませぬ、又峠でないのみならず、至極便利な道が一つあるので、それによつて少しまわり道にはなるのですが、膏腹の土地で、人口も澤山あり貨物のはけかたも頗る宜しい大地方を通る道があります それは所謂桂嶺道でありまして、廣西省を通つてゆきます。廣西省は廣東省の西になつて居り

まして、湖南省にも貴州省にも雲南省にも自由に通ずる處でありまする。さればこそ廣西省の梧州といふところは田舍の樣には見えるですが、西江に臨んで居りまして、水運によつてカントンと自由に往復が出來まするから、實際非常なる貨物の集散地でありまして、カントンが呑吐する貨物の大半はこの地へ參るのであります。そこでカントンの商業は非常に盛なといふことになるのでありまして、福建や江西の方へ出まする貨物はその割にならうと思はれます。この盛なるカントンの商賈を養うてゆきまするには、是非とも諸國の商人がカントンに來るか、さもなくばカントンに出入するにどこか便利な所に居らねばなりませぬ。この壕鏡、今日のアマカオの地は、もと南洋諸國の商人などが、電白みたいな田舍へ追ひ込まれて、賄賂をつかつて取つた位の地でありますから、とにかくちっぽけながらに都合のよい所であることは論のないこと、こゝへポルトガル人も南洋の一國となつて、南洋諸國の商人と一所に商賣をしては居ましたが、何樣南洋諸國とて大きな國はなく、ポルトガルが一番大きくて力が强いから、自餘の諸國皆非常に恐れましたことで、自然ポルトガル人が一手借入れ地の姿と變化致したことでありまする。このことは神宗の代で萬曆十四年でありまする、租借の金額は年五百兩であつたと覺えて居ります。

ポルトガル人がこれ程までも苦心してこの壕鏡、後に所謂アマカオにありつきましたのは

一にこの廣西省及びその近隣の省の貨物呑吐力を狙ひ附けまして大に商業を營むの計畫であつたのに違ないです。卽ち今日イギリス人がホンコンに據つてやつて居ることを壕鏡によつて行ふたのでありまして、着眼點はポルトガル人もイギリス人も全く同じことであります。然らばポルトガル人は何故にホンコンには據らずして壕鏡の如きちっぽけな港へはいつたのであるかといふ御質問が出るかも知れませんが、それはホンコンを實地に見れば直ぐ考が附くので、ホンコンはいかにも天然の廣大な港ではありますが、しかしこの港のある島は、もと紅香鑪山と申す、碌に草もない岩山で、平地と申すものは殆んどないので、これを今日のホンコンの如き地に致しますには、イギリス政府が莫大の費用をかけたことであります。ポルトガル人などは、國は小さし財源は乏しゝ、とてもイギリス人のするやうな大計畫のやれる筈のものでありませんから、アマカオくらゐの規模のちっぽけな小湊が身代相應のことなんです。まして南洋諸國の商人が、先年より借り受けて居た場所でありますからしてかた〳〵こゝに尻を据えたのはもつともものことところは痛まず商業上には便利の地であり、かた〳〵談判にも面倒はなし、ふ存じます。今の如くにアマカオが寂れて了つたのは、畢竟するにホンコンに壓倒されたので、とてもホンコンと競爭しきれぬからであります、アマカオ左留の商人が意氣地がないと申す次第では決してありますまい。（アマカオ、カントンあたりの委しい地理は陸軍編輯の支那全圖を見られたい）

更に一つの實例を擧げて史論を致す場合をお話致しませう。古代の歴史になりますると、いづくの國々におきましても、とかく史料の甚だ缺損して居るものでありまして、眞面目に證據物によつて歴史をしらべやうと思ひましても、いかにせむ材料がない爲めに何とも說がつけられんで、みす〳〵いかゞはしく思ふけれども、已むを得ず舊說の儘に、かやうなことであつたさうでございますくらゐで筆を止めるに至る次第、かゝる場合に學術的にしらべむには、到底書籍類を當にすることは出來ませぬ、從來の史家は、とかく書籍類のみを當にして居たことで、それで今のやうな場合には答案に窮して古來傳來の話のみを繰り返して居ましたが、我等の方針では、決して書籍のみを當にするのでないからして、他の補助學科を連れて來て働らかせるのであります。卽ちシナに於て申さうならば、シナの春秋以前の歴史は、いかにしてやるかと申すならば、第一にシナの字學、第二に歴史地理學、第三に考古學に依賴致しましてやります。ギリシアの太古の歴史でありますれば、第一に歴史地理學、第二に考古學、第三に神話學に依賴致します。エジプトの古代史であるならば、第一に考古學、第二に歴史地理學、第三にエジプトの字學に依賴致します。ローマの古代史であるならば、第一に考古學、第二に歴史地理學、第三に古ラテン語の言語學に依賴致します。かやうなるやり方で、この字學若くは言語學、歴史地理學、考古學などの必要の順序は、國によつて多少違ふことはありませうが、先大體この若干學科が重なる働らき手となるのであります。そこで實例としまして、ローマの起原に就て簡單なるお話を致しませう。

ローマ最古の歴史を眞面目にしらべやうと思へば、かのプルタルコスのロムルス傳とか、ウエルギリウスの長篇とかいふ類のものは到底當にはなりません。そこで已むを得ませぬから、例の歴史地理學とか考古學とかいふものを連れて來まして研究するのであるのです。イタリア半島の中程の處に、西南の海岸に臨んで、斜に海へ下つて居る小さいでこぼこの原があります る、その最も長い所と最も幅の廣い所とを申すならば、十五里の長さに十二里の幅になりますけれども、これは一番長い所と廣い所とだけを云つた話しですからして、實際の面積を申すならば、中々この割に大きなのではなくして、中には沼も川もあり、役に立たぬ處が多いですから、きりつめた所五里四方といふて宜しからう。この實際役に立つところ五里四方と踏みましたでこぼこの原が、卽ちかの所謂ラチウムと申した地方であります。この地方を昔はチベルと申した河が灌漑致して居りますが、この河は昔はローマの町のある處で幅四十四間で、下流へ參りますと六十六間でありました。この河は隨分長い河で七十五里の長さがありまして、この中六十八里までは粘土性の山地を通つて居りまするで、こまかい粘土が水にかゝつて居つて、年中泥水でありまする、しかし水源地は天然の泉に富んで居る處でありまするで、一年中水量

が非常に違ふといふことはございません、先以て平等の水量と申して宜しからう。この河が山地を出まして、恰かもラチウムの原にかゝるといふところに、山の土が河水の爲めに段々に洗はれまして、所謂山の骨を露出しまして、島の形をしたり、半島の形をしたり、それもいろいろいりくみました形で、四方八面に谷を堀り込んで居りまする處があります。こゝが卽ちローマの町のある所で、俗に申すローマ七山の地でありまする、精密にいへば山が七つあるのではありませぬ、十幾つありますので、所謂七山といふのは他のことを間違つて山が七つあると誤解したのであります。この地は丁度荷船が上れまする限りの處にあるので、これより先になりますると釣船位のものでなければはいれませぬ、卽ちローマの町はづれからチベルの河は俄に深くなりますのです。この澤山の谷のある地は、水面より何程も高くないので、少しばかし水が出ますれば谷には皆水があがりまして、地形は明らかに半島又は島から成立つて居ることがわかるやうになります、又往々にして出水がしたことでありました。この谷と谷の上の高臺地とがローマ帝國の都の所在地でありまするけれどもが、本來のローマの國家はこの都の地面全體さへも包含して居ないので、卽ち意外千萬な話でありまするが、この高臺の中にバラチノ岡と申すのがあるです。細い馬の背見たいな形のつゞきで、他の高臺地へ連絡をして居ます、卽ち半島形になつて居るところの一つであります、この岡はローマの昔には谷の平

面より大凡百尺ばかしの高さでありまして、形は昔は菱形になつて居ました、その一方の側が四百五十メートルの長さで、三面はチベルの河水で洗はれて、急ながけになつて居ます。岡の上の平らな所を昔の姿にかへしまして計算して六萬千五百坪あります、今はもつとも盛り土や地ならしやらなんか致しまして、これより面積は延びて居るです。

六萬千五百坪と申すといふと、まゝざつと六萬坪でありまして、卽ち二十町歩に過ぎない、この二十町歩の處がローマ帝國の發祥地であつたとすれば、その小さいこと驚くべきであるが、この二十町歩の處さへも全部人民の居住して居た所ではありませぬ。太古のローマ人の居住して居つたところは、後には國家の祖先の居住地といふことで、ローマの歷代これを神聖の地として保存して置いたから、今日までも明らかにわかつて居るが、どれだけの面積かといふと百七十五メートルに百メートルの長方形でありまして、六萬坪なにがしの中の一方のがけに據つた隅であります。これを面積に直しますと五千五百六十八坪になります、この五千五百六十八坪の地が、かの所謂王政時代の極初のローマ人が居住して居りましたる場所であります。六萬坪なにがしにこの坪を配當して見ますると僅かに百分の九でありまする、さうしますると、山の臺の上の九分でありまして、まだ九割一分だけは、何につかつたかわからんわけで、ほうり投げてあるのであります。この九割一分を空地にして、九分だけの所に居住して居つたと申す

のはかういふ次第であるのです。

この九分の所に人民はそれ〳〵家屋を建てまして、あとの九割一分の所は非常の場合に家畜その他のものをとりいれまして籠城する爲めの準備の空地であります。即ち現に非常の太古の城壁が、がけふちにめぐらしてありまする、もつともその一部分より今は殘つてませんが、このバラチノ岡の臺の處から出ます所の火山燒石のかたまりのまざりました至つてザグザクの凝灰岩で造つてあります。その石の積みかたからして考へて見ましても、他國人に學んだものではございませぬ、この附近に當時居住して居ました人民が用ひつけて居ました積みかたである。遠方のエトルリアの人民とか、ラチウムの境にある山地の住民などが用ひて居た積みかたでないのであります。これら住民は各皆固有の石のつみかたを持つて居りまするで、これがわかるのでありますが、このローマ最古の城壁の僅かに殘つて居るのが、他國人の手に成らぬことも非常な太古なることも論はありませ。ぬロムルスがエトルリア人より百般の事物を學んだかの如くに古い書き物にあるが、この城壁に徵して見ると、大した間違ひで、太古のローマ人はエトルリアより技術を學び居らぬ次第であります。この二十町歩の臺の上を根據地として城壁を構へて、家畜を牽ゐてかの馬の背のやうになつて居る所を傳つて他の高臺地に遊牧して、夕景になつて來ますると歸つて來て、家畜を納屋に入れます、太古のローマ人はかく牧畜業を

以て生活して居りましたことは疑がありませぬ。固より、我等はロムルスなどいふ人が實際にあつたなどゝはゆめさら信ぜぬので、却つてこの町とでも村とでも國とでもおっしゃれだが、村即ち國でありまするが、この國を恐らく、ロモンと云つたらしい。それは古いラテンの言葉で河沿ひの義であります。この國名の淵源を知るに難儀して町の名前からロムルスなどいふ人名を拵らへたものと見えまする。因に申しますが、レムスといふ弟の名はアベンチノ岡の臺にあつた町の名から割出したかと思はれる但し語原は同一である。

この界隈にこのローマの卵の如き小さい國が、太古の世には澤山あつたので、決してローマのみではありませぬ。それは今一々申上げて居る暇はありませぬが、小高い丘で側ががけになつて居つて、なるべくがけ下に河の流れて居る處で、他の高臺地と馬の背のやうな地形をなして連絡して居る處には、大概國があつたのであります。面積の大小は論じませぬ、いづれも皆國であつたらしい、二十町歩などは大きい方で、小さいのは十町歩ぐらゐのものでありませう。かやうなる卵のやうなる國家が、この邊に澤山に集つて居つたのであります、ローマはその中の一つであります、これが生存競爭の爲めに近邊の類似の國家と戰爭致しまして、ローマは常に九死一生の姿にありましたが何樣非常な活力の國家で、非常な元氣の國民でありましたからして、幸にして四隣の敵を打破つて悉く之を併呑して、とにかく、ラチウムの中に於ては

大きなものとなつたのでありました、これは已に所謂王政時代の初に出來あがつたことでありました。この邊のことは考古學の力を大に借りましたし、又古代ラテン語の言語學の力をも借りましたが、歴史地理學も亦大に盡力をして、遂に出て參つた所の結果であるのです。自餘の太古の歴史で書籍によつては頓とわからぬ場合には、この實例より類推しておしらべになれば、多少考を得られませう。

二、政治地理學に就ての實例。

すべて力は最小抵抗力の線に於て進むと申すのは、誰も知つた物理學の原則の一つであるが、これは啻に物理學のみならず、一般の事物に亘り、又國家社會に於ける人間の事業にも心理にも適用することの出來る大原則でありまして、シナ人も古くより、人情は水の低きにつくが如しと已に申して居ることで、少し考へて見れば誰のあたまにでもこの原則が人間社會に行はれて居ることは明々白々の次第であります。卽ち人間はやはり動物の一つで、生存競爭の大原則に從つて生存して居るものである故に、かくの如き原則がはまつて來るのでありまする。

こゝに一の國家社會におきまして、ある程度まで領土内の人口が增殖しますると、段々に物價が騰貴して參りまして、從前よりは土地を深く耕しまするが、土地の生産力には限のあるもので、何程肥料を入れましても、何程學術を應用しましても、これより上の收穫增加の程度が

到底殖ゑぬのみならず、却つて減ずるといふ境に達しまするもので、これより以上を耕しては、つまる所、さしづめの算盤にはあふでせうけれども國家經濟の上からいへば大した損失があります。それもまだ一人一人のそろばん勘定のあふ間はまだしもですが、やがては一人一人の勘定もあはぬ時が來るので、さうなると已を得ず、他に拓殖の必要が起つて參り、もしその拓殖する餘地がなくば、海外出稼ぎの他、致し方がござりませぬ。

かゝる場合に、若し餘地があれば餘地に拓殖をはじめるのであります。もしその餘地が澤山にありましたならば、それ〴〵の方針をとつて拓殖にかゝらんければなりませぬ、餘地が尠いならば、格別の方針といふものは無くても宜しい。そこで、この廣大なる餘り地に拓殖をやるに、いかなる方針をとるべきかといふに今日の新開國、卽ち拓殖地を多く有して居る國が、大袈裟に拓殖をして居る樣を見ますると、多くはどこにもつかひどこのない人間か、くひつめ者などがゆきますので、それらが未熟の知識を以て至つて荒つぽく、鳥渡見れば不經濟千萬な耕作を致しまする。一例をあぐれば、鑛山を發見してもさうで、最も鑛物の分量の餘計はいつて居る鏈を選り拔きまして、至つて荒つぽく鑛物を拔き取ります、卽ち鑛物の分量の少い鏈は、みす〳〵目の前に横はつて居ても棄てゝ顧みませぬ。又精練するにも至つて大ざつぱにやつて、金屬の量が減つても構はずドシ〳〵やりまする。かくの如くして、先へ先へと進んでゆくので

あります。故に一本道路が出來れば、その道路近傍だけの拓殖で、横道へは、さう深くはいつて居りませぬ、鐵道線路が敷けたにしても、その兩側のみは拓殖せられますが、わき道へははいりませぬ、唯先へ先へとゆきます。かういふのが宏大なる餘り地面を拓殖する拓殖法で、大きな經濟上では、かうせねばあはぬ筈のものであります。

しかしかやうな風に拓殖してゆきます地方は、土地があまつて、人口が足りませぬから、結婚はむやみに行はれ、人口增殖の程度が甚く、又新たにはいつて來る人も多いから、隨つて口もとの方から、段々と本國同樣に人口が稠密になつて參ります。故に本國より遠ざかるに隨つて人口は疎になるので、土地拓殖の方も本國より遠ざかるに隨つて開墾が荒っぽくなります。つまりこのあまり地面を追々とかういふ風に拓殖し了るので、それが拓殖し了つて本國同樣の姿となれば、又追々と他に新領地をさがすのであります。ドイツが頻りに新領地をさがし、アメリカ合衆國がモンロー主義を棄てゝ帝國主義を取つて參つたのもこの爲であります。この餘り地面拓殖の方針は、明瞭に最小抵抗力の方向に進むといふことは、鳥渡考へればわかりますする。

かくの如きは政治地理學が敎へてくれる所の、實際に今日の國々が採つてる方針でありますが、この方針が果して古代に行はれたものであるかといふことを、太古の時代の歷史に當てはめて見ませう。人情は、時の古今東西を問はず、均一に働くべき筈のものであります。もつとも、周圍の事情に於て變化なしといふことを假定してゞありますが、周圍の事情が變れば、多少之に應じて內部にも變化を來さねばならぬが、周圍の事情さへ違はねば、人間は古今東西同一の働をするものと、豫じめきめて置きます。

さて我等の祖先がもと南方に居まして、段々北に向つて拓殖して來たことは明らかにわかつて居ることでありますが、上野下野より北、古へ所謂毛野の國よりして北へ進みまして、遂には陸奧出羽の大地方を拓殖致したのは、我等の祖先にとりましては、とりも直さずちっぽけな本國が己に狹くなりました爲めに、北方に莫大な地面を拓殖し始めたことなのであります。もつともその頃の文化の程度、財政の實況では、とても我等が鳥渡計畫しさうな樣なことは出來ぬので、いづれ格別の資本もいらず、格別の人足をも要しない、先以て小規模の、やり易い處を拓殖しかゝつたのに相違ないので、先手近い話を申さうならば、秩父の山は非常に古くより開けて居ると思はれますするに、之に反して荒漠たる武藏野は、長い間棄て置きになつて居まして、我等の知つて居ります所では、この大平原の拓殖を始めたのは、北條泰時であります。今のあたまで考へて見れば實にわからぬことで、この頃までこの大平原を棄て置いたといふは、驛路の關係もありますが、つまりいかに經濟界が小で、當時の經濟がちっぽけであつたかがわ

かります。畢竟するに、人口も少く、さほど窮屈に思はなかつたからであります。

そこで上野下野にしました所で、いづれ河よりの處は後にして山よりの處より拓殖しかゝつたのであらうと思はれます。山よりの所であれば、水は自由なり、木材は澤山あり、家屋を建築するにも水利をはかるにも極くたやすくゆくからして開墾し易いのです。道路を築きまするに就ても、水の溢るゝ心配は無し、工事は少々面倒かは知りませぬが、却つて自然と思ひましたであります。しかし別に大きなあばれ川もなし、拓殖をするにも、山の半腹に次で、たやすい所であれば、平野の拓殖を起すと同時に、道路をもやはり平野に布いた筈であります。上野下野の國は、武藏からはいるのが天然の道なので、今の中山道の方も、日光街道の方も、自然の往還であるといはねばなりませぬ。されば毛野の國の拓殖を思ひ附いたことは、隨分古い時代でなくてならぬ筈であります。信濃を經て碓氷から下つて來るといふのは、國史の記す如く餘程後世のことであるべきなんです。この上野下野の土地さへ拓殖が出來れば、これと同時に常陸の國の拓殖も並んで行はるゝわけであります。と申すのは下野と常陸とは地勢が互に隣り合ひになつて居まして、常陸より下野に出るのも便利でありますし、下野より常陸へ出るのも同斷便利であります。それですから、下野は、あるひは常陸の方より拓殖した部分があるかも知れませぬ。とにかく上野、下野、常陸の地方が、一通り拓殖が出來れば、陸奥の方へ進んでゆかうとするのは、自然の勢であります。

この三つの國の拓殖が、一通りいつ頃出來上つたかを知るのは、甚だ困難なることであります。かの舊事紀の國造本紀などいふものがありまして舊事紀全體は僞書であるが、國造本紀だけは眞物らしいと、よく引く人はありますが、さて歴史地理學の眼で見ればあまりあてになる書籍ではありませぬ。何とかこれは他に方法を採らねばならぬ。もとアイヌが跋扈して居たらしい天龍川以北の地は、存外早くより我等の祖先の力で大體拓殖されて居まして、詳なることは固よりわかりませぬが、應神天皇の御世にさへも、陸奥の入口の處までは、大凡どういふ國である位のことは、人々が多少心得て居た樣であります。無論その時分には、日本人はその邊にはまだ極少(ごくすこし)より居らず、アイヌの巢窟でありましたらうけれども、とにかく多少は踏査したものがあつたらしく、で、少しはわかつて居たらしい。我等が今茲にさしづめ知りたいと考へる所の要點は、白河の關と菊多の關(菊多の關とは俗に申す勿來の關の本名であります)との置かれた年代を知りたいといふことなので、この年代がわかれば、毛野の國常陸の國の拓殖の大體出來上つた時代がわかると申すのです。その理由を申すに、白河の關も菊多の關も共に上に申上る三ケ國よりして陸奥國へはいらうとする要點に當つて居るので、後世の所謂山道(せんだう)と海道(かいだう)との要所を押へて居るのであります、陸奥からして南へ往かうと思へば、先づこの二つの道に因るが便利なので、他にあ

るのは無下の山道で甚だむつかしい道であります。こゝに關を置いてありましたのは、どういふ目的であるかといふに、この事は明瞭にわかつて居るのであります、陸奥國のアイヌ共が南へ出ることの出來ぬ樣に、こゝに喰ひ止める爲なのであります、出羽方面のアイヌもやはりこの邊へ廻つて南の方へ出やうと思つたものか、出羽の方のアイヌ共も、やはりこの二つの關所を通ることがならぬことになつて居りまする。それで關といへば必らず關の取締規則があります、そのための法令は備はつて居るのであるのに、白河の關や菊多の關につきましては一向法令がありませんので、陸奥出羽の方面を鎭撫する任に當つて居ました軍隊の長官が指揮して、申さば自分の任意に規則をきめて守らせて置いたらしいので、いはゞ規則も何もない、武力一遍で、無理に通らうとするアイヌ共あれば、片端から討伐するといふのであつたらしい。

この關所を置いた年代は、幸にして傳つて居ります、卽ち承和二年を距ること四百何年といふの昔である。承和二年と申すのはキリスト紀元にして八百三十五年であります、それより四百何年といふ昔であれば、ざつとキリスト紀元の四百年餘の頃に置いたものであるのです。キリスト紀元の四百年餘といふと、頗る古いでして、日本紀の年だてに據りますれば、履中、反正、允恭三朝の間に當ります。しかし日本紀の年だては既に古くより史家の間に議論のあることなので、一概に日本紀に書いてある通りを信ずるわけには參らぬからして、疑ふ人もあるの

であるが、疑つて見ても仁德、履中二朝の間であります。國史とシナ史と韓史とを對照しますに、景行、成務二朝の時代は、到底明にはわかりませぬが、恐らく西晉より東晉へかけての頃らしく思はれまする、仲哀天皇は勿論東晉で、應神天皇の年代は、大抵わかりますが、先づ東晉の孝武帝と同時代と見て置けば宜しい、引續いて仁德天皇は東晉の末に當ります、履中、反正、允恭、安康の四朝は劉宋の代、雄略天皇は蕭齊の代に當ります。要するに景行天皇より推古天皇までは大略六朝の代でありますから、常陸、下野、上野三國の荒墾には、七八十年より懸つて居らんわけです。この年代は要するに大した誤りはないに違ひない。既に應神天皇の御世に、陸奥海道の入口に住つて居るアイヌ等が悉く朝貢といふことになつて居りまするで、その次の御世の仁德天皇の時に、毛野の國、常陸の國が一通り拓殖されて、人民を保護する爲に北のはいり口に關所を置いて、アイヌ等の亂暴を防いだといふことは、尤至極に思はれまする。それですから我等は仁德天皇の御世に、既にこの關所より南の地が、一通り拓殖せられたとするのであります、さうせぬと話の辻褄があはぬのであります。

應神天皇の御世には、まだこの邊は鍬下であつたのでせう、景行天皇の晩年に、東國久しく無事といふ記事が日本紀に出て居りまする、これは勿論後の事を申したのであるが、いかにもこの頃東國開墾の事を思立つたのでありませう、久しく無事といふのは、武力を以てアイヌ共

をたゝき附けてあたまを下げて來れば親切に取扱つてやる、あばれゝば討伐を加へる、それも大抵なことなら見て見ぬふり、聞いて聞かぬふりで、今の臺灣の生蕃の如く、ひどい事をすれば、已むを得ず討伐するが、さもなくば棄て置くといふ方針であつたやうである。されば皆務天皇の頃より敵前に拓殖を始めて、徐むろに事業が擧つて來て、遂に仁德天皇の御世に一通り固まつたと見て、實際の事實とは、ひどいかはりはないと思はれまする。もつともかくの如きは荒ごなしの拓殖で、所謂大袈裟な荒つぽい開墾で、わき道などは勿論皆無開けて居ますまい、本通り一本だけでせう。かくの如くして二つの關所の南の方が、あらましにしてもとにかく拓殖が出來たなら、これと同時に移住民は、尙北部山道の方へはいつたに相違ない、海道の方へはいつたとてつまらないのであります、もと〳〵拓殖の功のあがる樣な地が少く、海道のアイヌは非常に猖獗でありましたし、とても少數の日本人が往つたとて、駕御も何も出來るやからでなかつたからして、今の磐城方面は、極く後世まで政府は棄てゝ置いたらしい、まづ山道の方へ進んだのでありませう。山道であれば差詰今の岩代の國の東部、卽ち阿武隈川の兩側の山腹に沿うて北へ進んだものと見なければなりませぬ、さうしてやがて今の二本松以南の地が開ければ、無論これと同時に會津の盆地へも侵入した筈であります、そこでどうしても陸奥の國といふものを先づ二本松以南の地に於て取り敢へず建てた筈なんである。福島の原野を拓殖するといふことは、當時の日本人の程度では困難なことであつたらうと思はれるから、恐らくは棄てゝ置いたでありませう。やがてさうすれば米澤方面の踏査も屆きませうし、踏査が屆けば拓殖も始まる、又一方に於ては越河を越えて宮城の原野へ出ることも出來るのである。

たしかにわかつて居る陸奥の岩沼の國府は、餘程後世に置いたもので、それより以前に陸奥の國府といふものが、今の福島縣內に是非二度位は置き換へられたことであらうと想像致すのであります。と申すのは陸奥の入口に關を置いたといふことは、取りも直さず陸奥の入口地方に多少開墾の進んで居たことを意味しまする上に、八世紀の初に當りまする所の和銅の初に至りまして、羽前の東部並に陸前の南部は既に陸奥より進んであらかた拓殖せられ、陸中のアイヌも幾分か屈伏しかけた證據がありますから、阿武隈川の上流と猪苗代湖盆地との拓殖に百年を費し、最上川上流の拓殖に又百年懸り、七北田川と白石川との間に更に百年つぶれたと見ても、ひどい間違ではあるまいと思はれまする。かう見ますると、この三百年の間に國府を二度位前へ進めた筈であります。さもなければ、人民が非常に困つた筈なんです。これは勿論拓殖の進みかたを、假りに古今同一の程度を以て進んだものとしてゞありまして、無論絕えずアイヌ共の抵抗を擊退しながら進んでゆくものと思ふのです。

又かくの如く人民を移住せしめて、敵前に拓殖せしめやうといふのでありますれば、是非とも

移住民を保護する爲の城寨がいります、卽ち當時の言葉で柵といふものを置いてありまして、アイヌ共が大擧して來た時分には、柵の中へ逃れしめて、一同籠城するやうに用意をして居らんければ、拓殖は出來なかつたのであります。卽ち王朝時代に於ける出羽の柵でも秋田の柵でも、雄勝の柵でも、玉造の柵でも、膽澤の柵でも、伊治の柵でも、桃生の柵でも、何れも皆かういふ目的の爲に置いてあつたものとより思はれぬのであります。一は人民保護の爲、二は軍隊聯絡のため、三は糧食兵器運搬の掩護の爲の城寨でありませう。かういふ城寨を、是非とも、越河以南に於て搜さねばならんのであります。柵は國府とは違ひます、今申上げる通りの性質のものでありますからして、是非遠く望むに足る所で、交通の要衝に當つて居て、さうして堅牢なる、守れる場所でなくてはなりませぬ。又非常の際には城下の人民を籠城させるのであるから、規模が非常に大きくなくてはなりませぬ、又出入に便でなければなりませぬから、後世の樣に濫りに高い山の上へ置いても役に立ちますまい。又當時は井戸を堀るといふ藝を知りませぬから、城內に水の出る泉か谷かゞなくばなりませぬ。要するにいろ〳〵の條件を具へねば柵の地にはなりませぬ、かういふ處があるかを越河以南に求めて居りまするが、中々恰好なのが見當りませぬ。

國府は要害の地でなくとも原野の間であらうが、山腹であらうが、最も開けた處に置いてあつた筈であります、つまり人民輻輳の中心に置いてあつた筈であります。隨つて國府と柵とは、必らずしも同じ場所にあつたのではございませぬ。しかしこの岩沼の國府以前の陸奥の國府は何處であつたかといふことをいろ〳〵考へて居ますが、いまだに定說を得ぬのであります。とにかく郡山、須賀川あたりでないかと想像はして居ります。これはしかし國府のことであります、柵ではござりませぬ、越河以南の地にどうも柵を置いたらしい然るべき場所を搜し當てませぬので、據なく越河より北の地方に於て然るべき柵の場所がありゃせんかといろ〳〵しらべて居る最中であります。卽ち越河より北に於てアイヌの侵入を喰ひ止めて置いて、越河以南は行政廳だけといふことであつたかと思はれまするが、勿論これも想像であります。それも陸奥の拓殖をして居た頃ではとても越河に柵を置くことは出來ませぬから、どこかで守つたでありませうが、何處で守つたかは定說がまだ無いのであります。政治地理學をつれて來まして、史學の研究の助に使ふといふのは、上に申上げるやうな場合であります。

その他經濟地理學、物理地理學などの例をあげるのですけれども、こゝには省きます。

第四　年代學

年代學と玆に申したのはクロノロジイの譯語で、原語の通りに譯するならば時學と申すべき

ものなのでありますが、時の學問では何樣意味がよくわかりませぬから少しこれを俗解して年代學と申すのであります。原名の意味の通りに、歷史にあらはるゝ事柄の起りましたる時を確めるのを目的として居る科學でありまして、とりも直さず星學を史學に應用したものであります、卽ち星學の一應用科と見て宜しいのである。

然るに歷史にあらはれる事柄は、多く何年と年をあげて書いてあるものでありましてこの年の數へ方は古今の國々によりまして曆と申していろ〳〵の數へ方が出來て居るので、自然曆のことも年代學に於て研究せねばならぬこととなります。年とか月とか日とかいふものが歷史に委しくあがつて居らぬならば、その事柄に伴つて起つた所の星學上の事柄よりして、今日より推歩して、その年月日をきめることが出來る。それで年代學は二つの部分より成り立つことになります、一部は星學の原則を利用しまして、過去の年代を推歩すること、一部は古今の各國に行はれましたる所の曆法を研究しまして、その種々の曆の互の關係、編成の方法、換算の方法などを研究しなければなりませぬ。この曆の方の研究を特に專門と致して居る學問が、別に狹いものがありまして、これのみを以ても一の學問を建てることが出來ます、卽ち曆學とこれを申します。從來曆學の方は段々研究してくれる人がありまして隨分著述も類の多いことでございますするし、又必要なる所の對曆表もそれ〴〵ございまして、中には世間の人の隨分よく知

つて居る品もあるのであります。然る處他の一部の推歩の方になりますると、これまでの史家が一向心得ませぬことなので、中には勿論多少心得た人もないではないが、概して申すと、殆んど史家のあたまに無かつたといふて宜しい。畢竟ずる所、史學を專門とする人が星學などいふ科學をあたまから知らなんだからでありませう。

しかし今日の史學の程度より見れば、古今各國に行はれたる曆法をそれ〴〵比較研究して觀察して對照することは勿論必要なることは明でありますが、尙星學上の原則よりして、何年何月何時何分まで出ることがわかつて居るのを、これを學ばぬわけには參らぬので、むしろこの推歩の方に力を盡して事實を正確にしたいと我等は思ふので、こゝに年代學といふは曆學の方よりも、むしろ推歩の方に重きを置きたいと兼々思ふて居ることであります。かくの如き年代學の必要などは、今更申す迄もないと思ふから、別に說明致しませぬが、次に實例をあげて、いかにも大切なものなることを、たしかに證明致しませう。

ギリシアの古代に、ペルシア王のクセルクセスが二百萬と號する大軍を率ゐて、一擧にギリシアを滅ぼさうとした時に、スパルタ王のレオニダスが、わづか數百の手勢を率ゐて、北よりギリシア本國には、いつて參る關門たる所のテルモピレの嶮阻を守つて、數日の間王の大兵をくひ止めて、遂に守りきれなくなつて、一人殘らず、茲に花々しく討死した話があります。後世

までいづくの國の小學校におきましても教員が得意になつて子供に敎へる事實なのであります。

このテルモピレの地理のことに就ては、今委しくは申しませぬが、要するに古は一方は山の斷層となつた絶壁で、一方は海に落ちるがけでがけの腹に當つた所に幅七八間の一本の細い道があつて、そこへ溫泉が湧き出まするので、この溫泉のぬめりの爲に、細い岩道が滑らかになつて、一人あるいても非常にむつかしい場所であつたのであります。テルモピレといふのは、卽ちこの溫泉から名を取つたので、テルモは溫泉、ピレは門の義であるのです、はいり口が狹い故に門と申したのです。然し今は地崩や川泥の爲に地理が非常に變つてしまいまして古の面影はありませぬ。現在のところ山より濱まで次第に下つて二十丁計あるのです。

この有名なる古代の忠戰は、いかゞ致したのか、歷史家のヘロドトスが、その年を書いて置きませぬ。それが爲めに何月幾日は申すに及ばず、何年といふことさへもわからぬのである。それ故に强いて疑へば、ヘロドトスが筆に任せて拵らへた話でないかといふ疑も起さうと思へば起されぬのではありませぬ。しかし昔から今までもこのテルモピレの戰は疑はぬ例になつて居るのである、又事實敵勢がはいつて來る場合には防がんならん場所でありまするから、ともかく一度は玆で防いだらうと軍事上からも思はれまする故に、我等はこの花々しい忠戰を信ず

ることと致します。信ずるとすれば何年何月何日のことか、どうか知りたいことだが、月日が知れねば、せめては年なりと知りたいのである、幸に年を知るに屆竟の材料がありまする。それはヘロドトスは無我夢中に書いたのであらうが、ペルシア王の出征に關聯して重大なる星學上の事柄があがつて居ります。

ヘロドトスの歷史にかういふ記事があるのです。大意を申しませうが、ヘレスポントの橋も既に出來上がり、アトス山の工事（アトス山の工事と申すのは、アトス山は半島になつて突き出て居る山でありますからといふので、その半島になつて居る頸の所へ運河を掘つたといふので、こゝにいふ工事とは、卽ちその運河開通の工事をいふのであります）も成りましたからして、愈進發といふことになつたのであります。軍隊はサルデス（もとリヂアの都であつたので、當時はペルシアの鎭臺でありました。）に冬籠りを致して居つたのでありまするが、この工事竣成の報告を得まして春の初に、アビドスに向つて行軍を始めました。然る處にこの進發の時に方つて、これまで一點曇りなく照り輝いて居ましたる所の大陽が忽ちにして光を失うて、眞暗闇となつたのであります。そこでペルシア王クセルクセス非常に驚かれて、占者を召し寄せて、この出來事に就いて意見を御問ひになつたのである、さうしまするといふと占者共の申すには、天はギリシア人よりその擁護を去られたのであります、と申すのは、太陽はギリシアの守護神でありまして、月はペルシアの守護神であります、と申しました、卽ち月が日を蔽ふ事實を云つたのでありませう。この答によりまして、王は

じめて安堵せられて、愈進發あつたといふことであります。

このヘロドトスの記事は、テルモピレの戰の年ではないが、とにかくもサルデス進發の年をたしかめるものである。よつて玆にヘロドトスの述べて置く所の事情を利用しましてサルデス進發の年月日時刻を推歩して見ませう。

この日食の起つたのは、春の初である、又他の我等の知つて居る所の事柄からして推すに、大凡キリスト紀元前四百八十年頃の事らしい。そこでキリスト紀元前四百八十年頃に、小アジアに於て能く見えた皆既日食があるか無いか、そのしらべを致して見ませう。それにはそれぞれ本があるのでして、その道の本によつてしらべて見まするに、四百八十年頃に、中心線が小アジア又は小アジア附近を通過して居る所の皆既日食は二つよりありませぬ。即ち四百八十八年の九月一日のと、四百六十三年の四月三十日のとよりありませぬ、しかし四百八十八年に致せ、四百六十三年に致せ、餘り四百八十年と違ひますから、どうもこの二つらしくないのであります。かつは問題に上つて居る日食は春の初でありまして、四月とか九月とかいふ筈ではないのである、かた〳〵この二つのものではない筈であります。それでさう致しますと、ヘロドトスの記事はちと仰山なので、全く暗くなつたのではなく、餘程暗くなつたゞけといふのであらう、察する所土地の人が、ちと仰山にいふたのをヘロドトスは眞に受けて、その通り書いたのであらう、それで全くの皆既日食でなくとも、餘程はげしい日食が四百八十年頃にありやせんかと見まするに、二つ氣のつくのがありまする。

四百七十八年の二月十七日のが、その一つで、その中心線の通過して居る所を見まするに、先カナダの大西洋海岸に、虧けながら昇りまして、大洋を通過してアフリカのマロッコ、アルジェリア、シチリアの島を通過して、トルコ領のアルバニア州に於て虧けながら正午となつて、ルメリア、黑海、クリムの半島などを通りまして、シベリアのトボルスク附近に至つて、虧けながら沈みます。今一つのは、四百八十一年の四月の十九日の日食でありまして、これはアフリカのソマリ海岸の所で虧けながら昇りまして、前後インドを通過して、シナの江西省邊で虧けながら正午となつて、本邦の九州を通過して太平洋の眞中に至つて虧けながら沈みます。どちらか、この中の一つでありませうが、四百八十一年の日食は、四月の十九日でありますから、春の初まりと申すに合ひませぬ、四百七十八年のは、二月の十七日でありまするから、春の初と申すのに至極合ふのです。そこで取敢へず四百七十八年の二月十七日の日食をしらべて見ませうが、これは環狀日食であります。計算をして見まするに、サルデスに於ける虧初は午前十時二十一分で、食甚は十一時五十三分で、復圓が一時二十九分である、而して食分は十一分二厘である、これは何樣殆んど皆既に近いです、十二分であれば即ち皆既なのであるからして、

餘程甚しい日食である、俗人が眞暗闇と心得たも無理ならぬことと思はれまする。

この日食にも拘はらず、勇みに勇んで王は進發されたこととすれば、大凡正午のサルデス進發と相成りませう。さうしてテルモピレの戰は、いづれこの年内のことでありまするので、卽ちキリスト紀元前の四百七十八年に相違ないのでありまする。これでこの有名なる忠戰の年がどうやらかうやらわかつたので、不幸にも月や日はわからんのでありまする。これは日食の記事を利用して推步したる所の結果であるのです。

今一つこの類の實例を擧げませう。シナの春秋は孔子の作といふことで、昔から今に至りまするまで、誰もこれを疑つたものはなく、誰も全く確實なる史料であると心得て居ることであります。しかし孔子の作なりといふ傳來であつた所で、一概にこの傳來を信ずるといふわけには參りませぬ、尠くとも傳來が確實であるか、どうかといふしらべをするだけの必要があるのです、しらべて見て愈傳來の通りに相違なしといふ證據があがれば、始めて信ずべきでありまする。何樣春秋は、その書き方から致しましても、又その註釋、所謂傳から見ましても、一見して僞書とは思はれぬ書でありまする。しかし何か、たしかな證據を押へたいものなので、たとへ確實であつた所で、どれだけの程度まで確實なるかといふことは、尙疑問なのでありまする、十分確實か、一部分確實か、あるひは徹頭徹尾間違ひだらけか、その邊のことも篤としらべんければ、史料として引くわけには參らんのである、所謂史料としてのねうちをきめることなんです、よつてこれから一番試驗をして見ませう。

春秋の中に澤山に日食のことが書いてあります。讀んでゆきますと、春秋の日食の記事の中には、晦日の日食の記事があつたり、二日の日食の記事があつたりして、何樣當時のシナ人は、まだ日食の原因を知らない、唯見たばかりで、星學の理論などは、皆無知らなんだといふことが、すぐわかります、さもなくばこんな馬鹿馬鹿しい間違を書かう筈がないのである、星學の理論に暗いために、當時の曆は頗る杜撰なものであつたことは、すぐわかるのである。しかしともかくも歷々と日食の記事が澤山にあがつて居るから、この日食は恐く實際見て書いたのであらう、見て書いたものなら、さう間違つて居る筈がないのであります。星學の理論を知らぬ頃でありますから、推步して書いた筈がない、見て書いたに相違ない、故に偶々雨降つて見えねば知らずに居つたでありませう、その證據は春秋中には、見えた筈の日食の記事が、多く漏れて居る。そこで先春秋中に見える二つの重なる日食を推步して見ませうが、古い所で、桓公の三年秋七月壬辰朔に、日食があつて、皆既であつたのである。この推步をやつて見まするに、先魯の都の曲阜、卽ち今の山東省の兗州府を觀測點として、その位置を東經百十八度、北緯三十六度と見做しまして、計算して見まするに、この日食はキリスト紀元前七百九年の七月十七

日でありまして、虧初の時刻は午後二時十九分であつて、食甚の時刻は三時三十九分で、復圓は四時四十七分であります、それで食甚の時の食分は十二分で、全く皆既でありました。又少し後になりまして、宣公の時代に、又ひどい日食があります、これは宣公の八年秋七月甲子の日の日食で、やはり皆既であつたといふ記事であります。これもやはり兖州府を當時の觀測點であつたと見まして計算して見まするに、キリスト紀元前六百一年九月廿日の日食でありまして、虧初の時刻は午後二時四十三分、食甚の時刻は三時三十五分で、復圓の時刻は四時廿三分であります、それで食甚の時の食分は十一分でありまして、全くの皆既ではありませぬが、餘程ひどい日食であつたに違ひないのです。

この二つの例によつて見ますると、春秋の日食の記事は甚だ正確なものでありまして、史官が日食のある度毎に見届けまして、書きとめて置いたといふことが疑ない次第であります。かやうなる記錄を種子（たね）にして、孔子が春秋を編纂されたと認めんければなりませぬ。この推歩の結果と致しまして、獨り春秋の正確なることがわかるのみならず、その上に、まだ周の正は何月であつたといふこともわかるのであります、この宣公八年の月食の日附を見まするに、ユリウス曆（ケーザルの改曆）と當時の曆と、日附のうちかたが三箇月近く違つて居ります、今日の大陰曆と較（くら）べて見ますれば、一箇月位の相違よりない筈のユリウス曆なのでありますから、さすれば疑もなく當時の周の正は、今日の樣に一月を以て正としたのではないに違ひない、無論十一月を以て正月としたと見ませんければ勘定が合ひませぬ。もと周は何月に年の初を置いたといふことは、古くより議論のあることゝ聞きましたが、全體議論も何もあるべき筈でないので、かく推歩して見れば、忽ちにわかり切つた話なんであります。

桓公三年の皆既日食は普通のユリウス曆と比べまして、僅かに十六日の差よりありませぬが、これは勿論閏月のあたりでございませう。かやうに申す理由は次の通であるのです。

桓公の三年七月の朔日に日食があつたのでありますから、この朔日は確かに新月の日で、曆の上より申さうならば朔であつたことは勿論のことである、曆に決して誤はないのであります。然る處が、この日はユリウス曆に直して七月の十七日である、そこで七月の中節（ちゅうせつ）、卽ち處暑は桓公の三年に、いつはいつたのであるか推歩して見まするに、この年卽ちキリスト紀元前七百九年の八月三十日二十時三十五分であります。もつともこれは所謂世界時で、グリニチを標準として申したのである。さすれば曲阜の經度百十八度を時差に直して七時間と五十二分と見ますれば、グリニチの二十時三十五分（これは星學上の時間で通俗にいへば三十一日午前八時三十五分）に相當致します。この七月中節なる處暑は、通常の場合に於ては七月の中頃に來ねばならんもので、曆學の理想からいふならば、十四五日の中に欲（ほ）しいのであります、然る

にこの場合におきましては秋七月の朔卽ち一日を去りまずること四十五日目の八月三十日であります。當時の曆の編纂方によりますれば、優に一箇月半（春秋時代の二箇月は五十九日）あります。又八月の中節でありまする秋分が、桓公の三年には、いつはいつたか推歩して見まするに、同年（キリスト紀元前七百九年）の九月二十九日二十二時五十分（通俗の三十日午前十時五十分）であります。これは世界時でありまするで、前例によりまして、曲阜の時刻に直しまするならば、十四時五十八分（通俗の三十日午前二時五十八分）となりまして、七月の朔卽ち一日を去ること七十五日さきであります。當時の曆の編纂方では二箇月半をとりまして宜しいのであります。今春秋の七月は後世の五月であると致しますれば、春秋の七月朔より處暑まで二箇月半、秋分まで三箇月半あるはずでありますのに、この場合ではいづれも一箇月づゝ足りませぬ。

この異例を説明致しますには、このあたりに中節なしの月卽ち所謂閏月がありまして、一つ月の名義で二箇月分の日數を一度に取つて行きましたので一箇月の不足ができたものと見ませんければ如何とも説明の仕樣がないのである、言葉を換へていふならば、宣公八年の例の時に申したる如くに十一月を以て正月としたと見まするのが數理上然るべきこととなります。かやうに致しまして、春秋に出て居る所の日食を片端から推歩しまして、ユリウス曆と春秋の曆とを比べてゆきまするといふと、春秋に書いてある出來事の年代は、極めて正確に定まります。

かやうな事でも致しませんければ、春秋の記事を十分確實なる月日に箝めまする事は出來ませぬ。かやうにして見まするといふと、春秋はいかにも確實なる記錄でありまして、さすが孔子の編纂と申すだけのねうちがある、又併せて魯の政府が歷代置きましたる史官も、甚だ愼んで職務をつくしたといふこともわかるのであります。

推歩の方はこの二つの例に止めておきまして、次に違つた曆を互に換算する方の實例を出しませう。九世紀の中頃、卽ち唐の宣宗以後になりますと、アラビアの商人やら旅行家などやらがシナの南方へ參りまして、いろ〳〵實地に見聞したことを書きました紀行又は見聞錄の樣な類の書籍が續々ございまして、幸に大抵傳はつて居りまする。例を擧げればソリマンの紀行は大中五年頃に成りましたもので、幸に今も現存して居りまするが、傳はつて居りまするものでは、これが最古のアラビア商人の見聞錄であります。これより引續きまして續々ございまして、唐末の大亂から五代の亂世にかけまして、シナの事情が、追々アラビア人の書きました書類からわかるのであります。

このアラビア商人等が重に集つて居りましたのは彼等がカンフと申した處なんで、南洋諸國の船舶の輻湊しましたる場所で、アラビアの貨物の集散地で、アラビア商人等が重に荷を卸しましたる都會である。然るところこのカンフといふのは何處であらうかといふことは、ヨーロ

バに於て歴史地理學を研究する人々がいろ〳〵に説を立てまする事なのですが、つまりまだ定説がない姿になつて居るに拘らず、我等の見る所では、直ぐにこのカンフを何處であるかといふことをきめることが出來るのである。

それはアラビア人の見聞錄の樣なものに、よく書いてありまする話で、バンシォワと申すものが謀叛を起しまして、ヘヂラ紀元ムハメッド紀元二百六十四年にこのカンフを陷れまして、その時分にムハメッド敎徒やらユダヤ人やらキリスト敎徒やらペルシア人やらなどを十二萬人まで屠りまして、ひどいことをした記事がありまする。尙これに引續きまして、五代の大亂で、到底貿易も何も立ちゆきませんので、アラビア商人等はカンフを立ち去つてしまひまして、カンフの貿易は絕え果てた姿も歴々書いてあります。そこでこのバンシォワと申すのはシナ人の誰を訛つてかやうに申すのか、研究して見れば考へ當てられることなんであります。もつともこのバンシォワをヤンシォワと傳へて居る書もあるですけれども、ヤンは疑もなくバンの書きあやまりであります、アラビア假名のヤとバとは非常によく似て居ますから、固有名詞のこととて、うっかり書き損こねたので、無論バンシォワの方が宜いに違ひない。そこでヘヂラ紀元の二百六十四年と申すのは、キリスト紀元に致しまして何年であるかと見まするに、その初日は八百七十七年七月十三日であつて、その末日は翌年の九月の二日であります。ざつといへば八百七十七年から八百七十八年へ跨る一年であります。これをシナの方の年代で見ますると、唐の僖宗の乾符四年より五年に跨る一年であります。この頃にシナにおきまして、どういふ謀叛人が起つて居るかと見まするに、いかにもえらい謀叛人が出て居りまする、それは王仙芝と黃巢との兩人である。上に申すバンシォワは疑もなくこの兩人の中でありませうが、王仙芝の三字は、いかに讀みましてもバンシォワとは似寄りがございませぬ。之に反して黃巢の方は餘程バンシォワに近いです、卽ち黃巢の二字を今日のカントン音で讀んで見ますると、ホウァンチァオとなります。唐の頃のカントンの音は、さだめし今のカントンの音とは餘程違つて居りませうで、ホウァンチァオよりもバンシォワの方へ音が近かつたでありませう、又アラビア人はホウァとかチァとか申す樣な音は出ませんから、自分等の出せる一番近い音を採つた筈なんでもありまする、かたゝ〳〵バンシォワは黃巢のことであらうといふ想像は直ぐつきまする。

さてバンシォワを黃巢のことらしいと見れば、少しその事蹟をしらべて見なければなりませぬ。唐書の逆臣傳に委しい黃巢の傳がありますが、その最も入用なる所を拔萃すれば次の如くである。

黃巢曹州（山東省曹州府）冤句（縣名）人。世鬻鹽。富于貲。善擊劒騎射。稍通書記。辯給喜養亡命。咸通末（一六〇年頃）仍歲饑。盜興河南。乾符二年（同二六一年）濮（山東省濮州）名賊王仙芝亂長垣。有衆三千。殘曹濮二

州。……而巢喜亂。卽與羣從八人。募衆得數千人。以應仙芝。……巢方圍亳州（安徽省亳州）未下。君長（尙）弟讓率仙芝潰黨。歸巢。推巢爲王。號衝天大將軍。署拜官屬。驅河南山南之民十餘萬。掠淮南。建元王霸。……踰江西。破虔（江西省贛州府）吉（江西省吉安府）饒（江西省饒州府）信（江西省廣信府）等州。因刊山開道七百里。直趨建州（福建省建寧府）……時六年三月也（ヘヂラ紀元二。六五年第八月）。僥路圍福州（福建省福州府）。……入之焚室廬。殺人如蓺。……是時閩地諸州皆沒。……巢陷桂管（廣西省桂林府の知轄內十五州にして、廣州の西に在り）。進寇廣州（廣東省廣州府）。詔節度使李迢書。求表爲天平節度（鄆州に治す、鄆齊曹棣四州を管す）。又脅崔璆。言于朝。宰相鄭畋欲許之。盧攜田令孜執不可。巢又丐安南都護廣州節度使。書聞。右僕射于琮議。南海市舶利不貲。賊得益富而國用屈。乃拜巢率府率。巢見詔大詬。急攻廣州。執李迢。自號義軍都統。……其十月（ヘヂラ紀元二六六年第三月）巢據荆南。……

上に引きましたる所の記事より見ますれば、黃巢が廣州を圍みましたのは、乾符六年の三月より後で、十月より前であります。これをヘヂラ紀元に直しますると、二百六十五年の第八月より後で、二百六十六年の第三月より前に當りまする。さればアラビア人の見聞錄などに二百六十四年と申すのは一年早過ぎます、多分これはまたぎゝであつたが爲に、かやうに誤り傳へたのでありませう。何れにしても所謂バンシォワは黃巢であらうと思はれることは、殆んど誰も許すでありませう。又所謂カンフは何も廣州に限るまい、黃巢の荒した所は廣州に限らぬことで、現に閩地の町は皆ひどくやられたのではないかといふ說もありませうが、全く廣州に相違ないのである。

それは少ししらべればわかりますが、先づ黃巢は錢塘江にある有名な臨安を取つて居ませんですから、臨安は第一關係は無し、次で當時閩地に於て、アラビアの商人等が居さうな大きな町といへば何處であらうかといふに、差詰明州、台州、溫州、福州、泉州、漳州などでありませう。然るところがこの中の明州、台州、溫州の三つは、黃巢の亂暴を免れて居ります、所謂焚室廬殺人如蓺とか申して、ひどくやられたのは福州、泉州、漳州あたりであると見なければなりませんが、黃巢の時代にアラビア商人等が福州や泉州邊に居つたとは到底信ぜられんのであります。況して泉州の記事はアラビアの書物におきましても、餘程後になつて始めて出て參るのです。私の思ひます所では、福建省邊が外國商人の集り場所になりましたのは、南宋の紹興年間以後のことで、先づ十二世紀の上半以來と見て置いたら宜しからうと思うて居ります。さすれば黃巢の爲に、ひどい目に遇つた貿易港で、同時に南洋やらアラビアあたりから商人が澤山集つて來て居住して居た所といふのは廣州より外にありませぬ。唐の時代に廣州に外國貿易商が澤山集つて來て居りまして、シナに於て第一の貿易港であつたことは、他の書類を見ましてもよくわかります。さうして見まするといふと、愈以てアラビア人の所謂カンフは今のカントンのことで、バンシォワといふのは黃巢のことであるといふことは甚だ明らかでありませう。アラビヤ人がカントンをカンフと申したのは、當時シナ人自

らもカントンを廣府と申して居りましたから、卽ちその名をとりましたので、クヮンフといふべきなんですけれども、アラビア人には、そんな音が出んものですから江戸ッ兒流にカンフと云ふたのでありませう。アラビア曆とユリウス曆とシナ曆とを對照した結果、かやうなることとなるのであります。次に考古學を喚び出しませう。

第五　考古學

一般に考古學と申せば、有史以前有史以後と兩方に分れるので、人類學者から申すならば、最も重きを有史以前の部に置くでせうが、史家の眼より申せば、有史以前卽ち未だ歷史のない時代のものは到底役に立ちませんから顧る必要はないのであります。隨つて史家が單に考古學と申すときは、必らず有史以後の考古學を意味して居るのです。現にイタリアの大學あたりでは、考古學の講座が置いてありまするが、申す迄もなく有史以後の積りであるのです。

考古學は名稱の示す通り、古物を研究する學問でありまして、古物を研究して、時代によつてその製作、意匠、樣式、手法などに變遷のあることをしらべまして、これによりまして、いつの時代の社會の狀態がどういふものであつて、次の時代にはどういふ風にうつり換つて來たのかといふことを研究しまして、史家の參考に備へてくれます。こゝに古物と申すのは、いろ〳〵樣々の品物を

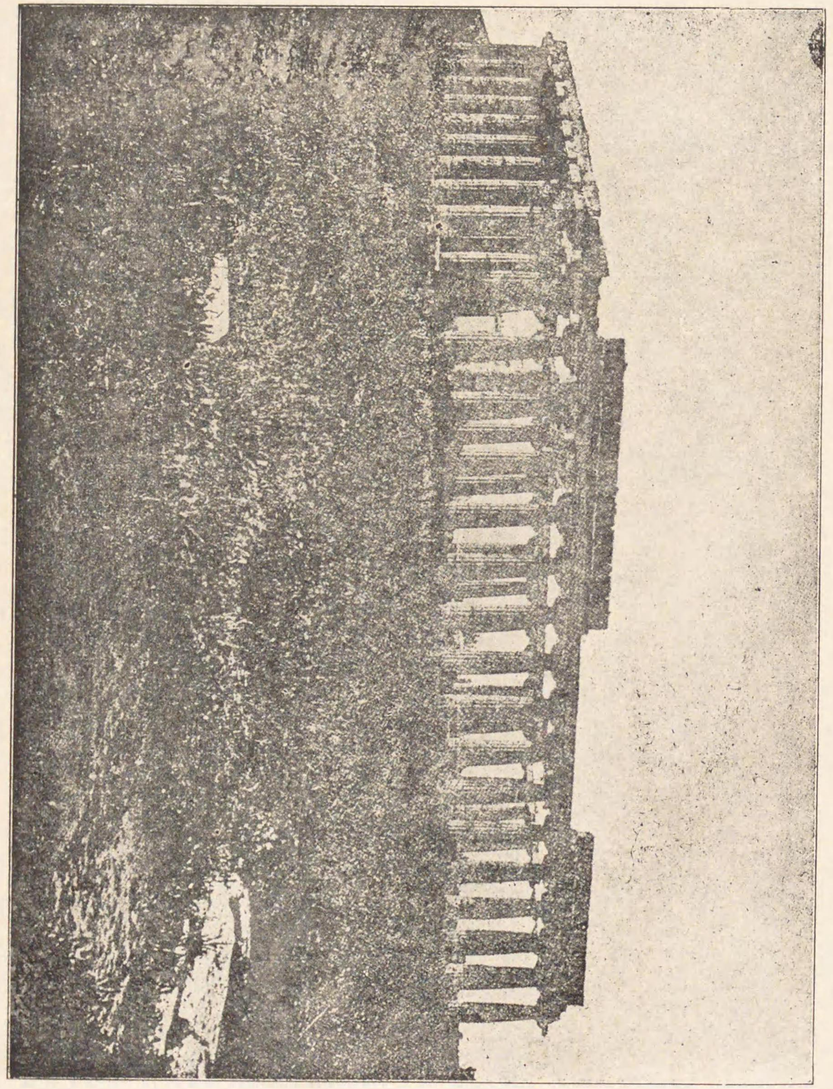
含んで居ることで、土木工事のすべての類、建築、道路、橋梁より初めまして、器具、武器、裝飾品に及び、又一方には儀式禮式などの變遷をも考へまする、卽ち精密に考古學を分けますれば、古土木學、古器學、有職學などに分れるべきなのでござりませう。普通には考古學と申せば何か古い器具の穿鑿であつて、申さば世の所謂骨董家あるひは道具屋の主人などが、この道の專門家であるかの如くに思つて居るですが、これは甚しい誤であります。イタリアの考古學者などは、無論古の器具類、武器類の穿鑿をも致しますが、それと同時に古の道路、橋梁、家屋、城寨その他百般の建築の研究をも致すのです。それ故に考古學者と申さば、半ば建築學の專門家であるかと思はれる位であります。

この考古學が何故に史學の補助學科となるかと申しまするに、後世の歷史を研究しますときには、幸にしまして記錄類とか古文書類とか申す種々の書籍類が手に入りまして、机の上で研究しまするのに比較的便利がありまするが、古代の歷史を研究しますには、かやうなる都合の宜い史料は殆んどないか、あるひは甚だ乏しいので、却つて傳說やら口碑やらなどが多いのであります。これですからして、世の机の上で史學を研究して居る人は、古代史の研究となりますると、礒と當惑致しまして、學術的態度をとることを忘れるといふわけではございませんが、眼界の狹い爲とることが出來ませんので、已むことを得ず古代から傳はるお話を列べまして、それで滿足致して居るのであ

ります。かくの如く書籍が頓と無いか、あるひはあつた所が當てにならぬ上代の歴史をしらべむとするときには、取り敢へず考古學を引き出して來て、これに意見を問ふべきなのであります。しかしこれは机の上では出來ませぬ。古器物の研究で濟みますることならば、博物館へ參つて實際の品物をよく睨みまして說を附ければよいことでありまするが、今ボロ〳〵になつて居る古の建築の類、纔かに橋杭が殘つて居り、又は柱の土臺が殘つて居る樣な橋梁、敷石が處處に殘つて居るやうな道路などを研究する必要を感じました場合には、せひとも草鞋がけで驅けずり廻りませんければ、しらべも何も出來るものではありませぬ。隨つてかやうなことをするには若いものでなくては駄目でありまして、老人がたが書齋に籠つて空に考へられてもとても出來得べき研究ではないのであります。

かやうな性質の學科である爲でありませう、とかくに我等の申す考古學は、あまり進步致しませんので、世の中にこの道に熱心なる人も澤山はございませぬ。しかしこの道の熱心者が澤山出來ませんといふと、到底古代史研究の成績は擧らんのでありまして、今日の日本の如き有樣では、まだ〳〵前途遼遠であります。例によりまして實例をあげまして、この科學の重要なるわけを申し述べます。

先づ古建築を史料とする實例を擧げませう。ギリシア建築各部の式には、申す迄もなくいろ〳〵

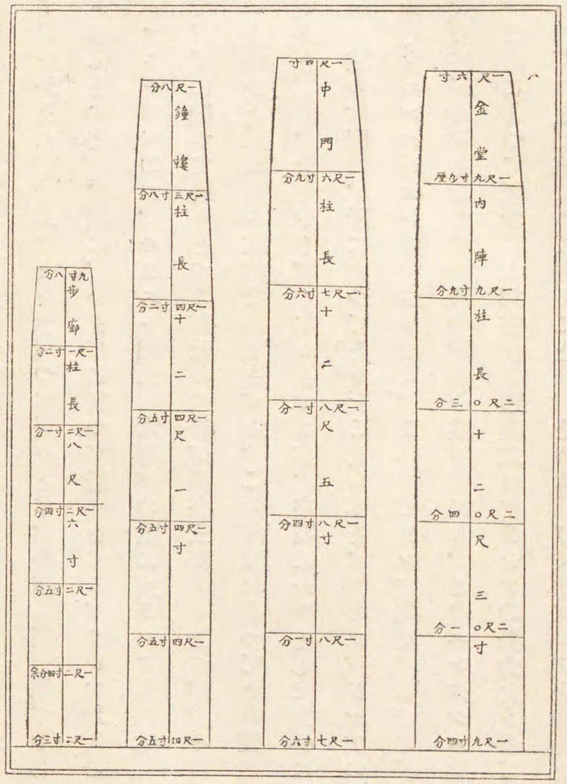


宮之ルーテーメーデ墟古トスペ

の様式がありまするが、その中に特に著しい着眼點となつて居る柱の様式がありまして、建築學の方ではやかましくいふことと承はつて居ります。今茲に圖を以て示しますのは、南イタリアのペストと申します古い廢墟に、いまだに殘つて居りまするギリシア時代の神社の名殘であります。このペストと申すのは、キリスト紀元前六百年の頃にギリシア人が建てましたポセイドニアと申した處で、現に殘つて居りまする神社の名殘が都合三軒ありますが、その中の一つで、三つの中で最も古いものかと思はれる建物でありまする。この圖面によつてその柱を御覽になると、底部より頭部に至りまして、やうやく細くなりまするが、中頃におきまして割合に太いことを御覽になる。かくの如く柱の輪廓に、所によつてそりをこしらへまするのはギリシアの柱制でありまして、その輪廓の曲線をエンタシスと申すさうです。これはギリシア建築の話ですが、本邦の古建築にも往々この様式の柱がありまして、法隆寺建築の柱の中にも、このエンタシスを示す柱制があるのであります。これによつて學者は本邦古代の建築式はギリシアの勢力をうけて居りまして、このギリシア勢力の本邦にまで傳はつて居ることは、とりも直さず中アジアと本邦との間に、何等かの方法によつて、又知らず識らずの間にか、あるひは自覺してか、その邊は明瞭にわかりませずとも、とにかくある意味におきまして交通のあつた證據となるのであります。私の考では自覺してゞはなく、知らず識らずの間に佛教と共にかやうなる建築式が彼のガンダーラ邊より傳はつたものであらうと存ず

るのである。伊東工學博士の法隆寺建築論にその中門の柱制を説明致して左の如くに述べてありまする。

中門建築中ニ就テ吾人ガ尤モ奇トスル所ハ其柱ノ形狀ニ若クハナシ、其柱ハ礎盤ナクシテ直ニ地上ニ樹立スルヿ猶ホ希臘「ドリック」式ニ於ケルガ如ク、而シテ其輪廓ハ希臘ノ所謂「エンタシス」ト名クル曲線ヨリ成リ、其直徑ハ底部ニ於テ一尺七寸六分アリト雖トモ、底部ヨリ上方柱長三分ノ一ノ所ニ於テハ一尺八寸四分餘トナリ、三分ノ二ノ處ニ於テ再ヒ一尺七寸六分トナリ、其頭部ニ於テハ迫テ一尺四寸トナル（第三十三圖）



法隆寺建築論附圖第三十三圖

以上ノ結果ヨリ其形狀ヲ考フルニ其輪廓ハ下部ヨリ柱長三分ノ一ニ當レル所ヲ起點トシテ上下ニ向テ同一ナル曲線ヲ畫クモノニシテ、上部長ク延テ「大斗」ニ至リ、下部ハ短ク地盤ニ畢ル、之レ「クラシック」建築ノ所謂「エンタシス」ト相均シカラサル所以ナリ、然レトモ更ニ一歩ヲ進メテ考フレバ、彼ノ「エンタシス」ト唱フルモノハ數學ノ所謂「コンコイド●オブ●ニコミデス」ト喚ブモノタリ、而シテ法隆寺中門ノ柱ノ輪廓モ亦タコレト同性質ノ曲線ヨリ成ルモノト、認テ可ナルモノナリ、只タ東西ノ人ノ嗜好ノ異ナルヨリシテ、コノ曲線ノ系數ニ些少ノ差異ヲ生シタルニ過ギザルナリ、其他又「大斗」ノ下ニ「ネッキング」ノ意ナル「皿斗」ノ一種アリ、若シ夫レ以上ノ事實ヲ解釋スルニ歴史的觀察ヲ以テシ、東西交通ノ結果トナスニ至リテハ、余ノ曾テ深ク信スル所ナリ、

古建築の例はこの一つにしておきまして、次に他の類の實例を出しませう。就ては先づ古模様に就ての一例より始めます。奈良朝の器物の裝飾に、種々様々の縱横自在の運筆を以て畫きました模様がありまする、その模様にはいろ〳〵種類のあることで、こゝに一々申上げて居る暇は無論無し、又その道の專門雜誌も專門圖譜などもありますので、その方で篤と御覽になることとしまして、こゝには葡萄唐草、シナ人の所謂葡萄文の模様に就て御話しやうと思ひます。

この葡萄は今は文字がきまつて居りまするが、古くは左様でないので、多く蒲桃とか蒲萄とか書

きました。葡萄は固より蒲にも似て居らず、又その實は更に桃とも似て居りませぬから、この蒲桃の二字には一向意味がないといふことは、よくわかつて居ります、いづれ何か漢語以外の原語を音譯したものでありませう。これはギリシア言葉の ὁ βότρυς. a bunch of grapes（ボトルス）を音譯したものであらうといふことですが、いかにもこれは左様としか思はれない、例のシナ流の語尾を切りあげて成るべく言葉を短くする仕方で、このボトルスのルスを省いてボトだけをうつしたのでありませう。この葡萄と申す果物は本來は果物として食べますよりは酒を釀します原料として用ひましたもので、ギリシアの神話によりますれば、デオニソスがエジプト、小アジア、メソポタミア、ペルシアと順々に、遂にはインドまでにも農作物の一として敎へてまわられたと申すことなので、本來ギリシア人の特につくりました品で、それを太古の世に、上に申しまする國々の人民が學んで輸入したものかと想像致されるのである。とにかく歷史時代におきまして、小アジアよりメソポタミアにかけ、又カスピ海の南岸地方などは葡萄酒の產地として鳴つて居りますることで、無論疑ふべき理由は毫も發見せぬ次第なのである。年代が下りまして元の世の中になりましては、イリ河盆地におきまして住民が葡萄酒をつくつて居りまする。鳥渡地理書の上から見れば、イリ河の盆地あたりでは、餘り寒くて、とても葡萄は實るまいかと思はれるやうですが、實際つくられるものと見えまする。ましてそれよりも西南のシル江中流の地ザラフシャン河の流域などにおきまして、

盛に植ゑ付けて居ましたことなどは、一向驚くに及ばぬことと思はれる。で、太古より今日に至るまで、ペルシア人は大酒飲を以て鳴つて居りまして、宴會と申せば主客互に散々に鯨飲致すので、面々酒量の多いのが自慢で、たやすく醉ひ倒れるものは、到底宴會の席へは耻かしくて出られぬ姿でありまするさうです。かく多分に用ひまする故に、呼吸が酒くさくなりましてみつともないですから、柑橘類の花を盃に浮べまして、酒に香をつけ、酒くさい呼吸を胡魔化すと承はるのです。しかし是事はペルシア人の工夫いたしたことではなくアッシリアの古より行はれましたる風習と思はれます。

シナ方面におきましては、よくわかつて居る通りに、漢の武帝の元狩中に張騫を西域へ遣はされた時に、張騫が西域よりお土產として持つて參つたので、葡萄が始めてシナへはいつたと申すので、それよりシナにおきまして少々ながら葡萄を栽培致しては居るですが、實際に葡萄酒を釀したかどうか、その邊は存じませぬ、恐らくつくりますまい。唐の時代に至りますと、西域との交通が盛で、葡萄酒は可なり長安の都あたりにあつたらうと思はれまする。現に段成式はか様にいふて居ります。

此物實出於大宛、張騫所致、有黃白黑三種、成熟之時、子實逼側星編珠聚、西域多釀以爲酒、每來歲貢。

しかしシナ人一般に用ひましたか、どうかその邊は覺束ない、それは彼の葡萄美酒夜光ノ盃の絕句

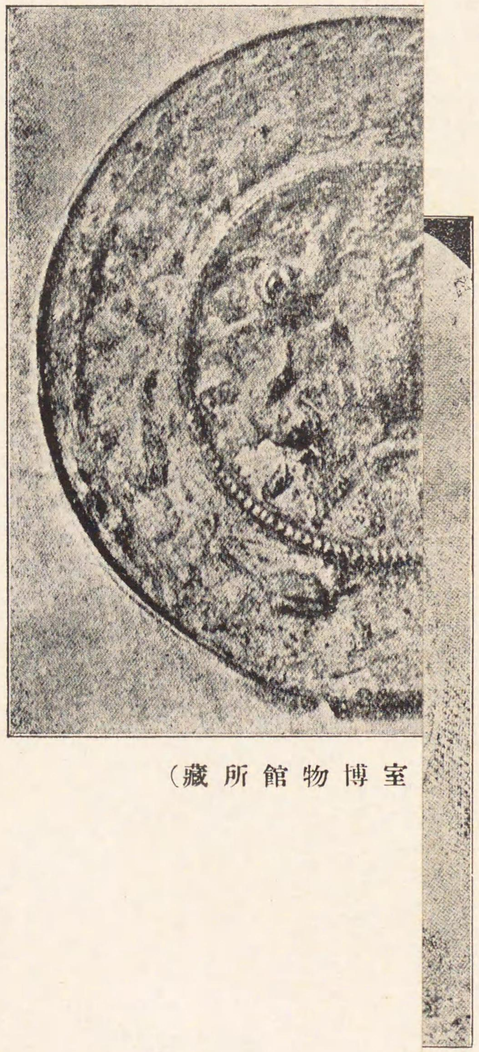
より推しましても西域へ向つた邊境の人民が飲んで居つたといふことがわかるのです。

葡萄酒のことはともかくもとしましても、葡萄文を裝飾用に器物に用ひたことは頗る古いのでありまして、勿論これも西域から學んだことに違ひないのです。葡萄文様はアッシリアに於て用ひられてゐまするで、其のペルシアに傳はりたることは推察いたすべく、轉じてギリシア式の葡萄唐草と成りましたかと思はれます。これがギリシア文化と共に中アジアにはいりまして、それより所謂大宛（フェルガナの本部）に傳はり、それよりシナへはいつたのであると思はれまして、漢鏡の頗る古いと思はれるものには正式の葡萄唐草の鑄出してあるのがございます。しかし本邦にはこの種の恰好なる標本が傳はつて居るかどうか存じませんから、正式よりはよほど崩れてアッシリア文様に酷似いたすが、とにかくシナの古葡萄唐草の確實なる標本の内でありまするで、こゝに掲くることゝ致しました（第二圖）。この標本は去る明治三十三年十二月に大和國宇陀郡松山町の奈良時代の古墳より發見しました所謂葡萄鏡で、傳來は極て確實であります。質は青銅で、重量は九十九匁、鏡面の直徑九、六五サンチメートル側面の厚さ一、一〇サンチメートルであります。葡萄唐草は耳の周（まはり）に一種の形式動物と共に鑄出してありますが、已によほど形式に流れて居ります。動物は元と何を示したのか是の標本では明でありませんが、獅子であらうと思ふ理由があります。

又この文様は啻にシナに止まりませんで、本邦までへもはいつて來て居ります。それは法隆寺

第二圖

の古青銅鏡



（藏所館物博室